

俺は大和さんに怒られたい。

LinoKa

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただただ、ただ大和さんに説教されたい。あ、ドMじゃないから。

## 目次

馴れ初め

第1話 きっかけ | 1

第2話 怒られる術 | 7

第3話 昼飯 | 14

第4話 事故の域を超えてる | 21

第4・5話 秘書艦1日目の夜 | 28

慣れて来た頃

第5話 調子に乗りやすいタイプ | 35

第6話 学習しろよ | 46

第6・5話 姉妹喧嘩の夜 | 56

第7話 知らぬが仏 | 62

第8話 過去最大に怖かった。 | 70

第9話 固い絆 | 78

第7〜8話 (裏) 性器を見まくった提督の1日の裏 | 85

第10話 ハンカチ | 95

第11話 男前過ぎてもう…… | 104

第12話 護るべき物 | 117

第12・5話 スマホ | 127

慣れて少し経った頃が一番危険

第13話 仲が良いほど喧嘩なんてしないから。意見噛み合っていないだけだから | 133

第13話 (裏) 嫌われたくないんです | 141

第14話 原因がわかればごっちのもんよ | 147

第15話 勘違いしたままだよこれ | 154

第15・5話	ヘタレはヘタレだった	162
第16話	頭で考えてる事と、目の前で起こる事はどうしてもかみ合わないことがある	167
第17話	安心して、と言われて安心できる奴は大抵不安になつてないから	175
第18話	慣れて来た頃つてのは本当に危険だよね。	182
第18・5話	SはどこまでいってもS	191
	交際始めました。	
第19話	夢	196
第20話	バカは学習をしない。	202
第21話	喧嘩は「ごめんなさい」が重要	209
第21・5話	飲めなかった。	215
	夏になった。	
第22話	避けても避けられないものがある。	221
第23話	コミュ障は時に人をイラつかせる。	227
第24話	場の雰囲気と天気は関係ない。	235
第25話	エッチすると性格が変わる。	242
第25・5話	感想。	247
第26話	波乱のビスマルク。	252
第27話	言ってることがブーメラン。	259

## 馴れ初め

### 第1話 きっかけ

コミュ障、という言葉がある。

他人とコミュニケーションを取れない、もしくは取ることが苦手な人種だ。

コミュ障の中でも、他人とコミュニケーションを取ろうとする人種と、コミュニケーションを取ることを諦める人種の二つがある。

後者はどうだか知らないが、前者はそれの中でさらに二つに分かれる。何とか会話を頑張ろうとするコミュ障か、会話以外の方法でコミュニケーションを取ろうとするコミュ障か、だ。

後者は大体、子供の頃からの天性のかまちよであることが多い。話をしたいが、何を話せばいいかわからない。だから、チョツカイかけて話題を作ろうとする。

俺は、その後者だった。後者であってしまった。後者であろうとしたわけでなく、何でか後者なのだ。

今も、何となく誰かに構って欲しいが、秘書がいない執務室には俺しかない。

「……………飽きた」

仕事飽きた。ペンを机の上に放って、椅子にもたれかかる。……………眠いな。ゲームしたい。

すると、コンコンとノックの音がした。慌てて俺は仕事に戻りながら「どうぞ」と返した。

「失礼します」

うちの第一艦隊のご帰還だ。と、言っても報告は旗艦しかこないけど。だってせっかく戦闘終わらせて帰って来たのに休めないなんてかわいいそうでしょ。そもそも、こっちは遠くからとはいえ、指揮を取ってるわけなんだから、結果は知ってるし。

だけど、形式的には報告してくれないと困るので旗艦にだけ来て

らってる。

その旗艦は大和さんで、部屋に入ってきた。

「帰還致しました。作戦完了です。小破、中破、大破、全ていません」  
「お疲れ様です。じゃあ、あの……アレだと思ってるんで、出て大丈夫です」

アレってなんだよ、と思うかもしれないが、「作戦終了したばかりなんだし、疲れてるでしょ？」という意味が含まれています。

まあ、それくらい言わなくても向こうは分かると思うから、「アレ」という短い言葉で伝えた。

「……了解しました。失礼しました」

大和さんはそう短く言うのと部屋から出て行った。

コミュ障とカマチョを兼業してる奴は、人に話をかけることができない。だから別の方法でチョツカイ出すのだが、俺に他の人をこの部屋にとどめる会話スキルはない。

よって、手放してしまった。ヤベエ、面倒臭いな俺って。

「……仕事するか」

暇だし。

演習、近代化改修の報告書は終わった。後は出撃と開発建造と遠征の分だけだ。ちゃっちゃと終わらせよう。

+++++

5時間後、仕事が終わらない。忘れてたんだよ、今日は何を思ったか、ビスマルクレシピアホみたいに挑んだんだった。

出撃や建造をすればするほど、報告書の量が増えるのは当然だ。ならしなればいいだろ、と思うかもしれないが、それでは戦争にならない。

あー、畜生……やっぱり、出撃は1日2回までだな。

まあ、自業自得だし仕方ないか。そう思って、パソコンで文字を打ち込む。ちなみに、ワードの隣のニコニコ動画を見ながら作業するのは言うまでもない。

明日に響かないように、なるべく早めに終わらせるか。そう決めてカタカタとキーボードを叩いてると、ノックの音がした。

「っ!?」

反射的に動画を一時停止した。

こ、こんな時間に誰だ!? ヤバい、完全に油断してた。どうしよう……!」

「ど、どうぞど?」

考えがまとまらないうちにOKの返事をしてしまった。

入って来たのは、大和さんだった。

「な、なんでしょうか……?」

「いえ、今日は出撃後に明日のご予定を仰らなかったなので気になったのですが……」

げっ、確かにいつも翌日になって呼び出すのが嫌だったから、予め出撃とか遠征の時間と編成を伝えるようにしてたけど……。忘れてた。

「忙しかったですか?」

「いや全然。あー、明日は出撃無し。演習も挑まれたら、古鷹さん、瑞鶴さん、榛名さん、霞、朝潮、瑞鳳の編成で相手してください。こっちから挑むことは無いんで」

「分かりました」

キーボードを打ちながら、そう答えた。

コミュ障とはいえ、俺だつて話を振られれば答える事は出来る。ただ、必要以上の事は言えません。

「……………」

「……………」

……………あの、なんでまだこの部屋にいるの? あ、まだ出てっついていよって言ってなかったっけ。

「あ、あの、どうぞ出て下さい。おやすみなさい」

「いえ、その……今はお仕事ですか?」

「え? はい」

何、俺って仕事するように見えない？何それひどい。泣きそう。

「こんな夜遅くまで？」

「こんなって、まだ22時ですけど」

「い、いえ、でもいつもはこの時間だと執務室の明かりは消えていますよね？」

え、なんでそんなことまで知ってるの。や、確かにこの時間は今頃自室でゲームしてるけど。

「まあ、今日はちよつと仕事多くて。けどま、全然大丈夫なんで」

そう言つて、ワードに文字を打ち込み続ける。動画の再生は後でいいか。

「……………」

「……………」

あの、この人なんでまだいるの？

チラツと見ると、大和はぶくーつとふくれっ面で俺の事を睨んでいた。

えっ、なんで怒ってるの？

「提督」

「は、はい」

「知っていますか？他の鎮守府では、秘書艦というのが存在するんです」

「は、はあ」

「仕事の手を止めてください」

怒られたので、キーボードを打つ手を止めた。

「普通、その様な執務は秘書艦と二人でやるものなんです」

「は、はあ」

「何故、提督は秘書艦をお決めにならないのですか？」

「や、一人でも全然できるんで」

「提督、大和は今、お説教をしています。黙って聞いてください」

「え、はい」

え、これ説教だったの？てか、大和さん顔怖っ。

「前々から思っていましたけど、提督は私達とコミュニケーションを取

らなすぎです。いつも一人でこの広い部屋で仕事をして、食事も食堂の一番端に座って、最低限の事しか私達と会話をしません。なんですか」

それは、あれです。コミュ障だからです。

「その癖、食堂でご飯食べてる時、チラチラと周りの艦娘を見てますよね。何なんですかあなたは」

おいバカやめろ。人の心を抉りに来るな。

「艦娘とのコミュニケーションも大事な仕事の一つです。提督の的確な指示には、私達も信頼を置いています。その他の部分は、私達は提督の事を全く知りません。一部の駆逐艦の間では、怖がられていますよ」

え、マジか。それは初耳学。

「艦隊とは、全員の力を合わせて成り立つものです。その全員の中に、提督も含まれているのですから、忘れないで下さいね」

それは分かるけども……。まあ、大和さんが正しいか。頷いておこう。

「……………はい」

素直に返事をする、「よろしい」とでも言わんばかりに大和さんは優しく微笑み頷いた。そして、俺の隣に椅子を用意して座った。ちよつ、近い近い近い良い匂い。

「では、大和も手伝います」

「えっ？なんでそうなるの？」

思わず口に出してしまった。

すると、さつきまでの優しい微笑みが嘘のように烈火のごとく怒った顔になった。

「……………さつきの話、聞いていらっしやらなかったのですか？」

「あ、いえ、なんでもないですっ」

「では、私は何をすればいいですか？」

「部屋に戻」

「提督？」

「……………らないで、その書類の表紙に判子を押してホツチキスでま

とめて下さい」

「はい」

うちの艦隊にも、秘書艦が出来た。

内心、ドギマギしながらも、俺は少し嬉しかった。あんな風にお説教されたのは、中学の時、好きな女の子の靴の中にザリガニを入れた時以来だ。それ以来、友達もいなくなっただし、教師から見放されるようになったからなあ。

それから、如何に自分がダメな人間だったかを知って、他人の気持ちを考えてなかったかを知って、どれだけ人を不快にさせたかを知って、それからなるべく人と関わらないようにして来た。

そんな俺に、まだ説教をしてくれる奴がいる。

俺は、ふと隣の大和さんを見た。真面目な表情で、俺に言われた仕事をこなしている。

ああ、もっと、この人に怒られたい。

そう思うように、なってしまうた。

## 第2話 怒られる術

翌日。布団の中で俺はゴロゴロしていた。今日は出撃の予定も、演習の予定もない。

だから今日は朝遅いのだ。布団の中で10時半くらいまでゴロゴロしていいよと思いい、布団の中に潜った。

その直後、俺の部屋にノックの音が響いた。

「提督、大和です。マルキューマルマルを回りましたが、どうかさされましたか？」

えっ、何急に……あつ、そういえば昨日、秘書艦を付けるとかそんな話になってたつけ……。や、でもだからって起こしに来ますかね普通。

どうしよう……。いいや、寝たふりしちやえ。

「提督ー？」

大和さんの声だ。うん、無視だな。流石に部屋の中に入って来るような事はないだろう。

「提督ー？……寝てるのかな。入りますよー？」

おいおい、マジかよこの女。普通に入ってきて来たよ。

「提督ー？……って、なんですかこの部屋。散らかし過ぎですよ」

るっせーな。ほっとけよ。どうせあんまこの部屋にいないんだから良いんだよ。

「むう、寝てるんですか？提督ー」

むう、じゃねえよ。寝てるんだから放つとけや。

大和さんは俺の布団の周りをウロウロと歩き回った後、「んっ？」と声を漏らした。俺の枕元に落ちてる漫画を拾った。

……あつ、やばい。それ監獄学園だ。あの漫画はクッソ面白いのだが、多分女の人を読んだら……、

「な、なに!?この卑猥な漫画は……!」

ああ、やつぱさそうなるよね。死にたい。

「て、提督はこんなものを読んで……!!?」

キツ、と真つ赤な顔で俺を睨む大和さん。あ、やばい。目を閉じないと……。

「提督、起きなさい!!??」

「あぐっ!?!?」

漫画を顔面に叩きつけられた。

「いつてえ!!??背表紙の角が……!眉間に……!!??」

おでこを抑えて悶える俺に、大和さんは言った。

「提督!艦隊の司令官ともあろうお方が何時まで寝てるつもりですか!?!?」

「だからって漫画顔面に叩きつけなくても……」

「それに、なんですかこの漫画は!?!?艦隊の司令部ともあろうお方が……!」

「どんだけ艦隊の司令部聖人じゃなきゃいけないーんだよ。艦隊の司令部だつてな、男なんだよ、人間なんだよ。」

それに、監獄学園はエロ漫画じゃない。ちよつとエツチな部分があるだけだ。

「チツ、うるせーな。アフロダイAみたいな胸しやがって……」

思わず小声で愚痴ると、大和の表情はさらにクワツと悪化した。

「な、に、か、い、い、ま、し、た、か!?!?」

「いえ、何も」

「早く着替えて執務室に来なさい!それと、この漫画は没収します!」

「えっ、な、なんで!?!?」

「こんなもの、必要ないでしょう!?!?」

ああ、怒られてる……。

はっ、いやいや落ち着け俺。流石に自室の数少ない娯楽が奪われるのは困る。

「あの、それ別にエロ漫画とかじゃないので……没収はちよつと……」

「ダメです!そもそも、艦隊司令部に漫画があること自体……!」

「や、そういうんじゃない。それ……」

男の股間も出て来るんで、そんなもの大和さんの部屋にあると……

あれじゃないかな、武蔵さんにバレたらアレでしょ？と言おうと思っただが、そこで台詞は止まった。

もしかしたら、大和さんがさつき見たシーンは、クソ漏らしが副会長に股間を鞭でいじられてるシーンだったかもしれない。

女の子は男よりエッチだと聞くし、もしかしたら漫画を読みたいだけである可能性も……もしそうなら、むしろ気付かないふりして、貸してあげた方がいいんじゃないか。

「……………何でもないっす。どうぞ持っって下さい」

「……………え、えらく素直ですね……………」

大丈夫、大和さん。俺は誰にも言わないから。そもそも言う相手もないし。でも、武蔵さんにはバレないようにね。

「……………なんか、失礼な勘違いしてませんか？」

「や、してない。じゃあ、着替えるんで。出てもらっていいですか？」

「了解しました」

「あ、これまとめときますね」

「え？あ、うん？」

監獄学園全巻紙袋にまとめて部屋の外に置いた。

「……………あの、提督？ホント何か勘違いしてませんか？私別に……………」

「あの、着替えるんで……………」

「……………？ はっ、す、すみません！」

慌てて部屋を出て行った。

うむ、やっぱり大和さんはムツツリスケベか。

なんて失礼な予測をしながら、とりあえず着替え始めた。

+++++

着替えを終えて、ついでに朝飯と歯磨きも終えて執務開始。その間に、大和さんは釈然としない様子ながらも監獄学園を自室に持って行ってた。

で、仕事開始。大和さんが隣に座って聞いて来た。

「大和は何をすればいいですか？」

「えつと……じゃあ、部屋に」

「提督？」

「や、冗談。えつと……開発任務全部お願いします。最低値でいいんです。結果は後で紙に書いて渡して下さい」

「了解しました」

微笑みながら、頷いて大和さんは出て行った。わざわざ隣に座ってくれたのに、また部屋から出してしまつて、少し申し訳なかったけど、大和さんは何一つ文句を言わずに出て行った。良い人だなあ。

そんな事を思いながら、パソコンを起動。過去に使つた開発の報告書のテンプレをコピー。あとは開発に使つた資材の数値と結果だけ変えれば報告書は完成。

建造した艦娘は近代化改修するから、そつちの報告書も作らないと。まあ、こつちもテンプレあるんですけどね。

今日は出撃の予定は無いし、後は演習次第かな。

「……………仕事完了」

だからゆつくり寝てたかつたのに。大和さんはクソ真面目だから、仕方ないのかもしれないが。

……………暇だ。誰か来ないかなあ。いや、来られても困るんですけどね。

遊んでるか。多分、開発20分くらい掛かるでしょ。

「小学生の時の昼休みと同じ時間か」

今にして思えば、昼休み20分ある上に、昼飯の時間とは別に限られてるとか反則でしょ。いや、今は鎮守府に勤めるから昼休みも何もかも全部俺の思いのままだけど、大学とか食堂アホみたいに混んでる癖に昼休み45分だからね。

席取り合戦やつてたなあ。

はっ、いかんいかん大和さんが帰ってくる前に遊ばないと。

「ニコニコでも見てるか」

暇だし、20分という時間はとてもちょうど良い。

パソコンを起動させた直後、大淀さんが部屋の中に入って来た。

「失礼します」

「!?? は、はいっ?」

「演習の申し出がありました。昨日のメンバーでよろしいですか?」

「は、はい。それで、お願いします……!」

「では、失礼しました」

大淀さんは部屋を出た。

演習か……仕事が増えた。まあいいや、作戦指揮は古鷹さんに任せよう。

「……………報告書途中まで作っておこう」

キーボードを打ち始めた。

えーっと、編成とその編成した意味、その後に結果と考察かな。

……………あの編成に意味なんてねーよ。テキストに思い浮かんだの選んだだけ。どうしよ。

古鷹、榛名、瑞鶴、蒼龍、朝潮、霞、か……………。と比較的、練度の低い艦娘を選んで、古参の古鷹さんの指揮の元でどのように立ち回りを覚えるか……あ、ダメだ。蒼龍と古鷹さんほとんど同期だった。

「……………どうしたもんか」

……………後回しにしよう。面倒臭え。

それより、大和さんがいない間の休み時間が終わってしまう。ニコニコで何でもいいから動画を……………!

「お待たせしました、提督。開発任務、完了しました」

帰って来ちゃったよ……………。早いなおい。

大和さんの手元には開発資材が四つある。

「申し訳ありません。全部失敗してしまいました」

「あ、いや全然いいです。任務成功させたかっただけなんです。開発資材無駄にならなくて良かったです」

「ほんとに申し訳ありません……………」

「いや、いいってマジで」

謝られると何故かこっちが申し訳なくなる。これ、コミュ障の性分な。

「でも、ただでさえ私は補給で資材を多く消費するというのに、開発でまで資材を無駄にしています……………」

「あの、マジ気にし過ぎだから。大体、開発任務でちゃんと成功すれば大本営から上塗りして資材送られてくるから平気ですよ」

「それならいいんですけど……」

ふう、ほんとにクソ真面目は大変だな。こっちのフォローも大変だよ。これだから秘書艦なんていららないんだよ。

自分で全部やれば、責任は全部自分で負える。

「それで、お次は何を？」

「今、開発の報告書終わらせて印刷するから、昨日と同じように判子とホツチキス」

「……あの、中身の確認とかはしなくてよろしいのですか？」

「いらない」

「で、でも、万が一提督の書類にミスがあつたら……」

「そしたら俺の所為だから平気ですよ」

「いや、何も平気じゃないですよねそれ」

「え？あー……」

そういえば、昨日はちゃんと周りの艦娘を頼られて怒られたんだっけ。その言い分は間違つてないどころか正しい。

俺だって人間だから、ミスしないとは限らないし、ここで内容をチェックしてもらうのは、当然といえば当然な判断だろう。逆に、ここでチェックしてもらわないのは大和さんに怒られる未来しか見えない。

だがしかし、俺はその未来を選ぶ。

「いや、チェックしてもらわなければ、ミスは俺一人のミスで済むでしょ？チェックしてもらつて、それでもミスがあつたら大和さんも怒られるんですよ？」

如何にも大和さんの昨日の説教をまるで無視した答えを言った。これでまず間違いなく大和さんは……、

「提督は、昨日の私の話をまるで聞いていなかったんですね？」

ほら怒った。

ああ、でもその顔はやめて。すごく怖いから。

「提督は何も分かってないんですね！私昨日言いましたよね！？艦隊

は提督も含めた全員で作っていくものだと……!」

「はい、ごめんなさい」

「何、ニコニコしてるんですか! バカにしてるんですか!?!?」

「ニコニコしてないです」

このまま説教は昼まで続いた。

### 第3話 昼飯

説教が終わり、俺と大和さんが黙々と仕事をしていた。その間、俺は大和さんに怒られる方法を模索していた。何とかして怒られたいが、大して仲良くない人にちよっかいを出すと、嫌われて過去の過ちを再びから返すことになる。

だが、すぐく構って欲しい自分もいる。隣の大和さんは説教した後、一言も話してないからか、とても機嫌が良さそうには見えない。どうしたものかと考えてると、隣から「ぐうっ」とトリコみたいなお音が聞こえた。

「……………」

「……………」

チラツと横を見ると、大和さんが顔を真っ赤にしていた。で、チラツと俺を見る。チラ見同士で目が合った。

「……………」

「……………」

……………だめだ、今笑ったら殺される。怒られるんじゃないやなくて殺される…………。いくら怒られたくても、痛いのは勘弁だ。

いや、でも、大和さん…………、

「……………ぷふっ」

「あー！」

余りにも、「聞こえた？聞こえてないよね？」みたいな何かに懇願するような涙目だったので、思わず吹き出すと大声が聞こえた。

「笑いました!?今、笑いましたね!?」

「……………笑ってないです」

「嘘です！絶対笑いました！」

涙目で突っかかって来る大和さん。俺はそれを面倒臭そうに受け流しながら、立ち上がった。

「お昼にしますか」

「今、笑いましたよね!?」

「分かったから、昼休みにしましょう。1時間後に再開で」

「て、提督！誰にも言わないでくださいよ!!?」

「言いませんよ」

言う相手いないし。

俺が執務室を出ると、大和さんは慌てて後ろを追いかけて来た。

そのまま、二人並んで食堂に向かう。つか、初めて並んで立つたけど、この人俺より身長高いな。

「……………」

「……………」

あの、なんでついて来るの？

いや、どうせ「艦娘とのコミュニケーションがどうの」とか言い出すんだらうけど…………。

「あの、秘書艦だからって無理について来る必要ないですよ?」

「ダメです。昨日、艦娘とコミュニケーション取るのも仕事だと言ったばかりじゃないですか」

「あ、はい。そうですね…………」

「今日は私とずっと一緒にいてもらいますからね!」

「え、何それプロポーズ?」

「っ!?? は、はあ!??」

あ、やべつ。声に出てた。

さらに顔を真っ赤にして大和さんは俺にガミガミと怒鳴り始めた。

「だ、誰が誰にプロポーズするんですか!」

「や、冗談ですからそんな怒らないで。…………てか、ドン引きしないで」

ただでさえ二人きりの執務室なのに、ドン引きなんてされたら気まぐずくて仕方ない。また、ドン引きされたら、もう怒ってもらえなくなる可能性も考慮しなければなるまい。

「まったく…………」

「……………」

ま、いつか。学食で知らない人が隣に座って来たと考えれば。

そのまま、会話を一言もすることなく、食堂に到着。お昼には少し

遅い時間だから艦娘は少ない。俺としてはその方がありがたい。  
食券を買うために、券売機へ歩いた。

「……………」  
「……………」

何となく、大和さんに先に買ってもらおうと思つて待機してるのだが、なかなか買おうとしない。隣を見ると、大和さんは俺に言った。  
「お先にどうぞ」

「あ、いやいいです別に。俺、人を待つのは好きだけど人を待たせるの嫌いですから」

「お先にどうぞ」

「や、まだ何食うか決まってるじゃないし……」

「お先にどうぞ?」

「……………じゃあ、お先に」

そう思つて、俺はどれにしようか少し考えた後、唐揚げ定食のボタンを押そうとした。

券売機の一番下のボタンに、「赤城盛」「加賀盛」「大和盛」「武蔵盛」のボタンがあった。

色々と察した俺は、見なかった事にして券を購入し、カウンターに出した。後から大和がやってくる。

「あら、提督。他の方と一緒に珍しいですね」

中から間宮さんが顔を出した。

「ええ、まあ」

「唐揚げ定食ですね?大和さんは……………あら?今日は大和盛には」

「わ、わー!わー!わー!な、なんですか大和なんとかって!??わ、私そんなの知りません!」

なんで必死に隠そうとするのか……。別に大食いでもいいじゃん。  
一方の間宮さんは、何も察してないのか、キョトンと首を捻った。

「へ?アレですよ、大和盛はご自身の身長くらいまで」

「へ、へー!??そんなのあるんですか!??知らなかったなあ!今度時間があったら頼んでみますね!」

おい、マジかよ。俺より数センチとはいえ身長の高い大和さんと同

じくくらい盛られた飯って、バリバリ体育系の運動部かよ。

涙目になって必死に惚け続ける大和さんを見ていられなくなり、俺は間宮さんに言った。

「間宮さん、お腹空いてるので」

「ああ、そうでしたね。すぐに作りますから」

そう言っつて、厨房に消えていった。

さて、どうしたものか。大和さんが必死に隠そうとしていた事を俺は察してしまった。

大和さんはさつきから黙り込みながら俺をチラチラ見ている。これは、俺が大和さんの秘密を察したかどうかで、これから気まずいことになるかどうかが決まる。

俺は慎重に言葉を選んだ。

「そういえば、駅前のラーメン屋で特盛30分以内に食い終われば1万円らしいですよ」

「なんですか！挑戦しろっつて言うんですか!?!?どうせ私は大食い女ですよ！」

ちよつと話題を間違えた。

腕を組んで涙目で「ふんっ」とそつぽを向いてしまった。これだからコミュ障は話題を作れないんだよなあ……。

これ以上、何かを言うのと神経逆撫でするような事しか言えなさそうだし、黙ってよう。はあ、またやらかした……。

「お待たせしました。唐揚げ定食とカレー大盛り」

結局、大盛りにしてんじやん、大和さん。

二人で食堂の一席に座った。俺の正面に座る大和さん。普段は、多分武蔵さんとかと食べてるんだろうけど、今日はコミュ障の俺のため二人きりにしてくれただろうな。

だけどね、コミュ障はむしろ大勢と食べた方がいいのよ。だって、自分以外の人たちが盛り上がってくれれば、俺に気を使わさなくて済むでしょ？

まあ、でも今回は大和さんが不機嫌になってくれたお陰で、会話しなくて済む空気になってくれた。後は、さつきと飯を食って仕事に戻

れば、気まずい空気からは解放される。

「いただきます」

「……………いただきます」

食事開始。しかし、間宮さんの作る飯は本当に美味しい。なんでこんな美味しい飯作れんのかな。遠月にも通ってたんですかね。

皿の上のキャベツをそのままモシヤモシヤと食べてると、大和が声をかけて来た。

「提督」

「うえっ!? な、何?」

「一々、驚かないでください…………。いえ、野菜にソースはかけないのですか?」

「え、あ、うん、まあ。俺、たこ焼きにもソースかけないし、餃子に醬油もかけないんですよ」

「な、なんでですか?」

「何となく? かけなくても美味しいから? あ、でもコーヒーに砂糖は絶対入れますね」

「ふふっ、子供みたいですね」

ほっとけ。ブラックコーヒーとかアレ、人の飲むものじゃないだろ。

「大和さんはブラック飲めるんですか?」

「飲めますよそれくらい」

……………ああ、今の答えでなんとなく察した。いわゆる、「飲めるよ? (好んで飲むとは言っていない)」という奴だ。「飲めますよ、それくらい」って言葉の中には、なんとなくだけ「好んでる」というニュアンスが含まれてるようには聞こえなかった。だけど、飲めないこともない、と言う感じだ。

「そうですか、大和さんは大人ですね」

「……………なんですか、その含みのある言い方」

「いえ、別に」

言いながら、野菜を頬張る。

大和さんも、幸せそうな顔をしてカレーを頬張った。その様子を俺

はなんとなく見つめていた。なんか構ってくれそうな気がしたから。予想通りというか、最初は気にせず食べていたものの、途中で俺の視線が気になったのか、大和さんは若干顔を赤らめながら聞いて来た。

「あの、なんですか？」

「……………いえ、その……………何でもありません」

「……………なんですか」

「何でもありません」

「なんですか!?!」

おい、なんでそんな気になんだよこいつ。さっきまで赤らめていた顔は、またまたキツと鋭くなる。

「いや、ほんと大したことじゃないんで」

テキトーに返しながら、俺は唐揚げを一つ食った。噛むと、肉から肉汁が溢れ、口の中に広がる。ああ、ホント美味しい。

「なんですか! 人の顔をじっと見ておいてそれは失礼ですよ!?!」

「ええ……………ほんとに何となく観察してただけだって」

「提督!」

「……………」

うるせえなあ。もう仕方ないから言っちゃおうか。絶対怒るよこの人。

「……………や、その……………大和さんって食べるの早いですよね」

そう言った通り、いつの間にか大和さんのカレーは大盛りなのに三分の二、なくなっていた。

「口も何もかも普通の人と同じくらいの大きさなのに、なんで食べるの早いんだろう、と思ひまして……………」

「人の食事を見ながら何を分析してるんですか! いいから、さっさと食べてお仕事再開しましょう!」

ほら怒った。まあ、怒られても大して気にしないしむしろ喜んじやうからいいんだけどさ。

しかし、なんであんなに早く食えるのか。もしかして、一度にスプーンで掬う量が違うのか? 気になって、カレーを掬う瞬間を見よう

と、再び大和さんの方を見ると、目が合った。

「……………」

「……………」

「こ、こつちを見ていないで早く食べなさい！」

「いだけだだ！頬を引っふあるな！」

仕方ないので、食事を再開した。

## 第4話 事故の域を超えてる

お昼を終えて、仕事も終わった。これで大和さんは俺から解放される。

「ふう、お疲れ様でした」

「はい。お疲れ様です」

テキトーに挨拶した。昼からの作業を開始して一時間弱で終わったので、ここからは遊びの時間だ。

こんなんで給料もらっていいのかな、とも思ったりするが、うちの鎮守府はちゃんと戦果もあげてるので問題ない。

後は、演習メンバーが帰って来て結果を聞かなくてはならないが、それくらい一人で行ける。

それなのに、なんで大和さんは自室に帰ろうとしないんですかね。

「あの、大和さん?」

「提督、このあとに仕事はないんですね?」

「え、ええ。ないっすけど」

「なら、部屋のお片付けをしましょうか」

笑顔でなんてこと言うんだこいつ。

「え、いやいいです。別に不便とかしないんで」

「そういう問題ではありません。社会人、それも人をまとめる立場にあるのですから、身だしなみくらいキッチンとして下さい」

「いやでもあれなんで。俺の部屋今……」

「……………今、なんですか?」

あ、ダメだ。人の言うこと聞かねえよこの人。てか聞く気ねえよこの人。

「じゃあ、自分でやるので別に大和さんは……」

「ダメです。大和も手伝わせていただきます。むしろ、大和がお片付けするので、提督が手伝って下さい」

おい、それどう言う意味だ。

「わ、分かった。分かりましたよ……」

仕方なく、俺は了承し、自室に大和さんを連れて来た。

しかし、確かに改めて見ると汚ねえなこの部屋。漫画とゲームでとっ散らかってやがる。

あ、衣服は汚いの嫌だからちやんとタンスにしまっただけ。

「……………な、なんですか、この部屋は」

大和さんが頬をヒクヒクとさせている。おい、お前は今朝見ただろ  
うが。

「いや、その……………寝る前によく漫画とか読んでたので、その……………枕元から全部手の届く位置に……………」

「何やってんですかあなたは！……………はあ、これが私達の司令官だと思うと、なんだか情けない……………」

そこまで言うかな……………。ちよつと流石に傷付くんだけど。

「まあ、嘆いても仕方ありません。とりあえず、落ちてるものを拾うことから始めましょうか」

そう言つて、大和さんは足元の漫画本を拾い、順番とかまったく気にすることなく、本棚にしまい始めた。

今朝は「漫画なんて必要ありません！」とか、なんとか言つて監獄学園全部搔つ攫つていったのに、今手に持つナルトはちやんと本棚にしまっている。相当、あの漫画読みたかつたんだろうなあ。

まあ、ボヤボヤしてたら怒られるし、俺も片付けるか。そう思つて、布団の上に落ちてるジャンプを拾った。

……………あ、懐かしい。スケダンじゃん。これ、終わっちゃったんだよなあ。ゲスリング部、好きでした。なんて事を思いながら懐かしいジャンプを読みふけてると、俺の手に持っていたジャンプが消えた。

「？」

「提督？何をしているのですか？」

うわっ、やべっ。

「今は片付けをしてるんですよ？漫画を読む時間じゃ、ありません」

「いやーでも懐かしいジャンプって片付けとかの時に読みふけりますよね」

「ふけりません。いいから片付けてください」

手に取ったジャンプを大和さんは本棚の横に束ねた。俺は仕方ないので、別のジャンプを拾って開いた。あ、これ遊戯王カード付いてんじゃない。売ろう。

「提督?」

「はいはいすいません」

怒られる前に、大和さんが束ねたジャンプの山の上にジャンプを置いた。

すると、ジャンプの山と本棚の間に、ジャンプSQがあつた。そういえば、トラブルダークネス読んでみたくて買ったんだっけ。やり放題やって良かったと思えました。

「うわあ、あつたなーこんな話……………」

「提督! いい加減に…………!!?」

思わず漏らした声に反応して、大和さんがこっち見た。俺の読んでいるページを見るなり、顔を真っ赤にした。

「なつ……………ななつ、何を讀んでるんですか!!?」

「あ、いやこれちがうから! ギャグマンガ日和読みたくて買っただけだから! 別に乳首が見たくて買ったわけじゃ…………!!?」

「…………!!? いい加減にしなさい!!?」

ゴンツ、と戦艦のゲンコツを喰らい、俺は顔面から床に叩きつけられた。

+++++

涙目になりながら、部屋の掃除を再開した。大和さんは部屋にある雑誌を全部紐でくくってしまった。

「あの、まだ付録とか出してないんですけど……………」

「知りませんっ」

未だにほんのりと赤い頬を膨らませて、ぷいっとそっぽを向いて、掃除を再開してしまった。

あーヤバイな、やらかした。怒られたい、と言っても今後に支障の

出る怒られ方だけは避けるつもりだったんだが……。

どうしよう、謝った方が良

「提督も早く掃除してください!!?」

「は、はいっ」

思考を遮られる程の声で、俺は掃除を再開した。

しかし、それだけ怒るなら俺の部屋の掃除なんて止めればいいのに。

そのまま、とりあえず床に落ちてる漫画だけ本棚にしまった。それだけでだいぶ綺麗になったが、大和さんはまだ納得してないらしい。

布団をベランダの手すりに掛けた。俺も何かやる事を探そうと思いい、ゲームをしまうことにした。

「ああ、もうっ……布団に埃がたくさんついてる……!」

パンパンと布団を叩く音を聞きながら、俺は懐かしいものを見つけた。

「うおっ、64じゃん」

刺さってるカセットはスマブラ。これは後でやろう。

他にも色々とゲーム機が出て来たが、取り敢えず全部テレビの下の扉の中にしまった。

布団、ゲーム、漫画を片付けるだけで部屋が見違えるように綺麗になった。どんだけ汚かったんだ俺の部屋。

ま、いつか。後は掃除機かけてゴミ拾って、大和さんが干してくれる布団を敷けば終わりだ。

「ふう……疲れた」

「なんかすいませんね。俺の部屋の片付けなんて」

頼んでないけど。

「いえいえ。秘書艦の勤めですから」

大和さんは微笑みながらそう返した。

「それより提督。もう少し清潔にした方が良いですよ」

「すいません。や、こう見えても綺麗好きなんですけどね」

「キレイ好きな人は、あんな埃まみれの布団で寝たりしません」

「衣服とかはその辺に転がってないでしょ」

「それは人として当たり前のラインに立ってるだけです」

つまり、この人の中では衣服をその辺にほっとく人は人として見ないって事か。怖っ。

「では、私は掃除機をかけますので、提督はペットボトルみたいな大きなゴミを回収して下さい」

「了解」

……俺なんかより大和さんの方が指揮するの向いてるんじゃないの。いや悲しくなるから考えるのはやめよう。

しばらく、ペットボトルを拾っていると、ペットボトルのキャップも落ちていた。

あー、懐かしいなあ。うちの高校で流行った奴。まあ、流行ったといっても、俺は友達いなかったから家で一人でやってたんだけどね。

ペットボトルをデコピンの形にした人差し指と親指の間にセットして飛ばす奴。不規則な変化球を、大人から子供まで楽しめる総合メディア玩具といっても過言ではない。

ちよつとやってみたくなったため、俺は両手にキャップをセットした。

「ターゲット確認、これより破壊する……!!?」

俺のバスターライフルから2発のペットボトルのキャップが発射された。

キャップA（↑キャプテン・アメリカではない）は、本棚に当たったあと、天井に当たり、壁に当たって大和さんの頭部に、

キャップBは、本棚に当たったあと、床に落ちて、大和さんのスカートの中へ入り、恐らくお尻に直撃して跳ね返り、スカートからキャップが落ちて来て、コロコロと転がった。

つまり、2発とも大和さんに直撃した。

大和さんは「ひゃうっ」と可愛らしい悲鳴を上げて、慌ててスカートを抑えた。

冷や汗を流していると、大和さんはゆっくりとこつちを見た。

「……………何したんですか?」

「いや、違うんですよ。わざとじゃないんです。てかわざとやる方が難しいでしょ」

「いいから。私は何をしたかを聞いているんです」

「いや、待って待って。お願いだから待って。わざとじゃないんですって」

「質問に答えなさい」

「はい」

「こ、答えなさい……？答えてくださいじゃなくて答えなさいって言った？思わず即答しちゃったじゃねえか。」

「その……ペットボトルのキャップをデコピンで飛ばして、不規則な変化球を楽しむアレをやってました」

「提督。大和と提督は今、誰の部屋を片付けているんですか？」

「僕の部屋です」

「ただでさえゴミが多い部屋なのに、それを散らかすような真似しないで下さい!!？それと、いくら二人きりだからってセクハラはやめて下さい!!？」

「いや、セクハラは誤解だつてばよ」

「人のお尻にペットボトルのキャップを当てるとして何を言ってるんですか!?!？」

「いや本当に！テクトーに本棚に向けて撃ったら跳ね返って跳ね返って頭とケツに直撃しただけで……!」

「ケツとか言わないで」

「あ、すいません」

ヤバい、これはマジでキレてる。いや、まあ俺が悪いんですけどね。「や、でも本当にわざとじゃないんです。てか、不規則な変化球なんで当てる方が難しいですよこれ」

「……………」

「や、開き直ってるわけじゃないんですけど……」

「……………」

「はい、ほんとすいませんでした……」

「……………」

誤ると、大和さんはおでこに手を当てて、大きなため息をついた。そして、俺をジロリとジト目で睨んだ。

「……………次はありませんからね」

「はい」

大和さんはそう言うと、掃除機のスイッチを入れた。ていうか、まだ片付け手伝ってくれるんだ。本当良い人だな。

さて、そろそろ俺も真面目にやらないとマジで嫌われる。掃除しよう。

そう思つて、とりあえず投げたペットボトルのキャップを拾おうとした。

ペットボトルを踏んだ。

「ふぬをつ!?」

前に大きく転んだ。何かを掴んで顔面から床に強打した。

「グツ、オオツ……………!!」

良かった、鼻血は出てない。

ヨロヨロと立ち上がつて顔を上げると、目の前にお尻があつた。正確には、純白のパンツを履いたお尻だ。

「……………えっ?」

「……………」

恐る恐る顔を上げると、そのお尻は大和さんの身体に繋がつていた。

つまり、大和さんのスカートを脱がした。

「……………」

「……………いつ、いつ……………」

顔を真っ赤にして、艤装を展開する大和さん。それと共に、口が悲鳴をあげる形へと変形していく。その過程が進むたびに、俺は悟つた。

ああ、死んだなこれ。

「いやああああああああ!!」

女の子らしい悲鳴と共に、全主砲が俺の部屋をなぎ払つた。ゲーム機、一つでいいから無事でありますように。

## 第4．5話 秘書艦1日目の夜

居酒屋・鳳翔。私はビールを一気に飲み干すと、ダンツと机にジヨツキを置いた。

「もうっ！もうもうもうっ!!?あの提督はツ!!?」

叫ぶと隣に座ってる武蔵、カウンターの向こうの鳳翔さんがドン引きした。それに構わず、私は愚痴を続けた。

「起きるの遅いし！えっちな漫画部屋に隠してるし！全然、人と関わろうとしないし！フォローするの下手くそすぎるし！ヤケに人のこと観察してくるし！すぐに集中力切れるし！掃除の最中に漫画読むし！急にセクハラするし！なんなんですかあの人!!?」

「お、落ち着け大和。何かあった？まだ1日目だぞ」

昨晚、私はこの場で、明日から秘書艦として提督をサポートすることを二人にぶちまけた。

早速、今日報告をしに来たのだが、思わず愚痴ってしまった。私は頼んでもないのに鳳翔さんに注いでもらった二杯目のビールを飲んだ。

「何かあったんですか？」

「ありました！ええ、沢山ありましたとも！」

「順番に今朝の出来事から話してください」

鳳翔さんに言われ、ビールを飲んで落ち着いてから話し始めた。

「まず、今朝です。私が部屋に入っても提督寝てたんです。もう9時過ぎていたというのに！」

「ま、まあ、今日は提督も休みのつもりだったのでしょう？それなら少しくらい寝てても……」

「……………夜遅くまでえっちな漫画読んでてもですか？」

「……………」

「……………」

私が言うと、二人の目はジト目になる。

「あいつ……………そんなもの読んでいるのか。前々から気に食わない奴だ

「思っていたが……」

「ま、まあ提督も男性ですし……」

武蔵と鳳翔さんが苦笑いを浮かべる。

「一度、あいつの精神を鍛えてやるか」

「ええ、やつちやって武蔵。ボッコボコに」

「お、お……」

なんで自分でボコボコにするって言うておいて引くのよ武蔵……。

すると、鳳翔さんが聞いて来た。

「でも、えつちな本ってどんな本なんですか？」

「なんだ、興味あるのか？鳳翔」

「ち、違います！ただ、もしかしたら大和さんの早とちりだったのかも  
しれませんし」

「そんなはずありません！たくさんの女の子がお風呂に入ってる絵が  
描いてあったんです!!？そこに五人の男子が覗きに現れていました  
！提督は絶対、アレで覗きの方法を勉強して実行しようとしてたんだ  
わ」

間違いない。私はまたビールを飲み干した。

「そんな、決め付けては提督が可哀想ですよ」

「まず、どんな漫画なのかを見ないと私達は何も言えんな」

「ええ、いいでしょう！見せてあげるわよ！」

こんなこともあろうかと、没収しておいた漫画を持って来ておい  
た。それを、二人の前に差し出す。

武蔵がまず手に取った。

「……………ふむ、プリズンスクールか……。男子が五人で他は全員女子  
の共学、と……………」

「もう、その設定だけで汚らわしいわ……………」

「中身も読まずにそう判断するのは良くないだろう。鳳翔も読むか  
？」

「いえ、私は漫画とかはよく分かりませんので」

武蔵が一卷を読み始めること数分、

「なんだ、確かにエロい部分が多いが、別にエロ本というわけではなか

ろう」

「な、何を言ってるの武蔵!!?」

「基本的にはギャグだろうこれは。しかし、真面目なところはちゃんと真面目というか……ていうか普通に面白い」

「武蔵、あなた正気?それともアレなの?百合とか言う……」

「違う。……これ、2巻はあるか?」

「何ハマってるのよ!」

ああもうっ!と、私は机をバンツと叩いた。

「とにかく、間違い無いんです!だ、だって……!さっきなんて提督、わ、私のスカートを……!」

ああ、ダメ……これ以上は思い出すだけでも、恥ずかしくなってくる。

「顔が赤いぞ、大和。スカートを脱がされたくらいで何をそんなに恥ずかしがる」

んなつ……!こ、この妹は……!!?

漫画読みながらテキストに返して来たのが余計に腹が立った。

「ふんっ!そんな痴女みたいな格好してる子には分からないでしょうね!!?」

「んなつ……!!?だ、誰が痴女だ!」

「今時、サラシしか着てない女なんて、痴女以外の何者でもないわね」

「お前の言えたことか!!?スカートを脱がされたからって、上官を臆装でぶっ放した危ない女が!!?」

「んぐっ……!!?」

「私は確かに痴女かもしれないが、それはこの鎮守府の中だけだ。男は提督しかいないし、問題ないだろう。だが、お前はわざと脱がしたわけでもない提督に主砲をぶっ放した。どちらが問題あると思う?」

鳳翔」

「えっ!!?わ、私ですか!!?え、えーつと……」

鳳翔さんは困った顔で武蔵を見たあと、私を見た。そして、苦笑いを浮かべた。

「あ、あははっ……」

「うわああああん！どうせ私は暴力女ですよー!!?」

「あ、落ち着いてください大和さん。余り良い酔い方ではありませんよ」

「んぐっ、んぐっ……プハアツ！」

「私は更にビールを飲んだ。」

「………なんだかわからないけど、ジワツと目尻に涙が浮かんで来た。」

「………私、提督に嫌われちゃったかなあ……」

「………今度は泣くのか……忙しい奴だな」

「そ、そういえば、提督は無事だったのですか？」

鳳翔さんが会話を逸らした。

「提督は奇跡的に無傷でした。動揺していたみたいで攻撃を外したみたいで……」

「動揺していてよかったです……」

「でも、提督……ああ、明日からどんな顔で秘書艦をやればいいのかなあ……」

問題はここだ。自分を殺しかけた相手が秘書なんて提督は絶対嫌がるだろう。あの提督なら尚更だ。

「何、心配なら何か向こうが喜ぶようなことをやってやればいいだろう。例えば、これだ。濡れTシャツコンテスト」

漫画の一部を私に見せて武蔵は言った。

「な、何よその卑猥なコンテストは!??」

「そのまんまだ。明日、服を着たまま全身に水を被って行けばいいだろう」

「む、無理よ！そ、そんな恥ずかしい事……!!?」

パンツ見られただけでも恥ずかしかつたと言うのに……!!?」

「何、案外許してくれるかもしれないぞ？行って来い、全身潤わせて」「無理無理！そ、それある意味普通に下着見られるより恥ずかしいわよ……」

「なんだ、情けない……」

「そりやいつも下着姿晒してるようなあなたには分からないでしょう」

ね!?？」

「ま、まだ言うかお前……!!?？」

「二人とも、落ち着いて下さい」

鳳翔さんがおつまみを私と武蔵の間に置いた。

それによつて、ひとまず私達は大人しくなった。

「大丈夫ですよ、大和さん。提督は怒ってませんよ」

「そ、そうですか……?？」

「はい。提督は何でも自分で背負い込もうとする方なのでしよう?言  
い換えれば、それだけ責任感が強いと言うことです。今回の事も『そ  
もそも、自分が部屋を片付けておけばよかつたのでは?』と思うはず  
です。ですから、そう慌てないでください」

うつ………た、確かに………!

「じゃあ、私別に嫌われてない………?？」

「はい」

「良かったあ………」

ホツと胸を撫で下ろした。良かった……嫌われてたら明日から秘  
書やりにくいったららない。それに……、

「な、なんですか?？」

気が付けば、武蔵と鳳翔さんがニマニマしながら私を見ていた。

「なあ、大和。前々から思っていたんだが、」

「提督のこと、好きなんですか?？」

「んなっ………!??？」

カアツと頬が熱くなるのを感じた。

「だ、誰が誰を好きなんですか!??？」

「だから大和が」

「提督を」

「こ、交互に言わないで!!?？」

な、何を急に言い出すのよこの二人は!??？」

「でも、今日は掃除結構付き合ってたんだらう?？」

「と言うか、今朝からずっと二人きりみたいですし」

「間宮の話だと、今日は昼飯の時、大和盛じゃなくて大盛りだったらし

いじゃないか」

「好きでもない人と一緒にいる時に、お昼の量を我慢します?」

「だから交互に言わないで下さい!」

あ、ああああもうっ!!? 誰があんな人好きになるのよ!

「まあまあ、誰にも言いませんから」

「そうだぞ。この3人の、この場だけの話だ」

「だ、だから好きなんかじゃありません!」

「でも、気になってはいますよね?」

「これから秘書艦ずつとやるとか言い出すくらいだしなあ」

「……………」

……………『気になってる』と『好き』は別物よね。

「……………少し」

「ほらあ〜」

「な、なんですかその返事! す、好きなわけじゃありませんからね!!?」

「いや、女性の『気になってる』は九割九分九厘『好き』ですから」

「違いますよ! その理屈はおかしい!!?」

「じゃあ落ち着け。まずはどこが気になってるのかを言ってみろ。それ聞いたら私達も判断するから」

武蔵に言われて、私は少し考えた。いや、でもここは言わないと『好き』認定されてしまう。

「べ、別に気になってるってくらいだからね?」

「いいから言え」

「えーつと……二人とも知ってるか分からないけど、この鎮守府のゴミ捨てってどうなってると思う?」

「私の居酒屋や間宮さんのお茶屋さんと食堂なんかは、提督がお店の裏口にゴミ袋をまとめて置いておけって言われてますけど」

「業者か何かじゃないのか?」

「その通りなんだけど、業者は鎮守府の近くのゴミ捨て場までしか来てくれないのよ。で、ほんとに偶然なんだけど、夜中に提督がそのゴミ捨て場までゴミ袋を全部回収して運んでるところを見ちゃったん

ですよ」

あの時は驚いた。あの、艦娘と誰とも仲良くなろうとしない人が、私達が出したゴミ袋を運んでいたんだから。

「へえ……そうなのか」

「意外、ですね……」

「あと、夜中に入渠ドッグの掃除をしていたり、鎮守府の表を掃き掃除していたり、空母の方の弓道場の手入れをしたり……とにかく色々な雑用を私達の見えない所でやってくれてるんです。そういう姿を見た時に、なんていうか……私達と関わろうとしない癖に、提督ご自身の出来る限りは私達をサポートしようとはしてくれてるんだなって思っ……そういうところが、ちよつと気にな………なんですか二人ともその目」

聞くと、二人とも顔を見合わせてから、私を見た。

「……………それ、惚れてますよね」

「完全にメスな顔だったぞ」

「んなつ……………?!?!」

な、なんで本人より先に確信してるのよ!!?

「ほ、ホントに好きなんかじゃないんだから!!? 今日1日、あの人と関わって、何回声を荒げたか分からないんですよ?!?!」

「うわー、聞きました武蔵さん?」

『あの人』って言いましたね『あの人』って」

「な、なんですか二人して!!?ち、ちがいますから!ほんとに違いますからね?!?!」

「二はいはい」

「も〜!!?聞きなさいよー!」

その後は二人してからかってくるのに、私は何度もリアクションしてるだけで、飲みは終わってしまった。

慣れて来た頃

## 第5話 調子に乗りやすいタイプ

あれから、一週間が経過した。

俺と言う人間は、どうやら調子に乗りやすい生き物だったようで、コミュニケーションが大和さんと話す時だけは克服されるようになったところか、たまーにチョツカイ出すようにもなっていた。

え？他の艦娘の時？その時は……、

「失礼する」

「……………あつ」

「あ、長門さん。出撃の報告ですか？」

「ああ。作戦成功、中破以上の者はいない」

「だそうです、如何なさいますか？提督」

「……………小破した瑞鳳、川内は入渠、あとは休み（小声）」

「小破した方には入渠していただき、他の方は今日は休んで良いそうです」

「……………わかった」

長門さんは部屋を出て行った。と、いう具合に大和さんに通訳してもらっています。

大和さんがジト目で俺を睨んだ。

「……………あの、いい加減自分で話したらどうですか？」

「無理ですよ。俺を誰だと思ってるんですか」

「威張らないで下さい」

情けない…………と、言わんばかりに大和さんはため息をついた。

「大和さーん」

「何ですか？」

「ケシカススプラッシュ」

「ひゃっ!?？」

ケシカスをデコピンで飛ばし、大和さんの顔面をスナイプした。

「な、何するんですか!?!?」

「ごめん、指が滑った」

「技名まで言って何を言ってるんですか!?!?」

「デコピンって指を滑らせて発射するものですよ。嘘は言っていないせん」

「た、たしかに……!?!?って、デコピンって自分で言ってるじゃないですか!?!?」

「今仕事してるから。静かにしてて」

「だ、だれの所為ですか誰の!?!?」

声を荒立てる大和さんを無視して、パソコンに向かった。隣の大和さんも「まったく……!?!?」と、言いながらハンコを押した。

「……………」

「……………」

飽きたな。俺はキーボードの前に伏せた。そして、隣りで手伝ってくれてる大和さんの顔を見上げた。

凛とした表情で、仕事をしてる。前々から思ってたけど、この人って美人だよなあ……。すらっと背も高く、綺麗で、仕事もできて……。まるで小鳥遊小鳥ちゃんだよなあ。アレ?あいつ男じゃね?って事は、大和さんも男なのかな。

もしかしたら、そのおっぱいミサイルもマジでミサイルで、実際はあんな大きくないのかもしれない。

……………気になる。

「……………あの、提督?」

「は、はいっ!?!?」

「なんですか?さつきから人の顔ジロジロと……………」

「いや、気になるなあって思ってた……………」

「ふえっ!?!?い、いきなりなんですか!?!?」

……………あつ、ヤバイ。今のはまるで俺が大和さんの事が気になってるみたいじゃないか。

「いや、大和さんの事が気になってるわけじゃなくて」

「……………ああ、そうですね」

「……えっと、」

「……なんだ、なんて説明すればいいのかな。大和さんの何？大和さんの性別が気になるとか言ったらぶっ殺されるよな。」

「いや、なんでもないです」

「な、何ですか!??もしかして、顔に何かついてますか!??」

「ああ、ここに何かついてる」

「う、嘘……!??ちよつと鏡見て来ます!」

「鼻が付いてる」

「!?? て、ていとく〜!」

肩をポコポコと叩いてくる大和。あの、君のそれすごく痛いからやめてくれない?肩折れるから。

「あーもうっ、仕事飽きた。俺、ちよつと休憩してくるから大和さんも休んで下さい」

立ち上がって、俺は自室に戻ろうとした。が、その俺の襟首を大和さんは掴んだ。

「先程、休憩したばかりですよ?」

「い、いいじゃないですか。どうせあとは出撃の報告書だけなんですし」

「ダメです。仕事は早く終わらせましょう」

ふむ、そんなに早く部屋に帰りたいのか?

まあ、そりやそうか。仕事なんてやりたい奴のが少ないだろうし。

「へいへい、分かりましたよー」

「まったく……」

しばらくパソコンを弄っていると、コンコンとノックの音がした。

「どうぞ」

俺は何も言ってないのに、代わりに大和さんが返事をしちやう辺り、すごく慣れて来たなあ。

入って来たのは、大淀さんだった。

「失礼します、提督」

「どうかしましたか?」

返事をしたのも大和さんだ。

「大本営から新しい演習方式のやり方が送られて来ました。明日からの一週間、その方式の成果をテストせよ、との事です。詳細はこちらに」

「……………」

「ありがとうございます、大淀さん」

「では、失礼しました」

執務室から大淀さんは出て行った。

すると、大和さんは俺を見た。

「あの、提督」

「何スか」

「悪化してませんか？こ、コミュ障、でしたっけ？」

「……………えっ？」

い、いやいやいや、それないでしょヤマタケさん。

「いや、だって俺、大和さんとだけは話せるようになりましたし……」

「わ、私だけ……んんっ！コホン、いや、でも他の人との会話は全部私に任せてるではないですか」

……………確かに。

「いつまでもこのままだと、私以外の人とコミュニケーションなんて取れませんよ？」

「……………いや、それでも別によくね？」

「はっ？」

間抜けな声が大和さんから漏れた。

「だって、俺の職場はここだし、それも大和さんがいれば上手く回ると、大丈夫でしょ」

「そ、それはダメです！私が出撃してる時はどうするんですか!?!？」

「じゃあ出撃させない」

「んんっ……………?!?て、提督がどんどんダメになっっていく……………!」

「目の前で言っちゃうんだ」

大和さんってたまに毒舌だよなあ。いや、思ったことが口から出ちゃうだけか。

「まあ、出撃させないのは流石に冗談ですけど、大和さんが出撃してる

間は指揮に全神経を集中させます。執務室に誰も入って来れなくなるくらいに」

「やっぱりダメじゃないですか……」

大和さんは呆れたように眩くと、立ち上がった。

「少し失礼します」

「どこ行くん？」

「ちよつと、廊下に」

大和さんはそう言うと、執務室のドアに手を掛けた。

後ろから俺は輪ゴムを飛ばし、大和さんの首の裏に当てた。

「痛っ!!??て、提督!!??」

「……………俺は何もやってませーん」

「ガキ!!??」

怒りながらも、大和さんは部屋を出て行った。

+++++

10分後くらい、大和さんは戻って来た。……………武蔵さん連れ  
て。

「ッ!!??」

思わず腰を抜かし、椅子から落ちた。尻を床に強打した。

「グオアアツ……………!け、ケツがアツ……………!天衝……………!!??」

「何をやってるんだお前は……………」

武蔵さんから呆れたような声が聞こえた。

「……………で、提督よ。少し用があるのだが、良いか?」

俺はチラツと大和さんを見た。大和さんはここにこにこ微笑んだまま  
何も答えない。

おい!お前だよお前!何笑ってんだクソババア!ちったあ、この状  
況察しろや!!??……………あ、やめて、睨まないで。怖いです。ていうか  
なんでこっちの思考読めるの?」

「おい、提督よ。聞いているのか?」

「は、はいっ!き、聞いてます……………」

「少し時間取れるか？」

「……………」

え、えーつと……無理。仕事はすぐに終わるけど、まともな受け答えできる気がしないし。

断れ、と言う意味の視線を大和さんに送ると、大和さんは俺に微笑んでから、武蔵さんに言った。

「良いわよ、武蔵」

「ヤアアアマトすわああああんツツ!?!?」

「そうかそうか、では来てくれ」

武蔵さんは俺の手首を掴むと、力づくで引つ張り出した。

引き摺られてる俺が大和さんとすれ違った瞬間、大和さんは俺の肩に手を置いて言った。

「頑張つて下さいね、提督」

「ツ!??は、謀つたな！シヤア!??」

「大和です」

微笑みながら手を振つて来た。あ、あの野郎……覚えてやがれ。

+++++

間宮さんのお茶屋。そこに俺は武蔵さんと二人で座っていた。

「……………」

「何、付き合わせてるのは私だ。金は私が持つ（大和から金もらってるし）。好きなものをなんでも頼め」

「あ、いや、いいですよ全然！オレっ……ぼ、僕の方は僕が払いますのでっ……………」

「……………お前はなに怯えている？」

「べ、別に怯えてなんかかないですよ!??」

「いや明らかに怯えているだろうが……………」

だ、ダメだ……………さっきから目も合わせられない……………ていうかこの女なんつー格好してんだよ。なんで今時サラシ？野武士かお前は！その癖、眼鏡とか近代的なものつけやがって！目がオツパイに吸い

寄せられるんだよ！

「いいからここは私に払わせる。何にする？」

「あ、え、えつと……お冷で」

「お前は頑なに奢らせないつもりか……。間宮！戦艦パフエ二つ頼む！」

「は、はあ!?？戦艦パフエって……このデカイの!?？」

「む、そうだが？」

「無理無理無理！そんなに食べ切れません！」

「男だろう、食え」

「それは野球部とかバスケット部の合宿の飯時に使う言葉ですよ!?？」

「何を言ってるのかわからないが、いいから食え」

チツ、これだから気の強い女は……！このおっぱいサラシ褐色メガネが！属性盛り過ぎなんだよ！

「提督よ……なにを考えてるのか、顔に出てるぞ……」

「えつ、嘘つ!?？おっぱいサラシ褐色メガネって分かつちやった!?？」

「ほう、そんなことを考えていたのか」

「うわつ、やべつ……!!？」

「こ、こいつ……！脳筋に見えて意外と知的だ……!!？」

いや待て。誰も武蔵さんの事なんて言っていない！

「い、いや武蔵さんのことじゃありませんよ？」

「その外見が当てはまるのはこの鎮守府において私だけだ。何より、この場には私と提督しかいないだろう」

「ま、間宮さんもいますよ！」

「私なんですか？」

ギクツと、俺の肩が震え上がった。後ろを恐る恐る見ると、間宮さんが戦艦パフエを二つトレーに乗せて立っていた。

「……………あつ」

「私が、おっぱいサラシ褐色眼鏡ですか？」

「……………いやつ、違つ」

つーか、武蔵さん teme 何そっぽ向いてんだよ！高レベル過ぎて言うこと聞かないポケモンか！

間宮さんは微笑んだまま、俺と武蔵さんの机の上にパフェを置いた。そして、ポケットからストップウォッチを取り出した。

「30分以内に食べ切らないと、お代2倍です」

「えっ……?」

「すたーと!」

「ちよつ、冗談ですよね……!?」

「……………」

ニコニコしたまま答えない間宮さん。

あ、あははっ……………」

「畜生おおおおお!!?」

俺はヤケクソ気味にパフェをかつ込み始めた。

+++++

この前掃除して、綺麗になった俺の自室。そこで、寝込んでいた。

隣で、武蔵さんが座りながら、お腹をさすつてくれている。女の人にいい歳してお腹さすられるって少し恥ずかしいな……。

「すまない、提督よ」

武蔵さんが謝って来た。

「……………」いや、全然平気です」

「結局、時間も間に合わなかったな……。提督の疲れを取るつもりがダウンさせてしまった……」

なるほど、大和さんからは俺を休息させてやれ、みたいなことを言われたのか。

「大丈夫ですから……気にしないで下さい」

「し、しかし……艦娘として……」

「いやマジでいいですから……。中、高、大学の10年間は登校中、毎日のように腹痛に悩まされていた俺的には慣れっことですから」

「ふ、ふむ……………」

相当、気に病んでるのか。あんまり気にされると逆に俺が気に病まんだけど……。

「それより、別に気を使わないでいいですから。この部屋にいらなくても大丈夫ですよ」

「……………なるほど、大和が苛立っていたのはこういうところか」「はっ?」

「いや、なんでもない。そこら辺の漫画を読んでもいいか?」

「あ、いいですよ。全然」

武蔵さんは本棚の漫画を選ぼうと立ち上がった。

下から武蔵さんのスカートの中が見えたので、慌てて顔を逸らした。

……………武蔵さんもパンツ履くんだな。なんか外見とかキャラ的に禪だと思ってた。流石に禪なんて今時、使う奴はいないか。でもピクッてのは意外だった。

武蔵さんはしばらく立ったまま本を読んでいる。アレ漫画じゃないんだけど…………いや、武蔵さんならラノベ読んでても不思議じゃないか。

「……………そういえば、」

思ったら何を思ったのか、武蔵さんは本を棚に戻すと、俺の枕元に立った。

「……………おい、提督よ。……………寝てるのか?」

それは、聞いた相手に寝て欲しいときの問いだよな。せつかくだから、寝たふりしようか。

すると、武蔵さんは部屋を出て行った。なんだ、気を使って俺の部屋にいてくれたのは表面上だけか。本当は俺の世話なんてさっさとしたくなかったんだな…………。まあ、過去の人はみんなそうだったし、別に気にしなくていいか。

と、思ったらすぐに扉の開く音が聞こえた。

「ね、寝てるよな……………う…まだ?」

なんだ? 声が少し震えてね?

薄っすらと目を開けてバレないように声の方を見ると、全身びしょ濡れの武蔵さんが立っていた。

「いやっ、何してんの?」

「!?? お、起きてたのか!??」

武蔵さんは何故か全身びしょ濡れで立っていた。サラシに水が掛かって、肌が薄っすらと透けている。

「な、何やってんですかあんだ!??」

「い、いや……この前、大和が提督から借りた漫画に『濡れTシャツコ  
ンテスト』というものがあつてだな」

ぷ、プリスクかよおおおおお!!?

何やってんだこの人は!?? バカなのか!??

「提督は、こういうの好きだと思つてだな。今回は、完全に私の責任だ  
から……」

「いや、嫌い、ではないですが……。いやいや! 風邪引くから!」

「ふむ、病は気からと言うだろう。提督の気から元気にしてやろうと  
思つてだな」

「え? そのためにこのまだクソ寒い中、水被つたの? バカなのこいつ  
?」

「おい、今お前『こいつ』と言つたか? ……まあいい、元気出たか?」

俺はバカを無視して起き上がって、タンスからタオルを出して、武  
蔵さんに羽織らせた。

「……………?」

「そこ、俺のバスルームだから。使つて下さい。あ、床に縮れ毛落ちて  
たら恥ずかしいんで一回シャワーで床を流してから使つて下さい」

「いらんこと言うな」

ここで武蔵さんに風邪を引かれたら大和さんに何を言われるか分  
かったもんじやない。だからと言って、入渠ドックまで連れて行くこ  
ものなら、途中でずぶ濡れの女を連れてる提督みたいに見られる。こ  
こは風呂場を貸すのが正解だろう。

武蔵さんは洗面所に入った。洗面所の奥にバスルームがある。

さて、とりあえずジャージとか置いとかないと。パンツは……無理  
だな。考えない事にしよう。

俺は洗面所の扉に耳を当てた。中は静かだ。多分、もう全部脱いで  
バスルームの中だろう。洗面所の中に入り、ジャージを置いておい

た。

「武蔵さん、ジャージ置いてくので着てください」

「ああ、すまん」

それだけ言うと、洗面所を出て自室に戻った。

……………さて、ゲームでもやろう。そう決めて部屋のテレビをつけた。

その後、ノックの音がした。

「提督？いらつしやいますか？遠征の子達が帰って来ましたが」

ゲツ……………大和、さんだ……………。

## 第6話 学習しろよ

「提督ー？いらっしやらないのですかー？」

「……………まずいな、非常にまずい。妹を俺の部屋でシャワー浴びせてますなんてバレたらヤバイ……………」

いや待て。うちの大和さんは男の部屋だろうとなんだらうと問答無用で突撃してくる無防備さを持っている。なんだらうと入って来るだろう。返答は早い方がいい。

「あ、はい。いますよ」

「失礼します」

大和さんが入って来た。

俺は布団の中で寝転んでいる。

「大丈夫ですか？間宮さんから聞きましたよ？戦艦パフエ30分以内に完食しようとして失敗したんですって？」

「は、はい……………」

「まったく……………あまり心配かけさせないでください……………」

「すみませんね……………」

何とかして大和さんを部屋から追い出さないと。

「それより、そろそろ執務に戻った方が……………」

「終わりました。だから、提督の助け舟に行こうと思ったのですが……………」

おおぅ……………そうきたか。いや、落ち着け。まだ何とかなる。

要は、武蔵さんの存在がバレることなく、大和さんを部屋から追い出せばいい。しかし、一時的に退かすのではダメだ。武蔵さんがいつシャワーを浴び終わるか分からないからな。

「所で武蔵はどこでしょうか？」

「えっ!?？えーつと……………」

ど、どうする。もし、武蔵さんにも用があつたら厄介だし、なるべく遠いところにいると言った方がいいよな。

「なんか、イスカandalまで行くとか何とか……………」

「……………はあ？」

ちよつと遠過ぎた。本当、嘘が下手だな俺。

「……………まあいいです。要するに知らないってことでしよう」

「は、はは……………まあね」

「あ、それで遠征の子達はどうしましょう」

「今日はもう休ませて下さい」

よしつ、これで大和さんは駆逐のガキどもの所へ行く！突け入る隙が見えた!!？

「と、いうわけなので、みんな今日は休んで大丈夫ですよー？」

「二「はーい！」」

駆逐艦引き連れて訪問してたのかよおおお!!？

駆逐のガキどもは部屋の前で解散した。大和さんは部屋に残った。

「あの、大和さんも別に出て行っても……………」

「いえ、提督の体調が優れないのでしたら、誰か一人くらい看病に残った方が良いでしょう」

ああ、だよな。ヤバイな、このままだとまた全砲門一斉射撃される。ほんと良く無事だったな俺。

すると、大和さんの鼻がヒクヒクと動いた。

「……………シャンプーの、香り？」

「っ!?」

しまった……………バスルームからか!?？

「そ、そうですね!?？そんな香り全然しませんけど!?？」

「いえ、でも……………」

「そういえば空気が悪いなあ！換気しよう！」

俺は起き上がって窓を開けた。その俺の手を大和さんが引いた。

「だ、ダメです提督！具合が悪いんですから無理なさらなくてください」

「えっ…いや……………」

いや、このくらいのアクションは平気なんだけど……………。

「具合が悪いのに窓を開けるなんて言語道断です！」

ああ、そういうこと……………。

大和さんは窓を閉めた。まあいいか、臭いなんて気の所為で誤魔化せ……………」

「……………？　なんか、水が流れる音しませんか？」

「……………」

確かに聞こえる。雨のような不規則な音ではなく、サアアアツ…………と、心地よささえ感じさせる音、

…………シャワーの音か！

「そ、そういうえば最近、俺音楽聞くんですよね！」

慌ててスピーカーにウオークマンを繋いで、音楽を流した。これでシャワーの音は聞こえまい。

そう思つて、チラツと大和さんを見た。が、大和さんの目は完全に疑いの目と化して、俺を睨んでいる。

「……………提督、何か隠してませんか？」

「か、隠してない！何も隠してないから！」

「……………バスルームですか」

「こ、こいつ……………！意外と鋭……………いや、あれだけのヒントが聞こえて来てて、わからない方がおかしいだろう。」

大和さんは「失礼します！」と言つて俺の洗面所のドアに手をかけた。

「ま、待てえええええ！！？」

俺は慌ててその前に立ちふさがる。

「退いて下さい提督！」

「絶対に嫌だ！ていうか、人のバスルームを覗くとか何しようとしてんだあんた！！？」

「誰かいますよね！！？誰を提督のバスルームに連れ込んでるんですか！！？」

「つ、つつつ連れ込んでないし！！？誤解を招く言い方はやめろ！！？」

「風紀の乱れです！通ります！」

「おまつ……………！！？」

チイイツ……………！！？これをやると、万が一バレた時に次から仮病が使えなくなるが……………やるしかない！

俺は腹を抑えて蹲った。

「ウツ……………?!?!」

「?!?! 提督?!?!」

慌てて大和さんは俺の元へしやがみこんだ。

「だ、大丈夫ですか?!?!」

「……………お腹の、具合が……………!」

「も、申し訳ありません……………。大和の、所為で」

うつ、良心が痛む……………!

「だ、大丈夫ですよ。案外大したことないかも」

「いや、ダメです。今日はもう大事をとって寝てください」

「え、いや……………別にそんな大したことじゃ」

「い、い、か、ら!」

「は、はい……………」

俺は大人しく寝る事にした。だってそうしないとキレられそうな勢いだっただんだもん。

もうこうなったら、運に任せるしかない。

「あの、大和さん」

「なんですか?」

「あまり、こういうパシリみたいなこと頼みたくないんですけど……………」

「何でも仰つてください」

「お茶、淹れてもらえませんか?」

「分かりました」

よし、その間に武蔵さんが出て行つてくれれば勝てる!

大和さんは快く承諾して、部屋のドアノブに手を掛けた。その直後、洗面所のドアが開いた。

「提督よ、換気扇は回すか?」

巨乳の所為でジャージのチャックが閉まらない武蔵さんが出て来た。空気が凍った。

「……………で、どういうことですか？」

不機嫌を隠そうともしない大和さんが、俺だけでなく武蔵さんまで正座させて、前で腕を組んで仁王立ちしていた。

「どういう紆余曲折をへて、ムサシが提督のお部屋でシャワーを浴びることになるんですか？」

「……………いや、その……………今回の事は俺は全然悪くないんですよ。いや、そもそもの原因は俺がお腹を壊したことにあるんですけど」

「言い訳は結構です。何があつたかをキチンと説明なさい」

「はい、すみませんでした」

「な、なんで私まで……………」

「武蔵？何か言った？」

「イエ、ナニモ」

武蔵さんまで少しビビっていた。どうやら、普段は怖いのは武蔵さんだけど、怒ると怖いのは大和さんの方みたいだ。

俺と武蔵さんは視線で「どつちが説明する？」みたいなやり取りをしたあと、武蔵さんが口を開いた。

「……………その、だな。提督がお腹を壊したあと、ここに連れて来て介抱したんだが、提督が『濡れTシャツ姿の武蔵さんを見たら元気出そうです』とか言い出して」

「はあ!?？」

ちよつ、こいつ何言つて……………!?？」

大和さんは当然、ギロリと俺を睨んだ。

「……………そうなんですか？提督」

「や、違つ……………!」

すぐに否定しようとした俺の口が止まった。今、武蔵さんは遊真のサイドエフェクトなんて使わなくても分かるくらいのウソをついた。多分、今になってあの奇行が恥ずかしくなったんだろう。

大和さんはその事を聞いたら、まず間違いなく武蔵さんを痴女認定し、下手したら姉妹間に亀裂が入るかもしれない。それだけは避けないと。

それなら、俺が大和さんに少しドン引きされる方がマシだ。

「……………いや、冗談のつもりだった、んですけど……………まさか本気にすると、思わなくて……………」

苦笑いしながら呟くと、武蔵さんは「えっ？」と反応して、大和さんは眉間にしわを寄せた。

「……………提督は自分の体調の悪さを盾にして部下にそういうセクハラをする人ではないと思いましたが」

「いや、だから冗談のつもりだったんですって！ホントに水被ると思わなくて！それで風邪引くとマズイからシャワーを貸したんですよ。全身びしょ濡れの武蔵さんが俺の部屋から出て行くところを、もし他の艦娘に見られたら変な噂広まると思って、艦娘の大浴場じゃなくて俺の部屋のシャワーを貸したんです」

「じゃあ、なんで武蔵をこんな格好にしてるんですか？サイズの合わない提督の服を着せるなんて」

「いやそれは武蔵さんが自分の部屋に戻るための応急処置という奴でして……………!!？」

「廊下で誰かに出会したら、恥ずかしい思いをするのは武蔵なんですよ？それに、提督のジャージを着てるとバレたら、それこそ艦娘の間で噂は広がります」

……………あ、確かに。え、でもじゃあ、あの場合はどうすれば良かったんだ？

「……………なんで、私を呼んで下さらなかったのですか？私と武蔵は同じ部屋ですので、そうすれば全部解決したじゃないですか」

「……………確かに」

思わず納得してしまった。今まで人に頼るとか、そういう考えは無かったから、大和さんと呼ぶなんて発想は皆無だった。

「……………すいませんでした。俺の考えが足りなかったみたいです」  
素直に謝ると、大和さんは大きいため息をついた。「ま、この提督だから仕方ないか」と言った感じで。その納得の仕方は少し腹立つんですけど。や、事実なんだけども。

「まあいいです。今回は提督の言うことを信じます」

「……………すみません」

「提督はこれからはこういうことがあった時はキチンと私に言うこと。いや、こういうことがない方がいいんですが。良い加減、他人に頼ることを覚えて下さい」

「はい」

「武蔵も。簡単に女の子が肌を見せちゃダメです。この提督だから良いものの、普通の男の人なら襲われてるわよ」

「……………(襲われても私なら勝てるということとは黙っておこう)分かった」

「や、どう見ても女の子って歳じゃ」

「……………はあ?」

「や、なんでもないです」

「じゃあ、武蔵。ここで待ってなさい。着替え、取りに行つてあげるから」

そう言うのと、大和さんは部屋から出て行つた。

そこでようやく俺と武蔵さんは正座崩して胡座をかいた。

「つふう……………危ねえ。一時はどうなるかと思つたわマジで……………」

俺は後ろに寝転がると、武蔵さんが俺をじつと見てる事に気付いた。「なんだよ」と視線で聞くと、不思議そうな顔で聞いてきた。

「いや、なぜ私を庇つた?私が勝手に水を被つて来たのに、自分が見たいなごと……………」

「……………だつて、それでも言わないと大和さんが武蔵さんを痴女認定するでしょ。変に姉妹間に亀裂が入るくらいなら、そう言つた方が良いと思ひまして……………」

「……………大和とお前の間に亀裂が入ったかもしれないぞ?」

「武蔵さんと大和さんの間に入るよりマシですよ」

そう言つて、俺は横向きになって、自分の肘を曲げて枕にした。

武蔵さんは俺の事を、少し意外な物を見る目で見た後、俺の肩に手を当てた。

「提督よ」

「え、何」

「余り、自分を貶めるなよ」

「……………はっ?」

「今回は丸く収まったかもしれないが、私と大和の仲を繋ぐために、大和とお前の仲を切つて良いということはない」

「……………や、お二人は姉妹なわけだし、どつちが重要な縁なのかなんて考えるまでも…………」

「いいから聞け。必ずどちらか一方を切らなきゃいけないなんてことはない。両方とも守る事だつて出来るはずだ。その考えも、ちゃんと忘れないでくれ」

「……………」

「とはいえ、助かった。ありがとう」

初めて、人に正面からお礼を言われた気がする。今まで、そんな経験はなかった。

その事に感動してると、真面目なことを言ったのが気恥ずかしくなったのか、武蔵さんが照れたような声を上げた。

「……………そ、そういうえはっ、私とも話せるようになったな」

「へ……………うあっ、確かに」

そういうえは、さつきから普通に話してたわ。だって、俺の思ってた5倍くらいこのひとアホなんだもん。怖さとかないわ。

「どれ、褒美をやろう」

「え、いやいいです」

「良いからこつちを向け」

「はあ?」

「早くしないとくすぐるぞ」

仕方ないので転がった武蔵さんの方を見た。すると、いつの間に寝転がっていたのか、武蔵さんの顔が目の前にある。

「ッ!?」

慌てて離れようとしたが、その手を武蔵さんは掴んだ。にげられない!  
い!

え、な、何!?も、もしかして褒美にキス的な!?無理無理無理無

理！お、俺は別に良いけど武蔵さんはそんな俺得な展開があつて良い  
……！！？

「腕枕をしてやろう。ほら、頭を上げろ」

「……………どこまで男前なんだよあんた」

……………なんか舞い上がつてた自分が恥ずかしいです。

「仮にも乙女に向かつて『男前』はないだろ」

「いや、武蔵さんじゃ『仮』にもならないと……………」

「何か言ったか？」

「何でもないです」

俺は言われるがまま、頭を上げた。俺の頭の下に武蔵さんの腕が伸びて、その上に頭を置いた。

……………待て。キスとか妄想してて腕枕とか言う男前な行動をナチュラルに受け入れたけど、武蔵さんの顔近いし、顔どころか胸も近いしこれすごく恥ずかしいな。

「あ、あの俺やっぱ結構で」

「遠慮するな」

反対側の武蔵さんの手が伸びて来て、俺の肩に手を置いた。にげられない！

「ふふ、顔が赤いぞ？意外と可愛いところあるじゃないか、提督よ」

「う、うるさい！」

恥ずかしくなつて、身体を丸めて赤くなった顔を隠した。

その俺の頭の上に、さっきまで肩の上にあつた武蔵さんの手が伸びた。

「顔を隠すな、その可愛い顔を見せてくれ」

「……………！！？」

何処まで男前なんだよこの人は！！？ていうかこれ、性別入れ替えた方がいんじゃないかね？何このシチュエーション。俺がそつち側やりたいんですけど！

……………でも、こつち側もかなり悪くない！うおお！なんだこれ！なんかもう一層の事このまま……………！

「武蔵！、着替え持つて、来た…………わ、よ……………」

大和さんが部屋の中に入って来ました。

誰がどう見ても、第三者から見たら俺が武蔵さんに甘えてるよう  
しか見えないだろう。

顔が真っ赤になり、ボンツ、と音を立てて煙が出る大和さん。武蔵  
さんもそれに気付いて、今更自分が恥ずかしいこととしていた事に気付  
いたようだ。

「なっ……なっ……!!?」

「やまとっ……ちがつ……こ、こりっ、こりえはっ……!!?」

二人して声を漏らす中、俺は逆に落ち着いてしまった。周りの人が  
自分と同じように動揺すると、俺は何故か安心しちゃうんだよな。

すると、大和さんは顔を真っ赤にしながら言った。

「ふっ……ふっ……!!?」

ふっ、なんだろうか。「不健全ですっ!」とか「二人ともそこに正座  
なさい!」とか?

「不埒者ーっ!!?」

ゴンツ、ゴンツ!!?と俺と武蔵さんの頭にゲンコツが来た。

不埒者、と来ましたか。

俺は薄れゆく意識の中、そんな事を思った。

## 第6. 5話 姉妹喧嘩の夜

居酒屋鳳翔。私と武蔵はビールで乾杯した。

「お疲れ様」

そう言つてゴクツゴクツとビールを飲み、机の上に置いた。

「ふう……しかし、最後のゲンコツは効いたぞ」

「アレはあなたが悪いんでしょう？ 鎮守府内で、あんな破廉恥なこと……」

「腕枕していただけだろう」

「それが問題なのよ！」

「なんだ、嫉妬か？」

「だ、誰が誰に嫉妬するのよ!?!」

「まあまあ、今日はお二人とも始めからクライマックスですわ」

鳳翔さんがおつまみの軟骨揚げを私と武蔵の間に置いた。

「何かあつたんですか？」

「大和がぶつた」

「武蔵が悪いんでしょう!?!」

「説明が子供みたいですよ」

鳳翔さんに最もなことを言われ、私と武蔵はビールを飲んで落ち着いてた。

「まあ、何があつたかちゃんと話してください」

「………実は、私と武蔵と提督で少しトラブルがありました……。けど、それは別に良いんですよ。解決しましたから」

「だが、その後に私が提督に腕枕をしていたというだけで、大和はマジギレしたんだ」

「そりゃ怒りますよ！そもそも、その以前の問題で、提督がお願いしたとはいえ武蔵が濡れTシャツなんてやって怒ったばかりなのに、またあんな破廉恥なことをするからでしょう!?!」

「腕枕は破廉恥ではないだろう！ていうか破廉恥ってなんだ!?! 言い方が古い！普通にエロいでもいいだろ！」

「い、いやです！そんな下品な言い方……！」

「下品ってなんだ！？毎度毎度、お前はお高くまとまりやがって……！！？」

「あなたは色々とズボラというか、ガサツなのよ！！？女の子ならもう少し身だしなみくらい整えられないの！？？」

「お前がキツチリし過ぎなんだ！！？」

ぐぬぬっ……！こ、この妹は……！！？

私と武蔵が睨み合っていると、寒気を感じた。それは武蔵も同様みたいで、体を震わせて押し黙る。

二人して、その寒気の方を見ると、鳳翔さんがニコニコしながら、枝豆を運んで来た。目も口元も確かに笑ってるのに、こんなに怖い笑顔を私は見ることがない。私と武蔵の間に枝豆を置くと、微笑んだまま言った。

「落ち着いて下さい。冷静に話し合いますよう？ね？」

「……………はい、すみませんでした」

私と武蔵は素直に謝った。とりあえず、このお店で喧嘩するのはもうやめよう。

+++++

と、いうわけで、とりあえず3人で話し合うことになった。鳳翔さんが裁判長的立ち位置になって、私と武蔵で問題点を議論することにした。

当然、今回の鍵は「腕枕が破廉恥な行為であるかどうか」だ。まあ、その時の状況で話は別れると思うけど。

「腕枕は別にエロい行為じゃない」

「いいえ！提督は顔を真っ赤にしていました！少なくとも異性が軽々しくやっても良い行動ではありません！」

「軽々しくではないさ。私だって相手を選んだつもりだ」

「相手も何も、この鎮守府に男性は提督しかいないでしょ！」

「だから、もしその提督の性格がダメなら、私は腕枕などしなかった。

あの提督だから、許せたのだ」

「で、でも殿方が顔を真っ赤にしたことには変わりないでしょう!?」  
「私は事前に腕枕をしてやると言った。提督はそれで私の腕に頭を置いたんだ」

「うっ……!!?で、でも!あんな事が起こったすぐ後にあんなに距離を縮めるのはおかしい!!?」

「怒られた上で、私は腕枕くらいなら大丈夫と判断したんだ。そして、提督にとつても問題はないか、確認した。提督の真意は分からないが、提督も問題ないと思ったから腕に乗って来たのだろう。……と、どうか、」

武蔵は言葉を切ると、ビールを一口煽って続けた。

「そもそもこれは私と提督自身の問題だ。大和には関係ないだろう。それともなんだ?私が提督に腕枕すると大和に問題があるのか?」

「うっ……!??」

「事情も何も聞かずにさつきゲンコツして来たが、あの制裁はあまりにも感情的過ぎではないか?」

「ううっ……!!?」

「というか、お前はただ単に羨ましかっただけだろう」

「~~~~!!? ほ、ほうしようさあああん!!?」

私はカウンターの奥の鳳翔さんに泣き付いた。

「武蔵が、武蔵がいじめる〜!!?」

「はいはい……。言い過ぎですよ武蔵さん」

「ふむ、そうか?それはすまない」

「これっぽっちも悪いと思ってる様子を見せずに武蔵は枝豆を食べた。こ、こいつ……!」

「でも、私は腕枕は少し距離が近い気もしますけど……」

鳳翔さんが、私の背中にぽんぽんと手を置きながら言った。

「……これは、好機!??」

「ほ、ほら見なさい武蔵!第三者から見れば、腕枕は距離が近過ぎるわ!そもそも、あなたみたいな痴女は常人からは感覚がズレてるのよ!」

「むっ……それは私が痴女だとしたらだろう」

「痴女よ！間違いない痴女！痴女どころかビッチだわ！」

「お、怒るぞ大和！さつきから女性に対して失礼ではないか!?!?」

「上等よ！表に出なさい！」

「二人とも？」

微笑まれて私と武蔵はビールを飲んで落ち着いた。

「……………そもそも、何故武蔵さんは提督に腕枕をしたのですか？」

「むっ？」

確かにそれは重要だ。武蔵がしたいからした、だと武蔵はビッチだが、提督が脅迫したのだとしたら、武蔵に非はない事になる。

「それは、アレだ。なんだかんだ提督は大和だけではなく私とも話せるようになったからな。その褒美だ」

「褒美で自分の腕枕を差し出すとか……………クソビッチね」

「アアツ!?!?」

「武蔵さん、落ち着きなさい」

「それだけじゃない!!? 提督はなあ、提督はあの時、私のついたウソを庇ってくれたんだぞ!!? それで……………!!?」

そこで、武蔵の言葉は止まった。「口が滑った」みたいな顔だ。私としても、今の言葉は聞き捨てならない。

「……………どういうこと? ウソ?」

「……………なんでもない」

「目を逸らさないで。ウソ? いつ? どの?」

「……………」

「こつち見なさい」

無視して目を逸らし続けると、鳳翔さんが「武蔵さん？」と微笑みながら言った。お陰で、武蔵は身じろぎしながら頬に汗を流し、目は相変わらず逸らし続けながら説明した。

「……………その、提督が私に『濡れTシャツ』を命じたと言ったじゃないですか」

「むっ」

「……………それ、本当は私が自分から水を被って提督を元気にしよ

うとしまして」

「ひゃー」

「……………その結果、提督のシャワーとジャージを借りることになりました、」

「でっ」

「……………以上です」

「まだあるわよね？」

「ないです」

「じゃ、聞き方変えるわ。提督に一切、非があるように見えないけど、それで提督があなたを庇った理由は何？」

「……………先程の一件を伝えると、提督は私と大和の間に亀裂が入るんじゃないかと思ったみたいで、私の嘘に乗ってくれたみたいでして、」  
「何故、あなたはそもそもウソついたの？」

「……………後になってから、自分から水被るって行為が恥ずかしくなりまして……………」

「その後には訂正しなかった理由は？」

「提督が思いの外乗ってくれて、『ラッキー☆』と思ひまして」

「鳳翔さん、判決」

「ギルティ」

武蔵は大きく肩を落とした。私はそれに構わず怒鳴った。

「提督のお心遣いは確かにありがたいものだけど、それに甘える部下がいますか!?？」

私は立ち上がり、武蔵の襟首を掴んだ。

「今から、提督に謝りに行きます!!？」

「ま、待て待て待て！もう夜中だぞ!?？提督はもう寝てるだろう!!？」  
「寝てません！あの人は夜遅くまで漫画読んでます！……………あ、鳳翔さんこれお勘定」

「ああ!?？私の財布!?？いつのまに!?？」

「お釣りはありませんので」

「いらぬわけないだろ!!？中、2万入ってるんだぞ!?？」  
「分かりました」

「ほ、鳳翔うううう!!?ていうか待て!そもそもこの議論は腕枕が卑猥な行為であるかどうかを決めるものじゃ……!!?」

「良いから来なさい!」

「ほ、鳳翔おおおお!!?」

私は武蔵を引きずってお店を出た。

## 第7話 知らぬが仏

朝。俺は早起きして、支度をして執務室の椅子に座った。俺はやらなければならぬ事は、手短かに終わらせるのをモットーとしてゐる。緊急事態を除いて提督業のスタートは朝の6:00からだ、俺は5:30には起きていた。

この時間なら艦娘と遭遇することもないので、ポストまで歩いて、届いてる書類を持って執務室に戻れる。

で、仕事開始。音楽を聴きながら大本営からの手紙に目を通し、終わったならファイリングしてしまう。何か書く必要のあるものは、今のうちに終わらせておいた。

ようやく終わって一息つこうとしたところで、大体30分経過し、一週間ほど前からできたイベントが発生する。

「おはようございます、提督」

大和さんがノックとともに入って来るのだ。

「おはようございます」

そう返すと、大和さんは俺の隣に座ってくる。相変わらず良い匂いだなあ、香水の匂いじゃないし……ナニコレ？体臭？

「相変わらず、早いですね。提督」

「さっさと仕事終わらせたいですからね」

テキストに返事をしながら、今日の予定に目を通す。すると、隣からグウツと音が聞こえた。

「……………」

真つ赤な顔の大和さんだ。

「……………朝飯は食べてないんすか？」

「その、お恥ずかしながら、寝坊してしまいました……………」

あら、珍しい。

「なら、食べて来て良いですよ。仕事、今日もほとんどないんで」

「い、いえ！そんな提督より遅く来た上に朝食を食べに行くなんて……………！」

「いやいや、そんな楽器みたいな腹の状態です仕事できるんですか？」  
「が、楽器!??ど、どういう意味で……!」

ぐううつとまた音がなった。しばらく沈黙が流れたが、すぐに大和さんが赤面しながら言った。

「……………行つて来ます」

「いつてらー」

「ニヤニヤしないで下さい!」

「ぐううううう」

「お、怒りますよ!??」

「いいから行つてきて下さいよトリコさん」

「だ、誰がトリコですか!??」

サイヤ人でも可。大和さんは顔を真っ赤にして食堂へ走った。

+++++

数時間後。いつものように俺は仕事をしていた。隣では、大和さんが頑張つて手伝つてくれている。

「あー……………飽きた」

「飽きた、じゃありません。仕事して下さい」

「むーりー。ゲームやるわ、そろそろアサルトタイムだし」

言いながら、俺はスマホを取り出した。そのスマホを大和さんが横から取り上げた。

「だーめっ。ちゃんとお仕事してください」

「……………」

この野郎…………。なんか最近、大和さんの俺に対する態度が大きくなってゐる気がする。そのくらいで腹は立たないが、何となく変に悔しいんだけど。

「ちゃんと休憩時間になったら返します」

「……………へーい」

素直に返事はしたものの、俺はこんな簡単に引き下がる男ではない。書類を書きながら、ケシカスをデコピンで大和さんの顔面に飛ば

した。

が、それをキャッチする大和さん。

「なっ!?!?」

「甘いです。一週間と少し、同じことをやられていれば、攻撃だって読めます」

や、偉そうに言ってるけど、それ逆に返すと一週間も同じ技食らってたの? って話だからね?

「……………」

が、少し気に入らなかったので別の攻撃をした。大和さんが進める書類に手を伸ばし、紙を引っ張った。が、紙が動かない。よく見ると、ペンを持つ反対側の手に紙をしっかりと抑えていた。

「それも読めてます」

「……………」

さらに、脇腹を突こうとした。が、それも掌で止められ、指が思いっきり反対側に曲がって突き指した。

「痛ッ……………」

「それも慣れました。……………言っておくけど、今のは自業自得ですの  
で、謝りませんし治療もしてあげませんからね」

ジト目で睨まれながら、大和さんに言われ、俺はため息をつきながら引き出しから湿布を取り出して指に巻いた。

……………はあ、仕方ない。レベル2だ。

「大和さん、コーヒー飲みます?」

「それくらい良いですよ。大和が淹れますから」

「いやいや、頼んでないとはいえ手伝ってくれますし。俺がやりますよ」

「……………いいです、私がやります。コーヒーに塩なんて入れられちゃたまりませんから」

ビクツと俺の肩が震え上がった。その様子を見て、大和さんは大きなため息をついた。

「ほんとにバカですね提督……………。いつも通り、砂糖は多めですか?」

「……………お願いします」

素直に言うと、大和さんは立ち上がってコーヒーを淹れに行った。コーヒーメーカーにコーヒーの粉と水を入れ、コーヒーを作り始め、戻って来た。

「出来るまで、少しでも仕事進めましょうか」

そう言いながら大和さんが椅子に座ろうとした直後、俺はその椅子を引いた。思いつき、床に尻餅をついてひっくり返る大和さん。

残念だったな、さっきの塩のくだりは演技だ。それを大和さんに看破させ、油断した所で椅子を引く。

普通の人は尾骶骨を折るかもしれないから無理だけど、艦娘にはそれが可能だ。

「何やってるんですか大和さん。椅子の前に座っても机には届きませんよ?」

ニヤニヤしながら煽ると、お尻をさすりながら大和さんが涙目で、キツと上目遣いで睨んで来た。あ、これやり過ぎた。

「てえいいとおくう!!?」

「あ、あばよー、とつつあん!」

「誰がとつつあんですか!待ちなさい!!?」

俺は床を蹴って慌てて机の上を転がって脱出し、執務室を出ようとした。

「逃がすか!」

直後、頭部にゴヌツと何かが直撃した。お陰で俺は前に倒れ、横に頭に直撃したと思われるものが落ちた。

……俺のスマホじゃないですか。

完全に画面にヒビが入っているが、それで絶望してる暇はなかった。

俺の後ろから、別の絶望が迫っていたからだ。

「て、い、と、く……?捕まえましたよ?」

俺を腰の上辺りを跨いで仁王立ちする大和さん。ゴゴゴゴツとラスポスのようなオーラを出しながら、指を鳴らしていた。

「何か言うことは?」

「どうでした?俺の頭脳プレー」

「歯を食いしばって下さい」

「嘘嘘！冗談ですすいませんでした!!？」

謝るが、大和さんの表情は変わらない。俺にゲンコツするため、一歩踏み出した時、俺は信じられないものを見た。

大和さんのスカートの中だ。問題は、そこにパンツが無かった事だ。

「ええええええっ!!？」

思わず絶叫してしまった。え、えつと……な、なんで? どういうこと? 何あれ? 夢? 幻覚? なんでメデューサがこつち睨んでんの?

だ、ダメだ……! 目が離せない! ほんの一瞬も、瞬きすらもさせてくれない! キヨシの気持ちがよく分かる!!? そうか、あいつはこんな気分だったのか!?

漫画の世界のキャラに共感しながら、ガン見していると、メデューサが闇の中に隠れた。

それと共に、俺はハッと現実に帰る。何が起こったのか確認すると、大和さんが顔を真っ赤にしてスカートを抑えていた。

「あ、貴方はっ……! 貴方という人はッ……!!？」

「うわっ、やべっ……!!？」

しまった、ガン見し過ぎたか!?! いや、そんな場合じゃない! このままだと今日1日、大和さんがノーパンで過ごすハメに……!!?

「怒られてる最中に……!!? さ、最低です!!？」

「ま、待って大和さん! 謝る、謝るから一旦待って! 制裁はいくらでも受けるから、今は一旦……!!？」

「待ちません!!？」

ゴツ!!? と、ゲンコツされ、俺はその場に倒れ、気絶した。

ちなみに、雑草は生えていませんでした。

はさつさと執務室を出て行ってしまい、俺ものんびりと腰を上げた。結局、パンツの安否は聞けていない。そりやそうだろう、聞けるわけがない。だが、このままでは恥かくのは大和さんだ。

「……………誰かに頼るしかないか」

そう決めると、俺は一人で執務室を出ることを決心した。

頼る相手は武蔵さん。なるべく艦娘達に見つからないように、大和型の部屋に潜伏するしかない。

俺は窓を開けて、屋根に上った。一ヶ月くらい前に、何とか艦娘に見つからないように鎮守府内を移動するための通路、通称「エンジン・ハイロウ」を通って大和型の部屋に向かう。通路の名前の由来？俺に聞かれても知りませんよ。

スマホのライトを点けて、中を移動する。鎮守府の屋根の上のマップは自室と執務室と食堂と大和型の部屋だけは把握済みだ。いや、別に夜に襲おうとかそんなはないからね？

大和型の部屋に着くと、天井を一部をパカッと開けた。

武蔵さんは寝転がって監獄学園を読んでいた。おい、それ俺の俺の。何、人の漫画没収して楽しんでんだこの姉妹。

「ははっ、なんでそうなるんだ」

笑ってるよ、あの人。良かった親に変な性癖あると思われなくて。

ていうか、この角度すごい。武蔵さんのおっぱいの谷間がベストポジションで見える。サラシなだけあって、乳首とかは見えないが、それでも童貞を興奮させるには十分過ぎた。

つと、いかんいかんいかん！大和さんのノーパン事件だ！移動して、部屋の前に降りよう。天井を元に戻し、部屋の前まで移動しようとした直後、メキメキツと嫌な音が聞こえた。

「えっ？」

俺と武蔵さんの声が漏れた。そして、天井が陥没し、俺は落下した。

「嘘おおおおお！！？」

「ぬっ、て、提督！！？」

死ぬ！と目を瞑った直後、体にやわらかい衝撃が走った。薄っすらと目を開けると、武蔵さんにお姫様抱っこされていた。

「だ、大丈夫か？何やってるんだ？」

「は、はい……」

あの一瞬で漫画を放置して立ち上がり、落ちてくる成人男性をお姫様抱つことか、この人は本当にかっこいいなあ。

「……………あのっ、ありがとうございます」

「いや、良いさ」

降ろしてもらった。……………ふう、少し恥ずかしかったです。

「……………で、提督よ」

「はい？」

いつの間にかジト目の武蔵さんが俺を睨んでいた。

「何故、天井から落ちて来たんだ？」

「それより武蔵さん！大変なんです！」

「おい、話を聞け」

「あなたの姉が大変なんですよ！」

「分かったから、まずはこっちの質問に答えろ」

「話を逸らして誤魔化そうとしないで下さい!!？」

「それはお前だろ。おい、マジで良い加減にしろ」

「良いから俺の話を……………あ、いや怒らないで。謝るからメガネを外して臨戦態勢にならないで。ごめんなさいごめんなさい」

チツ、誤魔化せなかつたか。まあいいや。

「や、鎮守府の廊下を歩いて艦娘に遭遇するの嫌なんで、屋根裏を移動してたんですよ」

「忍者かお前は」

「そしたら、天井が抜けたというわけです。後で修理しますから許して下さい」

「まあ、いいだろう」

よし、誤魔化せた。まさか、女性の部屋に不法侵入できる術を持つてるとは言えまい。今回は屋根が落ちたという不可抗力を強調した。これなら怒られまい。

で、本題に入った。

「で、何の用だ？」

「あー、それなんですけど……」

「……………」

「……………」

開いた口が、塞がらない。しかし、声が出ない。だってなんて聞けば、いいか分からないんだもん。なんと聞いてもセクハラになる気し  
かない。

慎重に言葉を選んで説明しないと。

「……えーっと、艦娘ってパンツを履く文化ってあります?」

「殴って欲しいのか?」

「あ、いやえっと……違って。なんというか……あ、透明のパンツとか履いてます?」

「おい、さつきからなんだ。セクハラの練習か?」

だ、だよ。えっと……いや、でも俺が大和さんのスカートの中を覗いたと知られたら……!

………どうする。というか、どうしよう………いや、こうして悩んでる間にも、大和さんのパンツは………!!?

………放っておこつか。どう足掻いても俺がセクハラ扱いされる未来しか見えない。今日はなるべく大和さんは出撃させないですつと俺の隣にいさせて、他の人に気付かれる機会を無くそう。精一杯、優しくしてやろう。

「……………すみません、武蔵さん。何でもないです」

「……………? なんなんだ一体?」

「もし、アレなら寝る時は俺の部屋貸しますよ。俺は執務室のソファで寝ますし」

「そ、そうか? 悪いな」

「いえいえ、天井壊したの俺ですから。その時は大和さんも呼んであげて下さいね」

「お、おう……?」

そう言っつて、俺は執務室に戻った。いや、昼飯食ってねえな。やつぱ、食堂に向かった。

## 第8話 過去最大に怖かった。

「大和さん、コーヒー飲みますか？」

「大和さん、肩揉みしましょうか？あ、セクハラなんてしませんから！そんな度胸ありませんし！」

「大和さん、もしアレなら全部俺が仕事やりますよ！あっちのソファアで休んで下さい」

「……………」

俺は全力でノーパン大和さんを労っていた。が、大和さんは戸惑った表情で固まっていた。

「……………あの、提督？どうかなさいましたか？」

「え？何が？どうもいませんが？」

「いえ、その……………親切すぎて……………」

「いやいや、全然いつも通りだから。何もないから」

「あの、何か変なものでも食べました？」

「は？全然？あ、りんご食べます？切りますよ」

「じ、じゃあ、その……………お願いします……………」

困惑してる大和さんをよそに俺は立ち上がって、冷蔵庫に向かった。りんごを取り出すと、包丁で切り始めた。やったことないけど、まあ大丈夫でしょ。

「あの、提督？普通にお問い合わせしてしまいましたけど、皮剥けるんですか？」

「やったことないけど大丈夫でしょ」

「ええっ!?？」

りんごに包丁の刃を向け、見様見真似で親指でりんごを回しながら（多分そんな感じな気がする）、固定させた包丁で切る。よし、手順は完璧だ（多分）。

早速、実行した直後、リンゴの皮を薄く小さく切って、包丁は素通りし、立てた親指にブツ刺さった。

ぶしーっ、と無情に流血する親指を無表情で眺めた。リンゴも包丁

も俺の手も赤く染まっていき、それと共に俺の額に嫌な汗が溜まっていき、痛みが指全体に走った。

「……………」

……………血が止まらないんですけど。あれ、やばくない？これ、やばくない？ウソ、これヤバくない!!?

「くくくッ!!?」

リンゴと包丁が手元から落ちた。

「提督?どうかなさいましたか?」

「えっ!!?何がッ!!?」

「え?いや、さつきから動きませんし、りんごと包丁落とされたのでどうしたのかと……………」

「いや、全然大丈夫!何も無いから!指なんて全然切ってないから!!?」

思わず嘘をついた。だって、ダサ過ぎるじゃん。「大丈夫でそww」とか余裕ぶっこいて、指切るんだよ?

「指切ったんですか!!?見せて下さい提督!」

「いや、切ってないから!!?俺の強靱な身体に包丁の刃なんて刺さらない」

「いいから見せなさいッ!!?」

「はい」

過去一番の怒声に、ノータイムで素直に頷いた。

寝坊した時よりも、スカートの中を見た時よりも、今朝のちよっかいで椅子を引いた時よりも、ずっと鋭い怒声が飛んできた。

未だ出血の止まらない俺の親指を握って、大和さんは傷口を見ると、自分の口で啜えた。

「っ!!? や、大和さん!!?」

「ふあふあつてててふだはい」

多分、「黙ってて下さい」だろう。でも、その、あなた今、ノーパンなんですよねえ。あの、成人男性がノーパンの女性に指を啜えさせると、その……………高度なプレイみたいでちよつと恥ずかしいんですけど……………。

すると、大和さんが俺の指から離れた。

「ふう……」

ふう、とか言うな。

大和さんは白とピンクのハンカチを取り出し、俺の指に強く当てた。圧迫止血という奴だ。あの、傷口をそんな風に握られると痛いんだけど。

「ていうか、あの、ハンカチ良いんですか？血が……」

「ジツとして下さい」

「いや動いてるの口だけなんですけど……」

「じゃあ黙って下さい」

あの、なんでそんな辛口なんですか……？

辛口大和さんは傷口をキュツとハンカチで縛ると、俺に言った。

「このまま10分間、血が止まるまでこうして下さい」

「あ、はい」

ああ……面倒をかせかせてしまった。なんか申し訳ない、ハンカチまでダメにしちゃって……。見栄張ってリングゴの皮なんて剥かなきゃよかった。結果的に指の皮剥いちやったし。

「提督」

「はい」

「怪我したら隠さずに言ってください!!？それと、出来ないのに無理して刃物を使わないで下さい!!？」

「す、すいませんでした……」

「まったたく……!!？」

………なんか母親に怒られてる気分だ。はーあ、やっぱ見栄なんて張るもんじゃないな。

反省しながら、大和さんに舐められた指を眺めた。

「………痛むのですか？」

さつきとは違って、心配そうな顔で大和さんは俺を見た。

「いや、その………こんなに心配してくれると思わなくて……。俺の指を舐めてまで治療してくれたし、なんか意外で……」

「ーっー」

言うと、大和さんは徐々に顔を赤くした。どうやら、今になって自分が俺の指を啜えた事に気付いたようだ。マズイな、流石に今日はこれ以上、からかう気にはなれない。

「あつ……いやつ、えつと……！そ、それはですね!!?」

「なんか今まで怒られた中で一番怖かったし。あ、ハンカチまでダメにしてしまつてすみません」

なんとか話を逸らしてみた。だが、大和さんは顔が赤いままだ。

「まずは洗い流さないといけないけど、周りに水が無かったものでして!!?」

話が逸らせてなかった。

「ハンカチ、ちゃんと洗って返しますね」

「そ、それに唾液には殺菌作用があるらしいですし！」

「もしアレなら、新しいの買つて返しますし」

「あ、あの時は提督の指の出血をなんとかすることだけを考えていましてね!!?」

「……今日、お昼何食べた？」

「決して、提督の指を舐めたかったわけじゃないんですよ!!?」

「ただだけ言い訳してんの。少し可愛いんだけどこの人。」

少し引いてると、ピーツという電子音が聞こえた。コーヒーができた音だ。

「コーヒー飲もつと。大和さんはブラックでしたっけ？」

「そ、そもそも提督が悪いんですからね!!? 出来ないなら私が教えてあげたのに、わざわざ自分でやろうとして！」

「はいはい、ブラックね」

言い訳してる大和さんを見無視して、大和さんの席に置いた。俺は、砂糖と牛乳をアホみたいに入れて混ぜて飲んだ。

「聞いているんですか!!? 提督！」

「あー聞いている聞いている」

生返事しながら、机に戻った。



デスヨネー。あー、マジでどうしよう。

「何、簡単な話だろう」

武蔵さんが口を挟んだ。

「布団を二枚並べて同じ部屋で寝ればよかろう？」

お前は真顔で何を言い出すんだ。

「無理無理無理無理！そんなん眠れませんから俺！」

「何、貴様がどんなに興奮して私達を襲おうと、100億%私達は負けない」

「そういう問題じゃなくて！倫理的風紀的憲兵的問題ですから！」

「私達が良いと言ってるんだ。後は周りの艦娘には内密にしておけば良からう」

「~~~~つ！や、大和さん！何とか言っして下さいよ!!？」

「……………わ、私は、別に……………それでも……………」

「や、大和さあん!?!？」

な、なんでモジモジしながら言うかなこの人……。ちよつとエロいんだけど。

大和さんの返事を聞いて、武蔵さんがまとめるように言った。

「決まりだな」

「えっ、ちよつ……………」

「先に部屋に行っって待っていてくれ。私と大和は風呂に入ってくる」  
「待……………」

俺の制止も聞かずに、武蔵さんは大和さんを連れて、執務室を出て行った。

……………よし、さつさと部屋に戻って風呂入って寝ちまおう！俺が先に寝ちまえばこっちのもんだよな!!？」

そう宣言して、俺は走って自室に向かった。

+++++

夜中、俺は目を覚ました。どうやら、速攻風呂に入っって、速攻寝る作戦は成功したようだ。

俺の右隣で大和さん、さらにその隣に武蔵さんが眠っていた。で、その……大和さん。なんでこっち向いて寝てるんですかね……。

寝間着の着物から谷間が見えてるんですが……。

あーいかにいかに！見るな、俺！過去にこんな状況になったこと無いから、理性を抑えられる自信ないぞ!!？

……にしても、だ。大和さんが寝てる姿は、それはもうエロい。色っぽい、という奴なのかもしれない。寝るときは横を向いて寝るようで、着物から片方の脚が出て、太過ぎず、細過ぎない良い感じにムツチリした太ももが月光を浴びている。

下から覗けば、パンツがギリギリ見えるか見えないかの辺りで着物が身体を覆っているが、ボンツキュッポンを絵に描いたようなお尻、腰回り、胸は着物の上からでも分かる。

胸前で両腕を重ねていて、呼吸をする度に体全体が大きくなったり小さくなったりする。

寝息を立てている大和さんの口は、口笛を吹く時のような形になって、形の良い唇から「すう、すう」と静かに息を漏らしていた。

「……………って、何観察してんだ俺」

とりあえず、寝てる姿を写真に収め、立ち上がった。そもそも、起きたのはトイレに行くためだ。

大和さんを跨いで、武蔵さんと大和さんの間に脚を入れ、今度は武蔵さんを跨ごうとした。

武蔵さんは武蔵さんで、眼鏡を外して寝ていた。眼鏡をしていると、キリツとして何処までもイケメンなのだが、外すと何処か、やはり妹なんだな、という感じの幼さが見える。寝間着は大和さんと同じ着物で、大和さんとほとんど同じ格好で寝ていた。

「……………やっぱ姉妹なんだなあ」

二人仲良く寝ているところを写真撮った。これ、明日印刷して二人にあげ……いや、ぶつ殺されそうだから止めとこう。なんて思っていると、手からスマホが落ちてしまった。武蔵さんの足元に落下した。

「やっべ……………」

仕方ないので、武蔵さんの足元に移動し、スマホを拾った。すると、

武蔵さんが寝返りをうった。それと共に、武蔵さんの着物がはだける。

直後、武蔵さんの下半身が丸出し状態になった。それも、パンツをパイルダーオフしてる状態。

「ッ!!?」

ここ、こいつ……!!?寝てる時は下着は履かないタイプなのか!!?そんなのがいるのは一部の男子だけだと思っていたが……!!?

ああ……1日で大和型二人の股間を見てしまった……。見てしまった罪悪感と、この世で大和型の股間のコンプリートをしたのは俺だけだという高揚感が混ざり合った変な感情が胸の中で混ざり合ったが、とりあえずトイレに行きたいので部屋を出た。

——ちなみに、雑草は普通に生えた。

## 第9話 固い絆

夜中、自室を出て俺はトイレに向かおうとした。のだが、  
「……………うおお」

何これ。夜の鎮守府の廊下ってこんな暗いのか。電気とか全然ついてない。

まあ、俺はお化けとか信じてないから。ただの暗闇くらいなら余裕だから。さっさとトイレに行こう。

暗い廊下を歩いて、スマホのライトを頼りにトイレに進む。

……………うん、怖くないよ？怖くないけど、アレだよね。ちよつと鬼気迫るといふか……………何も出ないって分かっても……………その、なんだ？ちよつと雰囲気あるよね。

「っ！！？」

コツコツ、と足音が聞こえた。思わず腰を抜かしそうになった。なんだよ、誰だよこんな時間に！悲鳴あげそうになっちやっただじゃねえか！！？

足音は前から聞こえて来る。や、ヤバイ……………みんなこの時間はもう寝てるはずだ……………！って事は、何者かが侵入してきたかお化けか……………！！？でも、膀胱も既に限界近い……………！！？

上等だ、お化けだろうがなんだろうがやったんぞコラアツ！！？こう見えて軍の中で武器無し of 武術なら三番目に強えんだぞコラアツ！！？

足音は前方から聞こえてくるが、前には右に曲がる道がある。俺は壁に沿って歩き、右に曲がる道の直前で止まった。足音は右側から聞こえてくる。

「……………」

姿が見えたら奇襲する……………！！？

コツコツ、と足音を聞きながら、敵と自分の距離を掴む。

……………ここだ！！？

「死ねやお化けがあああああああ！！？」

「きゃあああああああああああ!?」

げつ、た、大鳳さん!?!?

ドロップキックを無理矢理、大鳳さんから避ける為、空中で脚を曲げた。結果、壁に脚を強打し、頭から床に落ちた。

「ぬツ……………おお……………!?」

「て、提督!??だ、大丈夫っていうか、何してるんですか!??」

大鳳さんがしゃがんで、俺のおでこを撫でてくれる。俺は起き上がった。

「っ!?」

やっべ、足捻った臭いなこれ……。けど、早くトイレに……………!

「す、すいません。お化けだと思って……………じゃ、あの……………トイレ行くんで」

「ま、待って下さいー!」

「うえい!?」

大鳳さんに後ろから声を掛けられた。

「あ、あのっ……………わ、私も、トイレに行きたくて……………!だけど、いや怖くないんですけどね!??怖くはないんですけど……………不安なので……………一緒に行っていただけませんか?」

怖がつてんじゃない。まあ、怖がつてるなら声なんてかけてこないだろうし、というか怖がつててそれどころじゃないだろうし、別に良いか。

「把握」

「は、把握?」

「あ、いや、い、行きましようか」

そんなわけで、二人でトイレに向かった。

……………あの、大鳳さん?あまり、俺の腕にしがみつかないでくれませんか?歩きにくいんですけど。

まあ、そう思っても言えないのか俺だ。この貧乳とはいえ柔らかいものが当たってる感触を楽しみたいのではなく、怖がつてる子に歩きにくいというこちらの事情だけで引き離すのは気が引けるということだ。

そのままトイレの前に到着した。ここからは別行動だろう。

「……………」

「……………」

一切動こうとしない大鳳さん。

「……………あの、着きましたよ?」

「は、早く女子トイレに入ってください!」

「はっ?」

お前今なんつった?

「いや、流石にそれは……………」

「ひ、一人で行けと言うんですか!?」

「え、そりやそうだと、思いますが……………」

思いますが、つてなんだ。自分のことだろうが、俺。

自分のコミュ障につくづく呆れてると、大鳳さんが俺の胸ぐらを掴んで自分の顔の前に引き寄せた。ちよつ、近い近い良い匂い! なんてうちの艦娘はみんな良い匂いすんの?

で、大鳳さんはすごい剣幕で俺に怒鳴った。

「バカな事を言わないで下さい!!? 花子さんが出たらどうするんですか!?」

はい、この時、俺の中の「コミュ障メーター」を「こいつバカじゃねえの? メーター」がブチ抜いた。

仮にも、いや仮じゃないけど装甲空母がビビリ過ぎだろ。

「分かった、分かりましたよ……………」

「では、早く来て下さい!」

ちよつ、胸ぐらを引つ張るな!

そのまま、深夜の女子トイレに女の子が入った。だからこれどんなプレイだよ。

「い、良いですか!?? 絶対に待つて下さいね!」

「分かりましたって」

大鳳さんは個室の中に入って行った。その直後、ギイツと女子トイレの扉が開く音がした。

「ツ!?」

「ちよつ、ていと……キヤアツ!??」

慌てて俺は大鳳さんを押し込んで個室に逃げ込んだ。

「て、提督何を……ングッ」

大鳳さんの口を塞ぎ、ポケットのスマホを取り出し、ホーム画面を下にスワイプして検索画面に文字を打ち込んだ。

『誰か入って来た。ちよい黙って』

それを見せた直後、個室のドアの向こうから声が聞こえてきた。

「提督?……あれ、おかしいわね。さっきここに入るのが見えただけど……」

大和さんかよおおおおお!!? なんなんだあの人は! タイミング悪いどころの騒ぎじゃねえぞ!?

すると、全てを察してくれたのか、大鳳さんが俺スマホを取り上げて文字を打って画面を見せてきた。

『あの、私、もう限界なんですが』

気が付けば、涙目でふるふると震えていた。

『すればいいじゃん』

『提督の前で脱げと!?!?』

『女子トイレに男を連れ込んだ奴の台詞か。子供の放尿見ても何も思わねえし、前向いてるから』

『子供じゃありませんし、放尿でもありません!』

『んなこと言ってるば』

そこで、俺のスマホを打つ手が止まった。ほ、放尿じゃないの?

………つてことは?

『うんこか?』

『ハッキリ言わないで下さい!!?』

顔を真っ赤にして胸ぐらを掴まれた。すると、コンコンと後ろからノックの音が聞こえた。

「提督? いますよね?」

ビクウツと俺と大鳳さんの肩が震えた。

『提督の所為ですよ!?!? なんとかして下さい!』

『ふざけんな。そもそもお前が俺をこの中に入れたんだろうが!』

「提督？寝てる時に聞こえたシャッター音について聞きたいのですが？」

ちえつ、俺か。

『待って下さい、提督。寝てる時のシャッター音ってどういう事ですか？』

「……………」

大鳳さんがゴミを見る目で俺を見ていた。嗚呼……………なんかもうどう転んでも俺終わるじゃん……………。

『後でその件は説明するから』

『……………絶対吐かせますからね』

そうだ、まずはこの状況をどうにかしないと。考えろ、何とかなるはずだ。

刹那、思い付いた。これなら何とかなる。

『俺前向いてるから用を済ませて下さい。その間、俺は大和さんを話術で追い返す』

『ええっ!??そんな無理でしょう!??』

『漏らしたいのかお前は』

すると、大鳳さんは少し考え込んだ後、顔を真っ赤にしてスマホを見せてきた。

『絶対こつち見ないで下さいよ』

決まりだ。俺はドアの方を見て叫んだ。

「あ、えつと……………大和さん？」

「あ、やっぱり提督でしたか。女子トイレで何やってるんですか？」

「は？女子トイレ？」

「ここ、女子トイレですよ？」

「……………あー、マジか。すいません、寝ボケてたみたいで間違えました」「まったく……………誰かいたらどうするんですか？気を付けて下さい」

いや、誰かいるんですけどね？

しかし、我ながら自然な演技だ。役者になれば良かった。

すると、さつきまでと違って怒ってる時の声が聞こえてきた。

「で、先程のシャッター音はなんですか？」

……………来たか。

「シャッター音って？」

「惚けないで。それで私、目が覚めたんですから。……………せつかく提督とデートしてる夢が見れたのに」

「いや、知らないです」

「嘘をつかないで下さい。私は現に起きてます」

「いや、マジ知らないって」

「ならスマホを見せなさい」

「今持つてないんすよ、充電中」

「嘘です。充電ケーブルにスマホがありませんでした」

……………やばい。バレバレも良いとこ」。

「まあいいです。それなら、強行突破するまでです」

その直後、バゴツ!!?とすごい音が聞こえ、個室にヒビが入る。

俺も大鳳さんも顔を真っ青にする。

「ど、どうするんですか提督!!? (小声)」

「ツ……………!!?」

そうこうしてる間に、大和さんの撃滅のセカンドブリットがトイレのドアに追撃する。あれ、相当(怒)だな。

「背に腹は変えられん!!?」

俺は後ろに振り返った。

「ツ!!?ツ!!?ツ!!?」

直後、大鳳さんが悲鳴をあげそうになったので、慌てて口を塞いだ。

そのまま、ズボンとパンツを少しズラし、大鳳さんと便器の隙間に放尿した。

その直後、バガアンツとトイレのドアが吹き飛んだ。

「さあ、提督!逃げなせ……………」

大和さんの口が止まり、目を見開く。大和さんの目には、後ろを向いてる俺が放尿してるように見えただろう。

「……………あの、あんまジロジロ見ないでくんない」

徐々に、徐々に顔が真っ赤になり、やがて大和さんの顔はトマトかってレベルまで赤くなった。

「しっ、ししっ、しちゅれいしましたあゝゝツ!!?」

大声を上げて逃げて行った。

計画通り!!?

「……………さて、問題は山積みだ。俺は放尿を終えてズボンとパンツを上げると、大鳳さんが真っ赤な顔を手で覆って俯いていた。」

「……………」

「……………」

俺も大鳳さんも何も喋らない。大鳳さんはズボンとパンツを上げようもしない。

こういう時、何を言えがいいのだろうか。コミュ障じゃなくても分からないだろう。だが、ただ黙っていれば、いずれ他の人が来るかもしれない。

「……………あの、大鳳さん」

「……………」

「……………とりあえず、移動しましょう」

「……………」

「……………ほ、他の人が来るといけないから、」

「……………」

「……………」

……………な、何か答えてよう……………。俺だって恥ずかしかったんだから……………。

「……………して」

「へ?」

「……………説明して。一から、十まで。何がなんでどうなって、どういふつもりだったのか」

「……………わ、わかりました」

執務室に移動して、説明した。

この時間から、何か固い絆で結ばれた俺と大鳳さんは、少し仲良くなった。

第7〜8話（裏） 性器を見まくった提督の1日の裏

朝。私はいつも5時に起きる。6時に執務室に集合と言われてるが、女性として身支度があるから仕方ない。

なのに、今日は5時20分に起きた。超遅刻です。

「い、急がなきゃー!」

慌てて、部屋に付いてるお風呂に入った。私は毎朝、シャワーを浴びている。たまに、提督が「良い匂いする」とかボソツと言ってるが、それとは全然関係ない。ただ、シャワー浴びると目がバツチリ覚めるということだ。

シャワーを終えると、髪を乾かして、いつもの髪型に結び、続いて着替え、最後に化粧をした。

普段なら、朝食の時間があるのだけれど、今日は時間がないため、抜くことにした。

で、慌てて執務室へ向かい、到着した。執務室の前で呼吸を整え、部屋の中に入った。

「おはようございます。提督」

「おはようございます」

前々から思ってたけど、なんでこの人は私に敬語なのだろうか。別にタメ口でも良いと思うんだけど。まあ、いつか。それは私が気にすることじゃないし。

私は提督の隣に座った。

十十十

お昼の時間になった。私は食堂で「ぎる蕎麦大和盛り」を頼み、運ぶと、席に座った。

「大和さん」

声を掛けられた。最近、鎮守府に来た大鳳さんだ。

「ご相席してもよろしいですか?」

「良いですよ、どうぞ」

大鳳さんがラーメンを持って前に座った。

「いつになく機嫌悪いですね。また提督と何か？」

「そうなんです！聞いて下さいよ、大鳳さん！」

そばを啜りながら私は言った。

「提督、酷いんですよ!? 私が椅子に座ろうとしたら、椅子を引くんですー！」

「小学生ですか」

「しかも、それで怒ってる大和のスカートの中を覗くんですよ!??もう、最低です！」

ホンツツツトに信じられない！ホンツツツトに子供みたいなチョツカイばかり出してくる！

「はあ、可哀想に……お尻大丈夫ですか?というか、なんで提督はそんなちよつかいを?」

「大丈夫です。仕事に飽きたからってスマホでゲームやり始めたんですよ。だから私、スマホ没収したんです。そしたら、子供みたいにチョツカイで抗議して来たんです」

「あ、あはは………」

「まあ、私も別に構ってあげるのは良いんですけどね?提督だって、多分遊んで欲しいんでしょうし！」

「い、良いんだ……」

「でも、時と場合くらい考えて欲しいわね」

なんでいつも仕事中にチョツカイ出して来るかなあの人は！

私はイライラしながらそばを啜りまくった。

「……でも、アレですね。話を聞いている感じだと、提督は大和さんの事、大好きみたいですね」

「ブフオツ!?」

啜った蕎麦を全部吐き出した。大鳳さんは慌てて避けて、私に非難の目を向ける。

「す、すみません……で、でも何を言い出すんですか!??」

「いや、昔からよく言うじゃないですか。好きな子には意地悪したく

なるって」

「いや、で、でも……！あ、ありえません！」

「まあ、イマイチあの提督も何を考えてるか分かりませんから、確定は出来ませんが。でも、好きじゃ無かったらチョコッカイなんて出しませんよ」

「………大鳳さん、あなた分かってないですよ」

「何がですか？」

「………あの提督は、唯一の話し相手に構って欲しいだけなんです。他の艦娘とはコミュニケーション取れませんから」

「………」

納得した顔を浮かべる大鳳さんは、すぐに言った。

「でも、他の艦娘にはチョコッカイなんて出しませんし、多分どうでも良いと思ってるから中途半端に優しいだけです。その点、大和さんだけは提督にチョコッカイ出されてるんですから、少なくとも特別な存在なんじゃないんですか？」

「………」

今度は私が納得する番だった。そ、そうよね……少しは特別に思われてるって事よね。

「………えへへ」

「うわっ、分かりやすいなーこの人」

思わずニヤけると、大鳳さんは目を腐らせながらラーメンの卵を食べた。私の頬がカアツと熱くなった。

「な、何がですか!?!」

「へ?何がって?」

「わ、分かりやすいとは?」

「いや、提督のこと好きですよね?」

「はあ!?!ち、違います!?!ありえません!」

「は、はあ。まあ毎日提督の話ばかり聞かされてる私としては全部筒抜けですが」

「だから違っ」

「少しは特別に思われてる事ですし、たまには遊んであげたほうが良

いと思いますよ」

大鳳さんはそう言うのと、いつの間にラーメンを食べ終えたのか、食器を片付けに言った。

私は釈然としないながらも、ざるそばを啜った。

＋＋＋＋

「大和さん、コーヒー飲みますか？」

「大和さん、肩揉みましようか？あ、セクハラとかしませんから！そんな度胸ありませんし！」

「大和さん、もしアレなら全部俺が仕事やりますよ！あっちのソファアで休んでて下さい！」

「……………」

少し鬱陶しいほどに、提督が中途半端に優しくなった。どうしたのかしら。

「……………あの、提督？どうかなさいましたか？」

「え？何が？どうもしませんけど？」

何トボけてるのよ。その顔かなり腹立つんですけど。

「いえ、その……………親切すぎて……………」

「いやいやいや、全然いつも通りだから。何も無いから」

「あの、何か変なものでも食べました？」

「は？全然？あ、リングオ食べます？切りますよ？」

「じ、じゃあ、その……………お願いします？」

あまり豹変し過ぎて、思わずお願いしてしまった。

「あの、提督？普通にお願ひしてしまいましたけど、皮剥けるんですか？」

「やったことないけど大丈夫でしょ」

「ええっ!?？」

いや、まあ中にはそういう人もいるかもしれないけど……………！

一生懸命、リングオの皮を剥こうとする提督を見ながら、わたしはハラハラしながらも微笑んでしまった。

怒られてすぐに態度を変えるなんて、本当にそういう子供っぽい所は可愛い提督ね。

そんな事を考えてると、ポタツ……と提督の足元で液体が垂れる音が聞こえた。真つ赤な水滴が床に落ちていた。その後、りんごと包丁が床に落ちた。

「提督？　どうかありませんでしたか？」

恐る恐る提督に聞くと、涙目で答えた。

「えっ!?　何がッ!?」

「いえ、さつきから動きませんし。りんごと包丁落とされたのでどうしたのかと……」

「いや、全然大丈夫！　何もないから！　指なんて全然切ってないから!!」

「この提督は世話がやける！」

「指切ったんですか!?　見せて下さい提督!!」

「いや、切っていないから！　俺の強靱な身体に包丁の刃なんて刺さらない」

頭にカアーツと血が上った。

「いいから見せなさい!!」

「はい」

思わず大声で怒鳴ると、提督はノータイムで返事をして指を差し出した。

私は提督の指を消毒するため、指を咥えた。前に調べた止血の方法を実行し、お気に入りのハンカチでキュツと指を縛った。

+++++

仕事が終わわり、私は武蔵とお風呂に向かった。何がどうなってるようになったか分からないが、提督の部屋で過ごすことになった。

大浴場に向かいながら、私はもはや口癖のように呟いた。

「はあ……まったく、提督は」

「なんだ、また惚気か？」

「違うわよ！　今回は本当の愚痴！」

「今回は本当の、ってことは今までののは惚気か？」

「そ、そういう意味じゃ……！……っ！いい、いいから聞きなさい！」

「はいはい。今日も愚痴という名の惚気を聞かされる武蔵さんですよー」

「む、武蔵！」

ああもうっ！なんでうちの妹だけ姉を慕ってくれないのよ！金剛さんとか扶桑さんが羨ましい！

「で、なんだ？また何かやらかしたのか？」

「あの人ったら、指を切ったのを何故か隠すのよ？私に」

「指を？紙でか？」

「いや、なんか知らないけど、あの人、今日やけに優しかったのよ。なんか、コーヒー淹れるだの、肩を揉むだの、仕事全部やるだの……まあ、秘書艦として全部お断りしたけれどね？で、リング剥いてくれるって言うから、なんか流れでお願いしちゃって」

「お願いしたのか」

「その時に指切っちゃって。なんか恥ずかしいところ見られた子供みたいに隠すものだから、少し腹が立っただけよ」

「つまり、怪我という一番自分を頼るべきタイミングなのに頼ってもええなくて、イライラしてるわけか」

「ちっがうわよ！なんでそうなるわけ！？」

なんか武蔵と話してもイライラする！何よ、どいつもこいつも……！！？

「でも、他に理由なんてないだろう。普通は心配、良い所でも治療する程度だろう。それを超えて怒るといふことは、つまりそういうことだろうっ？」

「うっ……！」

な、なんなのよこの人前から……！！？人の事を散々バカにして……！論破されちゃうからほんとにバカみたいじゃない！

「まあ、お前も良い加減素直になれ」

「す、素直よ私は！」

そんな事を言いながら、私と武蔵は大浴場に入った。

脱衣所で武蔵がサラシを外しながら思い出したように言った。

「そういうえば、提督が私の部屋に降ってきた時も何か様子がおかしかったな」

「降ってきた？」

上半身を脱ぎながら聞いた。

「実は今日、提督の部屋に泊まることになったのも、奴が私達の部屋の天井に穴を開けたのが原因でな……」

「何したのよあの人」

「いや、何か相談しに来ようと思ったが、廊下は艦娘と出会す可能性があるから、屋根裏を移動して部屋の前に移動しようとしたらしい」

「何してんのよあの人」

「で、その時になんか聞いて来てたな。艦娘にパンツを履く文化があるか、だの、透明のパンツを履いたりするか、だの……」

「あの人は後でとっちめるべきね……」

そんな話をしながら私はスカートに手を掛けた。

「ま、奴も男だ。そういう事に興味を持ってもおかしくない。大目に見てやれ」

「そんなもんかしらねえ」

テキトーに返しながら、スカートを降ろした。直後、ブフォツと武蔵が噴き出した。

「? どうしたのよ、汚いわね」

「い、いやっ……す、全てが腑に落ちただけだ」

「はあ?」

何言ってるのこの子? どうかした?

「お、おまつ……お前、ずっとそのままか? トイレとかいかなかったか?」

「一度だけ行ったわよ。それが?」

「行った時に気が付かなかったのか!?」

「何がよ」

聞くと、武蔵は言おうか言うまいか悩んだ。ていうか、スカート半脱ぎの姿勢がいい加減辛いんだけど……。

「言わないと、武蔵はメガネを取ると恥ずかしがるって提督に言うわよ」

「わかった！言う、言うから落ち着け！」

で、武蔵はコホンと咳払いすると言った。

「お前、パンツはどうした？」

「……………へっ？」

私は自分の足の間を見た。あるのは女性器だけで、パンツの姿がない。スカートと一緒に下ろしたのかと思い、スカートの中を見るが、そこにもパンツはなかった。

いやな汗が額に浮かぶ。

「……………うっ、うそ……………でしょ……………？」

武蔵は無言で顔を背け、「私の姉大丈夫か……………」と呟いていた。反論できないのが悔しい。

と、いうことは何。私、今日一日ずっとノーパンで遅刻してノーパンで朝ご飯食べてノーパンで提督を叱ってノーパンで大鳳さんとお昼を食べてノーパンで提督の指咥えてたって言うの!!? どんなプレイよ!!?」

……………いや、待った。私、お昼前に提督にスカートの中見られたわよね……………？」

それを思い出すと、全てが腑に落ちると共に、私の全てがドン底に落ちた気がした。

「……………」

顔が真っ赤になっているのがわかった。これはヤバイ。これは死ぬる。これは痴女だ。

そっかあ……………提督がやけに優しかったのも、その所為かあ。

「お、落ち着け大和……………！だ、誰だってこんな日は……………あ、あると、思う……………」

ないわよ……………。なんで?どこで?そ、そういえば、今日は寝坊して遅刻ギリギリだったっけ……………?その時に、パンツを履き忘れたのか、な?

「あ、あはっ、あははっ……………」

「や、大和？気にするな、落ち着け。な？」

「……はははっ、ははっ、はあ……む、むさしい……」

武蔵に泣きながら抱き着き、武蔵は私の背中をさすってくれた。

十十十

提督の部屋に着いても、私の気は沈んだままだった。私はこれから、どんな顔して提督の部屋で提督と寝ろというのだろう。

しかも、ノーパンで提督の指を啜えたと自覚した時、若干濡れてた事実をどう受け止めれば良いのだろう。考えれば考えるほど死にたくなる。

「……はあ、死にたい」

「そう気を落とすな。今度、何か奢ってやる」

武蔵が肩に手を置いてくれた。……なんか、姉妹の立場逆転してる気もするけど、今は気にしてる余裕はなかった。

提督の部屋の前に到着し、私は深呼吸した。……ふう、よし！

「やっぱり、私達の部屋で寝ない？」

「提督よ、入るぞ」

「無視!?!」

武蔵が入り、わたしも慌てて後から入った。

中を覗くと、提督は既に眠っていた。布団の中で丸まって、子猫みたいに寝息を立てている。

「……………」

「良かったな、寝てて」

「…………あ〜〜良かったあ…………」

「ホツとし過ぎだ。じゃあ、提督の隣はお前で良いな。私ももう寝る」

「ええっ!?!?わ、私!?!?」

「当然だろう。逆に、私が提督の隣で寝ても良いのか？」

「ダメ」

「決まりだな」

…………最近、妹に弄ばれ過ぎてる気がする。姉としての威厳がまるでないわね。今度、仕返ししてやろう。

けど、今回は乗せられておいて、提督の隣に寝転がった。

「て、提督……失礼します……………」

布団の中に入った。提督はこっちを向いて寝ている。

………………ち、近い。緊張する。な、なんか普段から幼いとは思ってたけど、寝顔はその3倍くらい幼いんじゃないかしら。

これ、寝れる気がしないんだけど。

「ね、ねえ武蔵？やっぱり場所代わっ」

「zzz……………」

「は、早っ!?？」

「こ、この妹は本当に……………!!？」

すると、目の前の提督から「んっ……………」と、吐息が漏れた。起こしちゃったかしら？

「……………や、やまと、さん……………」

!?？ わ、私が夢に出てるの!?？

「……………怒ら、ないで……………」

……………夢の中でも怒られてるのね、私に。

少し微笑ましくなり、私は提督の頭を撫でた。

「大丈夫ですよ、提督が何もしなければ怒りませんから」

そう言いながら頭を撫で続けた。なんか、こうして見ると弟みたいでかわいいかも。

そう思った直後、

「頭を…………カチ割ろうとしないで……………」

「……………」

すぐに手を離れた。

なんか、緊張してるのがバカバカしくなったので、さっさと寝ることにした。

## 第10話 ハンカチ

翌朝。身体を揺さぶられて、俺は目を覚ました。

「……………とく、提督！」

「んっ……………？」

起き上がった。目の前には誰かがいるが、目がぼやけてて何も見えない。なんだ……………？なんか、目というか頭がボーツとする……………。

「提督！起きて下さい！もうマルナナルマルですよ！！？」

「んっ……………」

「寝坊ですって！提督！」

「……………無理。寝る」

「きやつ！！？て、提督！！？な、何を……………！！？」

俺は前に倒れ込んだ。誰かを押し倒した気がしたが、ぼーっとして思考が安定しない。

「て、提督！！？と、隣りで武蔵が寝てるんですよ！！？ま、周りの目を考えて……………！こういうのは二人きりの時に……………！！？」

「zzz……………」

「……………(怒)」

「この、まま……………夢の、世界へ……………。俺の意識が遠退いて来た頃、い、良い加減にしなさい！！？」

チヨップが眉間に直撃し、一発で目が覚めた。

なんだ？何が起こった？

眉間を抑えながら辺りを見回すと、俺が大和さんを押し倒していた。真っ赤な顔をして自分の肩を抱く大和さんが、俺を本気で睨んでいた。どう見ても、俺が襲ってるようにしか見えない。

慌てて大和さんの上から飛び退いた。

「……………おはようございます。提督」

「お、おはようございます……………。す、すいません。もしかして、俺寝ぼけてました？」

「それはもう壮大にね」

マジか……。もう起きないと。

「あー……。肩痛い……。じゃ、すぐに着替えるんで」  
言いながら俺はパジャマを脱ぎ始めた。

「ちよつ……。提督!? な、何を!??」

「え? あ、ああ、そつか。すいません」

そつか、剣道部だったからあんま女性の前で下着姿になるのに抵抗ないけど、普通はダメだよな。

……。昨日は女性の前で放尿しちゃったし。

「……………」

「て、提督? どうかありませんか?」

「……………なんでもないっす。着替えるんで、見たくなければ出て下さい」

この後、どういうわけか大和さんは出て行かず、目を隠しながらも指の隙間からこつちを見ていたので、俺は気付かないふりをした。

ムツツリだなあ、この人。

「……………ムツツリスケベ」

思わずボソツと呟くと、大和さんが顔を真っ赤にした。

「ち、ちがいます!」

「え、いや何も言っていないです」

「嘘つかないで下さい! というか、え……。えつちな漫画読んでる提督に言われたくないです!」

「だーかーらー、アレはそういう漫画じゃないんですよ」

本当に理解がない奴は何度説明しても納得しない。

……。ちよつと、からかってやるか。

「大和さん、髪跳ねてますよ」

「えっ!?? う、嘘……。!??」

「ちよつと待ってて下さい」

俺は引き出しから、ある物を取り出し、ポケットにしまおうと、櫛を取り出した。

で、大和さんに言った。

「少しかがんでください」

「え？は、はい……」

俺は大和さんの髪に櫛を通した。

「て、提督!?？な、何を……!」

「髪、整えてんの」

「そ、そんな……!は、恥ずかしいです……!」

「いいからじっとしてて」

顔を真っ赤にして、フルフルと震える大和さん。俺だって恥ずかしいわ。それを乗り越えてこそその成果は出せるはずだ。

俺は、さつき引き出しから出した「ある物」、猫耳カチューシャを大和さんの頭にバレないように着けた。

「っし、終わり」

「あ、ありがとうございます……」

「じゃ、仕事しますか」

俺は猫耳大和さんと、執務室に向かった。

+++++

昼休み。猫耳大和さんは食事に向かい、俺は洗濯物が干されてる屋上に来た。

誰もいないことを確認し、キョロキョロと首を捻りながらある物を探す。ここは基本的に男子禁制なので、俺がここにいることがバレたら、磔獄門である。

それでも、俺は探さなきゃいけない。大和さんのハンカチだ。俺の所為で血塗れになったハンカチ、ちゃんと血が落ちてるかどうかを確認しなければならぬ。

こういう所は、大体何かしらの法則によって分けられて干されているものだ。

俺が今いる場所は、制服が集中的に干されていた。ここは制服ゾーンか。

制服ゾーンから抜け出そうと歩き続けると、物干し竿に「朝潮型」と書かれていた。そのおかげで大体理解できた。

まずは、布団とか服みたいにかテゴライズし、その後からさらに同型艦ごとに区切ってるのだ。なら、ハンカチゾーンを探し、その中から大和型の場所を探せば良い。

さて、何故制服は制服ゾーン、みたいに分けているか。それは多分、衣類の種類によって干す場所が違うのだろう。

大きい洗濯物の陰に小さい洗濯物を干しても、日光が当たらずに乾かない。

なら、今の太陽の位置取り的に一番近い所にある洗濯物がハンカチゾーン……いや、太陽って動き回ってんだから意味ないじゃん。

「……………楽しようとしないで地道に探すか」

まったく無駄に思考を巡らせてしまった。

制服ゾーンから突破し、次は布団ゾーン。吹雪型だの川内型だのと言ったかけ布団とか敷布団とかの群れを抜け、次に見つけたのは、下着ゾーンだった。ああ、なるほど。下着を干してるから男子禁制なわけか。

「つと、それよりハンカチ、つと……」

だが、そこはただの下着ゾーンではなかった。下着以外にも、靴下やハチマキとか小物が干されていた。その中には当然、ハンカチもある。

「……………」

あの中に行くのか。ただでさえ男子禁制。それも下着が干してあるから男子禁制なのだ。それなのに、ハンカチを探しに下着ゾーンに行きましたって、どう考えても下着ドロの言い訳である。

けど、俺が変な見栄張って大和さんのハンカチを血塗れにしたのは確かだ。もし、ダメになってたら買いに行かないといけないし。

「……………行かなければならない」

深呼吸をして、覚悟を決めた。大丈夫、元々俺なんて存在感薄いじゃん。この鎮守府においても、俺が指示してるとはいえ、命令を出してるのは大和さんだ。もしかしたら、俺のこと知らない子もいるんじゃないか？何それちよつと泣ける。

「行くぜー」

そう決めて小物ゾーンに足を踏み入れた直後、下着エリアの奥からヒョコツと何かが顔を出した。

……………彩雲だ。

直後、ボタンツと屋上の扉が開き、俺は慌てて受け身を取りながら布団エリアに逃げ込んだ。ここなら、多少身を隠せる。

屋上に現れたのは瑞鶴さん、瑞鳳さん、そして大鳳さんの3人だ。

「私の彩雲が反応したわ。誰かが下着エリアに入った」

「……………下着泥棒なんて……………最低です。犯人は許せません」

「……………コロス。提督だったら絶対コロス」

え、えらいこっちゃ!??ていうか大鳳さん!??なんでそんな怒ってるの!??昨日のことはお互い忘れようって事になったよね!??

そんな事を思ってる間にも、3人は艦載機を発艦させた。

上等だこの野郎。布団の間を抜け、艦載機のうちの一機に目を付けた。狙うは、大鳳さんの艦載機。

空母の着替えゾーンから、長めのタスキを取り出し、大鳳さんの艦載機に狙いを定めた。貴様らに教えてやろう、戦の勝敗を決めるのは、技術と知恵と運であるということ!!?

とある蜘蛛男に憧れて編み出した伝説の技を喰らえ!!?

「ツ!!?」

俺はタスキをビュワツと飛ばした。それが、大鳳さんの艦載機に巻き付き、一瞬で捕まえて自分の手元に引きずり込んだ。この間、0.1秒である。

「!??」

「大鳳さん?どうかした?」

「一機、やられた……………」

「!!?」

瑞鶴さん、瑞鳳さん、大鳳さんの間に緊張が走る。俺は艦載機から妖精さんを引きずり出すと、ポケットのクツキーで餌付けして黙らせ、艦載機に向かって話した。

「大鳳さん?大声出したら、この妖精さんを殺す。返事は頷くだけでいい。今すぐに瑞鶴さんと瑞鳳さんを屋上から追い出して」

「ッ！」

「返事は？」

布団の間から大鳳さんを見てると、大鳳さんは頷き、瑞鶴さんと瑞鳳さんに言った。

「あ、あの……二人とも」

「どうしたの？大鳳？」

「何かあったの？」

大鳳さんはなんと言おうか悩んだ挙句、苦笑いしながら言った。

「て、提督が……『瑞が付く艦娘って無いよな。何がとは言わないけど』と、昨日愚痴ってました……」

「」

おい、何言い出すんだお前は。

瑞鶴さんと瑞鳳さんは走って屋上から出て行った。ああ……もう、目を血走らせてたじゃん……。絶対、執務室にカチコミに行ったよ……。

「これで良いのかしら？」

「……………」

「聞ってる？早く私の子を返して」

「……………ああ、うん……………」

いつまでももしよげると、あの二人が戻ってくるかもしれないので、俺はさっさと姿を現した。

「!?？」 て、提督!?？下着ドロは提督だったんですか!?？」

「いや、下着ドロじゃないから」

「わ、私に恥部を晒させて、今度は仕返しとばかりに晒して……その上、下着を!?？さ、最低！変態！鬼畜！」

「違うつてば。お願いだから話聞いて」

顔を真っ赤にして俺に暴言を浴びせる大鳳さんをなんとか黙らせた。

「ていうか、昨日の事はお互い忘れようって事になったじゃないですか。蒸し返さないで下さいよ」

「そ、そうでしたね……。はうう……………」

頭から煙をあげる大鳳さん。

俺があの中で大鳳さんを選んだのは、お互いに恥ずかしさを共有し合った仲だからだ。これ程、安心できる関係はない。

「あそこの中の大和型の場所からさ、ハンカチ取ってきてくれませんか？」

「いくら何でも下着ドロの手伝いは……!!?は、ハンカチ、ですか……?」

「どっだけお前俺のこと疑ってるの？」

「多分、血が付いてるハンカチ。無かつたら別に良いんだけど……」

「下着を取りに来たのではないんですか？」

「違うってば。良いからお願い」

「は、はあ。分かりました……?」

大鳳さんは、頭上に「?」を浮かべて下着ゾーンに入って行った。

二つ目のクツキーを妖精さんに渡してると、戻って来た。

「これですか？」

ピンクと白のハンカチ、のはずが、血が付いていてほぼほぼ真っ赤に染まっている。いや、時間が経ってオレンジっぽい茶色だなアレ。

「ああ、それ。ありがとうございます」

「い、いえ。それがどうかしたのですか？」

「いや、ちよつと。じゃあ、俺もう出て行きますから。ほら、お前も向こうに行きな」

妖精さんを摘んで、大鳳さんに渡すと、俺は屋上の地面のコンクリートの一枚を抜くと、屋根裏から移動した。

しばらく移動し、自室の洗面所。俺の血が付いたハンカチを水道で手洗いし始めた。

洗剤とかを混ぜて、ゴシゴシと洗うが、まったく落ちる気配がない。

「……………こりやもうダメだな」

このハンカチは使えない。新しいの弁償しないとなあ。

大和さんと一緒に……………いや、あの人のことだから絶対「そ、そんな気になさらないで下さい！」とか言い出すなこれ。

……………けど、俺一人で買いに行つてどうするよ。ロクなもん選べな

いぞ。他の人を俺の私情でお出掛けに誘って「え？なにこいつ、上司の立場を利用して何、デートに誘ってんの？キモッ」とか思われたくないし……。

「ググってもイマイチどんなのが良いか分からないんだよなあ……」

「手伝ってやろうか」

「うおっ!?」

後ろから声をかけられ、振り返ると武蔵さんが立っていた。

「な、何してるんですか!?」

「いや、この部屋漫喫みたいで面白くてな」

ニートじゃん。良いのかそれでこの人。

「……あの、ウチは訓練は基本的に自主的にやらせてますけど、ずっとサボってばっかいないで下さいよ」

「分かっている。私だつてずっとこうしてるわけではない」

「まあ、良いっすけどね。自己管理はしっかりして下さい」

「うむ。で、どうする?」

「まあ、付き合ってくれるなら助かりますけど」

「へ?付き合う?」

「え?ハンカチ買いに行くのでしょ?」

「……あ、ああ!そうだったな!う、うむ。良いぞ。行こうか」

何を勘違いしたのか知らんが、まあ付き合ってもらおうかな。

「じゃあ、着替えて下さい」

「? 何故だ?」

「や、サラシの女の子連れてると目立つでしょ」

「そうか?」

「私服の一枚くらいありますよね?」

「無いが?」

「じゃ、俺一人で行くんで」

「ま、待て待て待て!この前のジャージでいいから貸してくれ!」

ああ、この人アレか。ただ単に外に出掛けてみたいだけか。このイケメンにも可愛いところあんのな。

俺は黙ってタンスからジャージを取り出した。……………そういえば、この鎮守府の提督になって半年になるけど、艦娘を外に連れて行くのって初めてかもしれない。

「……………今度、大和さんとかも連れてってあげよう」

いや、みんな割と勝手に出てるかもしれないけどね。

## 第11話 男前過ぎてもう……

武蔵さんをジャージに着替えさせてしまったが、俺はこれをすごく後悔するハメになった。

ジャージなんて着せると、余計にエロくなった。上まで閉まらないチャック、無理矢理途中まで閉められたチャックによってパンツパンに強調された胸と、その隙間から見えるサイズの合っていない大和さんのブラ。エロさが増した。

そんな人と、俺は今一緒に歩いている。

「ははっ、これが鎮守府の外かあ！」

「あの、あんま大きな声出さないでくれませんか？目立つから」

「なんだ、女の子とデートは初めてで照れてるのか？」

「や、そういうんじゃないから。てか女の子って歳じゃないでしょ」

直後、風が吹いた。ノーモーションから繰り出されたグー。それが、俺の頬を掠めた。

「次は当てるぞ」

「すいませんでした」

「それで、どこへ行く？」

武蔵さんに改めて聞かれ、俺は顎に手を当てた。

「……………んー、大和さんが欲しがりそうなハンカチってどんなのですか？」

「ふむ、そう聞かれてもな……。何というか、とにかく明るい色のものが好きだ。ピンクとか赤とか白とか」

「ふーん……でも、ハンカチってどういうところで買えば良いんですかね」

「それ、私に聞くか？」

「……………ググるか」

スマホを取り出し、検索画面で「ハンカチ 高い」と入力した。

俺のその手元を見て、武蔵さんが呟いた。

「…………なあ、ところでそれはなんだ？」

「なんだって、スマホですよ。携帯電話」

「あった方が便利、だよな？」

「欲しいんですか？」

「まあ、少し興味ある。いむやが持つてるが、すごく便利そうなんだ」

「ふーん。じゃあ買いますか？」

「いいの？」

「良いですよ。お金持ってます？」

「ああ。一応、そこそこ」

「じゃ、まずは携帯買いに行きましょうか」

「いや、今回は提督の買い物に付き合ってるわけだし、それは…………」

「良いですよ別に。どうせ全部買うんですし」

「ふ、ふむ…………提督がそう言うなら…………」

武蔵さんと一緒に、俺達はa○ショップに向かった。

歩いてると、武蔵さんが声をかけてきた。

「で、提督よ」

「なんすか？」

「大和とはどうなんだ？」

「どう、とは？」

「いや、だから最近」

「別に特に何もありませんよ。普通に仕事して、普通に休んで、普通に終わってます」

「しかし、大和によくチョツカイを出すらしいじゃないか」

「……………」

あの人は毎回、そんなことを愚痴るのか。なんか恥ずかしくなつて来たんだけど。

「そんなに大和のことが好きか？」

「…………ええ、まあ。好きですね」

「お、おう？随分とすんなり認めるんだな」

「大和さんに聞いているなら開き直りますけど、アレだけチョツカイ出して構ってもらっておいて、好きでも嫌いでもないです、とは言えな

いでしょ」

「ああ、そういうことか……」

かなり良い人だからなあ、あの人。そういう意味では、武蔵さんのことも大好きだよ、とは流石に照れ臭いので言えませんでした。

「そういう意味じゃなくて、こう……これだけ長く、といっても一週間ちよつとだが、一緒にいるんだから、何かあるだろう」

「何か……？ああ、恋愛的って意味ですか？」

「ああ。まあ、端的に言えばそういう意味だ」

「恋愛的に、かあ……考えたこともないですね」

その返事に武蔵さんは苦笑いを浮かべた。

「それは、大和を異性として見たことがない、ということか？」

「……随分とストレートに聞きますね」

「回りくどいのは苦手だな」

「そういうことじゃないですよ。なんていうか……今まで人に好かれた事ないから、人を好きになるのに抵抗があるっていうか……」

「……………」

武蔵さんが気まずげに目を逸らした。すいませんね、ロクでもない提督で。そもそも、少し優しくされたくらいで、勘違いするほど俺はチョロい男ではない。

話を戻そうをここで黙ると、まるで同情してほしい男みたいになる。

「けど、異性として、かあ……。まあ、その、何。ドン引きしない？」

「しない」

「外見はすごくいいですよ。綺麗だし、スタイルも良いし。……………」

男の俺より背、高いし」

「それ、本人の前では言うなよ。私はともかく、大和は背が高いの少し気にしてるみたいだ」

「は、はあ。分かりました」

人の外見的特徴についてはからかわない。これはかまちよの鉄則だ。特に、艦娘は生まれた時からその姿なのだ。その事についてからかう奴はゴミカス以下だ。

「あと、構ってくれるし、ちよつとクソ真面目だけど優しいし、この人が彼女だったら3次元も捨てたもんじゃないな、と思ったりしましたよ」

「それもう大好きなんじゃないか？」

「いや、ところが男つてのは残念な事にチョロい生き物でしてね。少し優しくされただけで割と誰にでもそう思うんですよ」

「そういうものか？」

「はい。……高校のクラスメートの男子は毎日毎日女にモテようとして……」

そもそも、モテてどうしたいのか。俺から言わせれば、「モテたい」と「彼女が欲しい」は別だ。モテたい、とは複数の女性から好意を寄せられたいということだ。それは逆説的に言えば、女の子に失恋させたい、ということだ。

だって、付き合えるのは一人だけなんだぜ？複数の子に好かれても仕方ないでしょ。

で、結局二股かけて振られるんだよなあ。俺はそんなミスはしない。何故なら、まず彼女ができないから。

「まあ、男なんてすぐに女に惚れるものなんですよ。そんなの、本当に好きになったとは言えないでしょ」

「私にはそういう理屈っぽいのはよく分からんが……。と、いうことはあれか？わ、私のことも好きになったりしたのか？」

「ああ、ありますよ。何回か」

「ツ……いめ、面と向かって言われると少し恥ずかしいものだな……」  
照れてる。あの武蔵さんが。そういう顔されるとアレだよ。意地悪したくなるだろうが。

俺は、武蔵さんのメガネを取り上げた。で、自分の顔に掛けると、携帯屋に走った。

「つーっ」

「さ、早く行きましょう。武蔵さん」

追いかけてきてもらうつもりで言ったのだが、武蔵さんは急に顔を真っ赤にして、左腕で顔を隠して右腕をこっちに伸ばした。

「め、メガネ返してー！」

「え、ええええ!!?」

思いの外、女々しい声が返ってきて、こっちが戸惑ってしまった。武蔵さんは膝を抱えて俯きながら、相変わらず真つ赤な顔でこっちを涙目上目遣いで睨む。

「か、返せ！メガネ返せ！」

「えっ、ちよっ、なんっ……誰!!?」

「かーえーしーてー!!?」

「わ、わかったよ！返す、返すから叫ばないで！周りの人の視線が……！」

慌てて、武蔵さんにメガネを手渡した。「ううっ……」と如何にもいじめられっ子みたいな声を漏らしながら、武蔵さんはメガネを受け取り装着すると、ギロリと俺を睨んできた。

「……きいさあまあゝツ!!?」

「うおっ!!?ちよっ、タンマタンマ……!!?」

襲い掛かってくる武蔵さん。

「許さん……！絶対に許さん!!?」

「ま、待て待て待て！周りの人の視線！鎮守府ならともかく外で馬乗りになると……!!?」

「知るかああああ!!?」

「す、すいませんでしたああああ!!?」

ボコボコにされた。

警察が来なくてマジで幸いだった。

+++++

「いいか!!?次やったらこんなものでは済まさないからな！」

携帯を買った後も、武蔵さんはプリプリと怒っていた。

「分かった、分かりましたから……」

「全くお前は……！大和の気持ちが少しわかったぞ……！」

ブツブツ言いながら、武蔵さんは買ったスマホの電源をつけた。

「…………一応、俺と同じiPhoneにしましたがけど。使い方とか大丈夫ですか？」

「うるさい。お前の手は借りない」

「うわー、怒ってる時は人の話を聞かないところ、姉とそっくり。」

でも、大丈夫とは言わなかった辺り、やっぱり分からないんだろうなあ。まあ、こういう時は何と言っても意地を張るだろうし、放っておくのがいいだろう。

「じゃ、頑張つて下さいね。変なサイトに登録して10万円とか請求されないようにね」

「えっ?」

「それより、ググった感じだとバー〇リーってお店のハンカチが良いみたいです。そのお店行ってみましょう」

「ま、待った。その変なサイトについて詳しく」

「いやあ、ググってサイト開いて『〇〇サイトの登録が完了しました。会員費用10万円お支払いください。退会する場合はこちらのサイトへ』みたいな感じで誘導されていく度に金取られるタチの悪いサイトが世の中にはあるんですよ。スマホ買ったばかりの中学生とかは良くそういうのにハマりますから。だから気をつけて下さいねって」

「……………」  
ドツと嫌な汗を浮かべる武蔵さん。そして、先に行こうとする俺の手を引いた。

「ま、待ったー!」

「なんすか?」

「そ、その……………教えて、下さい……………」

顔を赤くして、目を逸らしながらお願いしてくる武蔵さん。

とりあえず、電車に乗ってから、まず最初に気をつけるべきことを教えた。

その後にアプリのダウンロードの仕方などを教えたりして、気が付けば目的の駅に到着したので、駅を降りた。

「……………なるほど。では、提督と連絡するときは、この『LONE』とやらを使えば良いんだな?」

「そういう事です。っと、ながらスマホは危険ですからやめましょう。ただでさえ、ポケ○ンGOで死傷者出てるのに」

「提督は良く鎮守府でやってるじゃないか」

「ながらスマホしながらじゃないと一人でいる言い訳が出来ないじゃないですか。言わせないで下さい」

「……………すまない」

そんな話をしながら、改札を出て目的のバー○リーの店に着いた。

店の看板を見上げて、武蔵さんが呟いた。

「ここは……………？」

「ああ、なんか調べたらここが女性に人気のハンカチ売ってるみたいで」

「だ、大丈夫か？ 提督。ここ、高いぞ？」

「ハンカチで高いつたつて1000円ちよつとでしょ？ 余裕ですよ余裕」

「……………」

店の中に入った。

+++++

電車の中。俺の手の中にはレシートが握られていた。

『ハンカチ レディース 薄手 無地 ピンク 5980円』

それを握り締めながら、俺は膝に肘をつけて電車の中で、うな垂れていた。その俺に横から武蔵さんが同情したように言った。

「……………だから言ったのに」

「……………布切れ一枚6000円とか……………あそこだけバブルかよ……………」

「ま、まあ、元気出せ。私も一緒に選んだんだし、間違いはないはずだ」  
「……………はい」

電車を降りて、駅を出た。武蔵さんが伸びをしながら言った。

「しかし、中々楽しかったぞ。鎮守府の外も悪く無いな」

「それは良かったです。別に待機命令と任務中以外なら日帰りで鎮守

府の外に出ても良いですからね」

「ああ。今度、大和も連れ出してみるか」

「あの人、色んな店に連れ回されそうだけど気を付けて下さいね」

「いや、違う。お前が行ってやれ」

「へ？」

「お前がついて行ってやれ。その方が大和も喜ぶ」

「いや、姉妹の方がいいでしょ」

「いいから。お前が行け。そうだ、帰ったら誘ってやれ」

……なんで俺がそんな恥ずかしいことを。無理だつてマジで。

「行くのはいいけど誘うのは武蔵さんからお願いしていただけませんか？」

「……………こんのクソヘタレが」

うるせー。なんつても言えこの野郎。

「それで、この後どうする？」

「帰りましょうか。いつまでも鎮守府留守には出来ないし」

「……………だな」

帰ることにした。

せつかくなので、海沿いを歩いて鎮守府に向かった。ちょうど、日が沈もうとしていた。

「おお……………これは綺麗だな……………」

「いつも見てますよね」

「いや、砂浜から見るのはまた別格だよ」

ふむ、そういうもんか？逆に、俺は海のだ真ん中から夕日を見てみたい気もするけどな。

「なあ、提督よ」

「？」

「写真撮らないか？二人で」

「はあ？」

「良いじゃないか。こんな機会、滅多に無いぞ」

「まあ、良いですけど」

夕日をバックに入れて、二人で並んだ。武蔵さんが買ったてのスマ

ホを構え、俺と横に並ぶ。

「もつと詰めろ、入ってないぞ」

「えっ?・ちよっ」

俺の事を抱き寄せる武蔵さん。ちよっ、近いつてマジで！良い匂いするし！どこまでかっこいいんだこの人は！

一人でテンパっていると、ピタツと頬に何か着いた。目の前のスマホの画面を見ると、武蔵さんの頬がくっ付いていた。

「ッ!?」

「おお、これなら入る」

「ちよっ……武蔵さ」

「撮るぞ、提督」

写真を撮った。武蔵さんがスマホの顔面を確認する中、俺はその場に座り込んで顔を手で覆った。

「…………ふむ、まあまあ、悪く無いな?」

「……………」

「提督、どうかしたか?」

「…………なんでもないです」

「お前は婿の方だろう。何を頬をくっ付けられたくらいで恥ずかしがっている?女々しい奴め」

「武蔵さんが男前過ぎるんですよ!!」

本当に、俺が女だったら10回はこの人に告白して振られてるね。良かった、男で。

「いいから帰るぞ」

「……………はい」

武蔵さんに頭を撫でられたので、立ち上がった。

+++++

鎮守府に到着した。あー、疲れた……久々に出掛けたわ。

とりあえず鎮守府の中に入った直後、謎のオーラを感じた。目の前で腰に手を当てて仁王立ちしてる大和さんからだ。その後ろには、瑞

鶴さんと瑞鳳さんが弓を構えて立っている。

「……………話があります。良いですね？」

「……………え、俺大和さんに何かしたわけ……………」

「色々と言いたいことはありませんが、まずはこれについてです」

大和さんは言いながら、握り締めた猫耳カチューシャを俺に見せつけた。

……………完っ全に忘れてた。

「じゃ、私は演習場に行ってる。……………提督、死ぬなよ」

武蔵さんは親指を立てて去ろうとした。が、大和さんが人差し指で謎のサインを出した。瑞鶴さんの弓が武蔵さんの方に向いた。

大和さんが武蔵さんに言った。

「武蔵、あなたもよ」

「……………えっ？な、なんで……………」

「来なさい」

有無を言わせない気迫に、武蔵さんは項垂れた。

執務室に連行され、俺と武蔵さんは正座させられていた。

「……………では、まずはこの事についてです」

大和さんは猫耳カチューシャを握ってへし折った。

「……………そ、それはですね……………その、つい出来心で……………」

「出来心で人を変なコスプレオタクみたいにさせたんですか!!？これのおかげですごく恥ずかしい思いをしました!!？」

「す、すみません……………で、でも、いつまでも監獄学園をエロ漫画だのなんだの抜かすから腹が立って……………」

「言い訳は聞きません！みんなに笑われてしまいました！鳳翔さんに『……………可愛らしい耳ですね』って生暖かい目を向けられた時は死にたくなりました!!？」

「でも、実際似合っていましたよ」

ついうっかり口を滑らせると、大和さんはカアアアツと頬を赤く染めた。

「そ、そんなこと言って誤魔化そうつても無駄です！」

「まあ、俺はメイド服だのケモ耳カチューシャだのみたいなコスプレ

じみた格好は好きじゃないんですけどね」

言うのと、瑞鶴さんと瑞鳳さんは「うわっ……」とドン引きし、武蔵さんは「あちゃー……」と額に手を当て、大和さんは照れたように赤く染めていた頬を、怒りによって真っ赤に染め上げた。

「……………素直に謝れば許してあげようと思いましたが……………!!? 絶対に許しません!!? 今日寝かせませんからね!!?」

「え、それどうい……」

「夜までお説教です!!?」

……………なんかすっごい怖いんですけど……………。まあ、大和さんってオタク趣味とか嫌いだろうしなあ。

「それと二つ目です。お二人共、どうぞ」

言われて、瑞鳳さんと瑞鶴さんは前に出た。で、俺を見下ろしながら言った。

「提督さん? 瑞が付く艦娘の何が無いのか、」

「教えてもらってもいい?」

「魚雷とか主砲」

「えっ?」

「ないでしょ?」

「な、ないけど……………」

はい、論破。貧乳はバストアップ体操に帰れ。

「どの事ですが?」

「……………飲みに行こっか」

「そだね」

二人は執務室を出た。俺を怒っているのは大和さんだけだ。

「……………なんだったんですか?」

「さあ?」

そもそも、これに関しては本当に怒られるいわれはない。大鳳さんがついた嘘だ。

「で、次です。お二人はどこで何をしてたんですか? 特に提督、仕事をサボってまで」

「あーどこでとか言われても……………」

「二人で出かけてた、としかなあ？」

「真面目に答えなさい！」

武蔵さんと顔を見合わせると、怒られたので背筋を正した。

「……………えっと、それが、ですわ……………」

俺は左手首に掛けてある袋を大和さんに手渡した。

「……………なんですかこれは？買収は通用しませんよ？」

「や、違うから」

人にプレゼントを渡すのって初めてなんだけど、こんなに照れ臭いものだったのか。……………まあいいか、渡そう。

「あの、大和さん」

「はい？」

「この前、ハンカチダメにしちゃったから……………その、これ、」

俺はハンカチを手渡した。大和さんは目を丸くして瞬きをする。

「ええっ!?？そ、そんなっ……………!」

「あの、どうぞ」

驚いて、口をに手を抑えてる大和さんに手渡した。大和さんはボンヤリと、ハンカチを袋を眺めた。

「開けても、いいですか？」

「ハンカチですよ？」

「言っちゃうんですわ……………」

「いや、だってハンカチダメにしたのにハンカチ以外買います？」

大和さんは箱からハンカチを出した。

「……………わあ」

「まあ、それを買に行つて仕事サボりました。仕事遅れた分はちゃんと取り戻すんで。だから、怒らないで……………!」

ていうか、さっさと仕事に戻りたいんだが……………。

と、思つてると、大和さんの目から涙が流れた。

「あええっ!?？や、大和さあん!?？」

「……………すみません、提督。でも、その……………嬉しくて……………提督から、物を頂いたのは初めて……………」

……………だからって泣くかお前。最早、半ば呆れてると大和さんが、

俺の手を握った。

「ありがとうございます、提督……。このハンカチ、大切にしますね」

「え、あ……………」

おい、涙ながらに微笑むな。うつかりときめくだろうが。

「……………確かに、男はチョロいみたいだな」

武蔵さん、余計なこと言うな。

## 第12話 護るべき物

夜中。天井を直すことをすっかり忘れていた俺の所為で、大和さんと武蔵さんは今日も俺の部屋で寝泊まりする。

俺は寝転がってテレビを見ていた。すると、大和さんと武蔵さんが部屋に入ってきた。

「ただいまー♪」

「ふう、いいお湯だった……」

ただいまー♪じゃねえよ。ここお前らの部屋じゃねえぞ。完全に何か勘違いしてない？

「何見てるんですか？」

「ニュース」

「あら意外ですね」

「それどういう意味だ。ニュースくらい見るだろ」

時刻は10時前。欠伸びながらテレビを見てると、ニュースが終わった。

『この後は、本当にあったら怖いは』

直後、俺はテレビを切った。そして、布団の中に入った。

「さ、明日早いし、寝ますか」

「見ないのか？あのテレビ」

「見ません」

武蔵さんに聞かれ、即答した。

「なんでだ？いや、見る理由ないでしょ。ほら、仕事がアレだし。意味わからん」

「お前の言ってることが意味わからんぞ」

「いや、てか明日早いし。ね？寝ましよう？もしアレなら俺、外で寝ますから」

「いや、別に追い出すつもりはないが……」

すると、大和さんが意地悪い笑みを浮かべた。

「もしかして、提督……怖いんですか？」

「……………はっ?」

いきなり何を言いだすんだよ、この人。てか、何その顔。腹立つ。怖いから見たくないんですよね?提督?」

「ち、違うから」

普段の俺なら認めていた。だが、この笑みは認めたら、からかうつもりだ。

「だったら見ましようよ」

「明日は朝早いつつてるでしょ」

「明日はゆつくり寝るかーとかさつき言ってたじやないですか」

「明日は演習入ってるんですよ。万が一、寝坊したら」

「大淀さんから提督がいない時に、向こうの提督が風邪引いたと連絡があつたそうですよ」

おい、そういうことなんで早く伝えないの。聞いてないよ俺。

「見たくないんです!寝させて下さい!」

「どうとう本音を言いましたね?」

くつ、なんて楽しそうな顔と声だ!普段の仕返しをするつもりだな!??

「とにかく、絶対見ないからな!」

「まあ、そう興奮するな提督よ」

後ろから武蔵さんに抱き着かれた。背中ですごいパイ圧を感じ、思わず気が抜けた所に武蔵さんが後ろから囁いた。

「こうしてれば逃げられないだろう?」

「何が興奮するな、だ!??ふざけんな!離せクソメガネ!!?」

「……………生意気な口を叩くのはこの口か?」

「ひ、痛ひ痛ひ!頬を引っふあるな!!?」

こ、この女……………おっぱいがすぐくて抵抗できねえだろうが!!?

すると、大和さんが俺を武蔵さんがひっぺがした。

「む、武蔵!ふしだらですよ!」

そうだそうだ!言ってやれ大和さん!

「ふむ、しかしこうでもしないと、提督は逃げるぞ」

「で、でも……………!!?だからってそんな……………!」

「なら、大和もやれば良い」

いやいやいや、大和さんはそういうことしないでしよう。いいから早く手を離してくださいませんか、大和さん。

と、思ったら、大和さんは俺の手を引き、自分の膝の上に乗せた。

「……………あの、大和さん？何して」

「今こつち見たら殺します！」

「こ、殺……………!?？」

ぎゅううううと俺の背中を締めて、背中に顔を押し付けてくる大和さん。

「……………よし、落ち着いた」

こつちが落ち着かねえよ。

「ほ、本当に見るんですか……………？見たければ二人で見てくださいよ」

「ダメです。私達の提督がお化けなんかを恐れてるようじゃ、ダメですから」

「いや、お化けは誰でも怖がると思うんですけど……………」

「大丈夫です。大和も武蔵も付いてますから」

そう言われてしまうと、こつちとしても領かぎるを得ない。

「じゃ、テレビつけましょうか」

「おい待て！心の準備を！」

「武蔵、テレビ。私、抑えてるから」

「うむ」

「おい待て！待って下さいお願いします！」

無情にも、テレビの電源はつけられた。

+++++

本当にあつたら怖い話、というだけあつて、本当に内容はリアリティがあり無駄に怖かった。

掻い摘んで説明すると、森の中で動物を殺すと森の中から永遠に抜け出せなくなったり、畑のカカシを抜いてストレス発散にボコボコにすると、翌日、自分が骨だけになってカカシになっていたり、自分の

今までの思い出が、なぜか全部月島さんのおかげになっていたりといった感じだ。これらにもう少し肉を付けて、怖さを演出しているから、怖い事は怖かった。

だが、俺は別に超ビビるほど問題はなかった。怖い話というのは、俺が思うに「アレが自分だったらどうしよう」という思いから恐怖を感じるものである。最後のはともかく、基本的にどの話も、主人公の自業自得で痛い目にあってるだけなので、あんな目に遭う事はまずあり得ない。

だから、眠れなくなるほどではないのだが、俺は今眠れそうになかった。

「……………て、ていとくう……………」

後ろで俺に抱き着いてる大和さんが、すごい動揺してるからだ。涙目でガクガク震えながら俺を、さつきまでとは違う意味で抱き締めている。

「……………あの、大和さん。もうそろそろ寝たいんですけど」

「ま、待って下さい……………もう少し……………」

「……………」

大体、俺に抱きついてたって何も変わりやしねーぞ。

「む、武蔵さん……………」

「zzzz……………」

寝てるよ……………メガネつけたまま。後で外して写真を撮ってやろう。

「……………あの、とりあえず寝ませんか？」

「……………無理です」

「だ、大丈夫ですよ。ほら、寝ちゃえば気付いたら明日になりますし」

「寝てる間に襲われたらどうするんですか!!?」

「え?それ俺の事?俺の事じゃないだろうな」

「こ、この人は……………まあ、お化けに襲われると前向きに解釈しよう。

「大丈夫です、大和さん。世の中に幽霊もお化けもいません」

「そんなの分からないじゃないですか!!?」

「いや、俺試したんですって。一回、中学の時に学校に忘れものして。取りに行っただんですよね」



「……………」

「……………は？」

「ダメ、ですか……………」

「や、ダメってことないけど……………」

それ俺寝れんの？色んな意味で起き上がっちゃって眠れねーよ。

「じ、じゃ、提督…………おやすみなさい……………」

「お、おう……………」

大和さんは目を閉じた。俺も寝る事にした。

+++++

夜中。寝てると、頭上でギシツという音がして目を覚ました。薄眼を開けて見ると、大和さんが部屋を出ようとしていた。

……………なんかあったのか？どうしようか迷ったものの、聞いてみた。

「……………やあまとさあ〜ん」

「ひゃうっ！！？」

なんとなく幽霊みたいな声で言うと、大和さんはその場で座り込んでしまった。

「て、提督！！？驚かさしないで下さいよー！」

「どこ行くんですか？」

「お手洗いです」

「……………一人で行ける？」

「ば、馬鹿にしないでください！！？」

そう言うと、大和さんは部屋を出て行った。

何となく気になったので、俺は部屋から顔を出した。寝間着姿の大和さんが廊下を恐る恐る歩く背中に向かって、俺は叫んだ。

「ツァー……………ツツツ！！？（すごい裏声）」

直後、ビクビクツと肩が跳ね上がって、腰を抜かしたように後ろにへたり込む大和さん。

キツ！と涙目で俺を睨んだ。

「なっ……て、ていとくッ!!?」

「俺も行きますから。待つて下さい」

「……す、すみません……」

俺は立ち上がり、充電ケーブルからスマホを抜くと、武蔵さんの眼鏡を外し、寝顔を写真撮ると、大和さんの後を追った。

「………武蔵に殺されても知りませんよ」

「大丈夫でしょ」

後でこの写真送ってやろう、なんて考えながら、大和さんとトイレに向かった。

大鳳さんほど子供ではないのか、俺の腕にしがみついてくるような事はなかった。だが、しっかりと俺の後ろにくっ付いている。

ちなみに、俺はといえば、前の時のおしっこ事件の所為で、夜中のトイレは怖いもの、というより業の深いもの、という風に脳内でインプットされてしまっていたので、まるで怖くなかった。なので、

「あっー」

「っ!!? な、なんですか!!?」

「いや、なんでもないです」

「も、もうっー驚かさないで下さいよ!!?」

と、いう風に全身全霊でからかっている。

はい、小学生の時はリアルいじめっ子だった俺が、「これ、Bダツシユをかましたらどうなるんだろうか」という案を思い浮かべたことを、誰が責められよう。

俺はクラウチングスタートの姿勢をとった。

「て、提督……?」

「トランザム!!?」

「ち、ちよつと!!?」

全力で走り出した。

「ち、ちよつとー!なんで投げてるんですかー!!?」

「アアアア、アアアア、アアアアアア、アアアア、アアアア」

「何の歌ですか!!?」

涙目で追いかけて来る大和さん。仮にも軍人だ、簡単に捕まってた

まるか!と、思ったら、ツルツ、と。ツルツと足を滑らせ、俺は盛大にすつ転んだ。

その俺に駆け寄る大和さん。

「も、もうーどうして逃げるんですか!!?」

「い、いや……ちよつとノリで……」

「やめて下さい!本当に!!?怖いんですから!!?」

怖いって言っちゃったよ……。てか泣いてるし。

「ああもう、分かりましたよ……」

これ以上、いじめるのは気が引ける。なんか怒ってくれないし、俺がちよつかいを出す理由もない。

さつきよりへっぴり腰になって、大和さんは俺の腕にしがみつきながら付いてきた。

「……逃げないですよ」

「分かっていますよ……」

ビビり過ぎてタメ口になっちゃってるしよ……。

その直後、耳の良い俺の耳に、嫌な音が聞こえた。ひたつ、ひたつ……と、裸足の足音だ。

「……」

「……どうかしました?提督?」

……大和さんには聞こえていない。いや、普通に俺の耳がよすぎるだけか。このスキルの所為で悪口もよく聞こえちゃうんだよなあ……。

って、嫌な思い出に浸ってる場合じゃない。

「……いや、なんでもないです」

「お、脅かそうだったって無駄ですからね!?!?」

「いや、俺も少しビビってるんですけど」

しまった、お化けフラグが建ったか……。お化けフラグとは、お化けを信用しなかったり、お化けに怯えてる奴を馬鹿にすると建つフラグで、お化けに襲われやすくなるのだ。嫌な奴ほど、そのまま消滅する可能性が高い。

……どうやら、俺は大和さんをいじめ過ぎたらしい。……仕方な

いか、これは俺が呼び寄せた霊だ。俺は、前に大鳳さんを襲撃した曲がり角を曲がり、壁沿いに張り付いた。その後ろについてくる大和さん。

「……………て、提督?」

「後ろから誰かついて来てます」

「!?? な、何してるんですか!??逃げないと……………!!?」

「迎え撃つ」

「し、正気で……………むぐっ!」

「静かに」

大和さんの口を塞いだ。ひたつひたつ……………と足音は近づいてくる。

顔を出した瞬間に狩る!!?

「……………」

「……………?」

足音が、消えた……………?壁から向こうの様子を覗き見た直後、

「何してるんですかー?」

「ひゃああああああああ!!?」

「ア……………ツ!!?」

背後から声が聞こえ、俺も大和さんも腰を抜かして倒れこんだ。ハツと見上げると、伊401さんがキョトンと首を傾げていた。

「い、伊401……………さんっ?」

「しおいで良いよ。提督、大和さん。何してるんですか?」

「……………いや、と、といれに……………行こうと、おもって……………」

「そうですかー。私もトイレに行こうと思ってたんです!一緒に رفتても良いですか?」

「は、はい……………お願いします……………」

「……………?」

「や、大和さん!早く、行きましょう!」

「…………… (気絶)」

「や、大和さん!??やま……………あっ、」

大和さんの足元に、黄色い水溜りがある事に気付いた。

「……………し、しおいさん」

「何ですかー?」

「先にお手洗い行つてくれませんか?」

「? 何ですか?」

「いや、大和さん寝ちゃったみたいだから、部屋に送つて来ます」

「分かりました。じゃあ、おやすみなさい、提督!」

しおいさんは楽しそうにトイレに行った。

俺は大和さんを部屋まで運ぶと、ブツ殺される覚悟決めると共に、大和さんの名誉を守るために大和さんを着替えさせた。そして、廊下の黄色い水溜りを全部拭き、俺はその場で寝てしまった。

## 第12. 5話 スマホ

翌日。居酒屋鳳翔で、私と武蔵は飲んでいた。と、いうのも、提督が私達の部屋の屋根を修理するとかで、今日一日休みをくれたのだ。「乾杯」

私と武蔵はジョッキを軽くぶつけて、ビールを飲み干した。

「それで、武蔵」

「む、なんだ？」

「昨日はどこへ行ってたのよ、提督と」

「は？」

「へ？」

鳳翔さんが私の質問に声を漏らした。

「む、武蔵さん……提督と出掛けたのですか？」

「まあな。二人きりだな」

「二人きり!? 大和さんを差し置いてですか？」

「ほ、鳳翔さん! どういう意味ですかそれ!?!」

聞き捨てならない言葉に食いかかったのだが、武蔵も鳳翔さんもそれを無視して会話を続けた。

「いや、実は提督が大和のハンカチをダメにしたとか言ってる。私が誘って一緒に行って来たんだ」

「どうでした? 提督のエスコートは」

「いや、デートというより本当に目的のためだけに出掛けた感じだった」

「待ちなさい、武蔵」

私はどうしても気になったことがあったので、口を挟んだ。

「あなた、私服持ってないじゃない。まさか、その格好で外に出たわけじゃないわよね?」

「ああ。提督がなんか目立つたのなんなの言ってる、服を貸してくれた。ジャージだな」

「いいなあ、提督のジャー……はっ、いや何も言っていないわよ!?!」



「へえー、今はそんな便利なものがあるんですねえ」

直後、私はビールを思いつき飲み干した。ゴクツゴクツと喉を鳴らし、ダンツ!!?とジョッキを机に置くと、「……………るい」と声が漏れた。

「ん?」

「ズルイ!!? 武蔵ばっかり! 私も提督とメールでやり取りしたい!!」

「……………お、おお?」

本音をぶちまけた。

「いや、でもそんな頻繁にやるほどではないぞ? そもそも、話があれば会いに行けばいいだけだしな」

「でも、憧れるものは憧れるのよ!!? それを持つ者には分からないわ!!?」

「大和さん。落ち着いてください。タコワサです」

鳳翔さんがタコワサを私と武蔵の間に置いた。わたしはそれを掴みながら言った。

「それで、どんな会話してるの?」

「ああ。他愛もないことさ。まあ、私が質問ばかりするんだけどな。映画とか音楽とか」

「っていうことは、武蔵は私より提督について詳しいというのね!?!」

「お前は本当に何を言ってるんだ?」

「私にも教えてよ!!? 提督の好きなこと!!?」

「あ、それ私も気になりますね。鎮守府では謎に包まれていて、今朝に至っては廊下で寝ているところを発見された提督の好みは少し気になります」

「お、お前ら……………気になることは一緒でもここまで目的が変わる事なのか……………」

武蔵が少し引き気味に呟いた。

「まあ良い。私は別に提督の事が好きというわけでもないからな」

「k w s k !」

「大和さん、落ち着きなさい。飲み過ぎですよ」

鳳翔さんに言われ、私はタコワサをもう一口食べて落ち着いた。

で、武蔵さんが言った。

「まず、好きな映画だが、マー〇ルのアメコミヒーローが好きらしいぞ」

「あー！アイ〇ンマンとか!?!」

「そうだ。音楽はボーカロイドとかアニソンとかが好きらしい」

「ぼーかろいどって、なんですか……?」

鳳翔さんがおばあちゃん発音で聞いた。

「大和さん？今、失礼なこと考えてましたね？」

「うえっ!?!?い、いやそんなことありませんよ!?!」

「武蔵さん、このタコワサ全部どうぞ」

「ちよつ、鳳翔さあん!?!」

な、なんで分かったの!?!?鋭過ぎるでしょう!?!?

武蔵は武蔵で、「ふむ、悪いな大和」とタコワサを全部食べると、ビールを飲んでから言った。

「鳳翔、ボーカロイドというのは、アレだ。初音ミクとか聞いたことないか?」

「ああー、たまーに夕張さんとかが話してるアレですか」

「ああ。アレのことだ」

夕張さん、ボーカロイドとか聞くんだ……。意外でもないけど。

「提督、そういうのが好きなんですネ」

「そういうの聞いて、武蔵はどうしてるの?」

「いつか、大和にこの情報を売ろうと思っていた。今日の飲み代で良いぞ」

「い、嫌よ!?!?払わないからね!?!」

「冗談だ」

………ほんとに、特に最近、妹が生意気になってきてる。ただでさえ、私より育ちが良いくせにムカつく……。

「ふむ、そうだ。せっかくだし、今から提督にLONEでもしてみるか?」

「そうですね、見てみたいですし」

「ふむ、じゃあ昨日撮った写真でも送ってみるか」  
「へ？昨日？」

私の眼の前で、武蔵はLONEを開くと、提督に武蔵と提督が頬をくっつけて、夕日をバックにツーショットを撮ってる写真を送った。  
「って、何その写真!?!」

「昨日撮ったんだ。良いだろう?」

「良いなんてもんじゃな……!いい、いやちよつと羨ましいだけよ!」

「随分と素直になったな、お前」

「あ、既読って付きましたね」

「これは、相手が読んだという意味だ」

「武蔵!ちよつとその写真についてk w s k!」

「大和さん、静かに。はいキュウリの味噌漬け」

それで黙ると思ってるのかこの人は!

「今頃、提督は顔を赤くしているだろうなあ」

「まあ、確かにあの人はこういうのに純情そうですからね」

ううツ……私も、私もスマホさえあれば……!

悔しがつてると、画面に写真が送られてきた。

「おっ、返事が来……」

写ってるのは、武蔵のメガネなしの寝顔写真だ。昨晚に撮っていた。  
た。

「ツツ!?!?な、なんつ……なつ……なんだこの写真は!?!?」

「あら、可愛らしい寝顔ですね」

「み、見るなお前ら!!?」

顔を真っ赤にして慌てふためいてるのは武蔵の方だった。

「あ、あいつ……!!?!?ちよつと文句を言ってくる!」

「ダメですよ、武蔵さん」

「そうよ。先に提督を照れさせようとしたのはあなたの方じゃない」

「ぐぬぬっ……!!?!?」

武蔵が悔しがつてると、もう一枚写真が送られてきた。

私と武蔵がほとんど同じ格好で寝ている写真だ。………そういえば、1日目の夜に提督が用を足してる所を見てつい逃げて有耶無耶に

なっちやっただけど、シャッター音が聞こえたんだっわ……………!!?

「……………武蔵」

「行くぞ、大和」

「二人とも。ほどほどにしてくださいね」

私と武蔵は、五千円札を鳳翔さんに渡すと、店を出て行った。

慣れて少し経った頃が一番危険

第13話 仲が良いほど喧嘩なんてしないから。意見噛み合っていないだけだから

大体、一ヶ月が過ぎた。

事の発端は、俺が出撃の指揮を執っている時の事だった。

ボスマまであと一枠、そこで大和さんが大鳳さんを庇って大破した。当たりどころが悪く、一撃で轟沈寸前のダメージを受けた。俺はすぐに撤退命令を出したのだが、大和さんは反抗した。今の海域は一ヶ月以上も掛けて、(ダラダラと一日出撃一回ずつとは言え)攻略しようとしている海域だった。

それが、ようやくボスマまであと一步の所まで来たのだ。だから、大和さんは反抗したのだろう。

『提督！行かせてください!!?』

『撤退して下さい』

『一ヶ月の苦労を(ダラダラと一日一回出撃とは言え)台無しにするつもりですか!!?』

『撤退して下さい』

『進撃させてください!』

『誰でも良いから、そのアホを殴って気絶させてでも良いから連れて帰ってきて下さい』

いつになく緊迫したやり取りの末、艦隊は帰投した。

うちのモットーは作戦報告は旗艦がやり、小破以上の艦は速やかに入渠、旗艦が小破した場合は他の艦が代わりに報告をする事だ。

それを、旗艦であり秘書艦である大和さんは全く無視して、執務室に来た。俺の前の机にダンツと両手を叩きつけ、すごい剣幕で怒鳴って来た。

『提督！何故、撤退命令を出したのですか!!?あのまま行けば、ようやくボスを叩けるというのに!!?』

『大和さんが大破していたからです。そんなの聞くまでもないでしょう。良いから入渠して来てください』

『でも、ようやく……！ようやくあそこまで来たのに……!!?』

『自分のコンディションも把握出来ない奴に、戦う資格はない』

はいここ、少しかつこいいこと言いました。

『ッ！ それでしたら、多少の犠牲の覚悟もない方に、司令を下す資格はありません!!?』

自分の所為で撤退したのが相当悔しかったのか、いつもは大和さんからは考えられない暴言が飛んできた。

が、俺も相当頭に来ていたのだろう。頭に血が上り、大和さんの胸ぐらに掴みかかった。

『テメツ……!!?』

『ッ!!?』

大和さんは反射的に体を後ろに逸らした。

が、俺の手の中には何かを掴んだ感触がある。見ると、なんかおっぱいの形をした物が手の中にあつた。

大和さんのオツパイが剥き出しになっていた。

『……………えっ、これパッド?』

直後、ビンタが飛んできた。

+++++

「と、いうわけで、アレ以来、大和さんが会ってくれないんですが……………」

俺は間宮さんのお茶屋さんで、心配なので入渠中の大和さんに面会をお願いして何度も断られていることを、涙目で武蔵さんに相談した。

「……………お、おう。まあ、アレはどちらにとつても事件だったからな」

「……………どうしよう。困った」

「仕事が終わらないのか?それなら」

「いや、仕事は問題ないんですよ。元々、一人でしたし」

「お、おう……。どんまい、大和」

「ですが、問題はチョツカイの方なんです」

「すまん、何を言ってるのかまるで分からん」

「俺は誰かに構ってもらえないと死んでしまう生き物なんです」

「大丈夫か、本当に」

割とマジで心配してるような顔で武蔵さんが聞いてきた。

「というか、本当にお前は何してるんだかなあ……。言ってることは正しかったのに、なんであそこでドジを踏むんだ」

「や、本当ですよ。正直、俺もあそこまで真剣な空気が張り詰められた中でハートキャッチ○リキュアする事になるとは思わなかったです」

「ハートキャッチというかハートブレイクだけだな。後、あれ一応パッドじゃなくて九一式徹甲乳だからな」

「胸に詰めてる時点で立派なパッドだよ」

「それは言うな……」

武蔵さんは呆れたようにため息をついた。

「はあ……。にしても凹むなあ。大和さんにあんな言われ方するなんて……」

「いつもはもつと酷いこと言われてるじゃないか」

「いやあ、いつもは冗談でしょ？あんなガチな感じで言われたのはさすがに……」

「……………」

「え？じ、冗談だよ？俺の事、バカとかアホとか思ってるのよ？俺、それなりに優秀なはずなんだけど……」

「まあ、気にするな」

「否定してくださいよ!?」

まじか、俺あの人にマジでバカとか思われてたのか。

「今、大和さんどうしてるんですか？」

「さあな。多分、入渠ドッグで漫画でも読んでるんじゃないか？」

「あの人は……」

……………そういえば、監獄学園いつ返してくれるんですかね……………。

もう一ヶ月も返ってきてないんだけど。

「漫画オタクみたいにはなってますよね？」

「ああ。ほとんど私が無理矢理読ませている。少しでも元気出すようにな」

「…………元氣ないんですか？」

「ああ。いつも落ち込んでいるよ」

ふむ、そんなに気に病むことがあったのか？

「なんで？」

「それは自分で考えろ」

「…………やっぱ、手を出したのが問題だったんかなあ」

暴力を振るおうとして、セクハラ振るっちゃうんだもんなあ。そもそも、なんで手なんか出そうとしたんだよ俺は…………。本当、何やってんだか。

「というか、珍しいな。提督が手を出すなんて」

「まあ、俺もそう思います自分では温厚なタイプだと思ってましたから」

「指令を出す資格がない、と言われたのがそんなに頭に來たのか？」

「いや、それは本当の事です。そもそも、コミュ障が司令官という時点でどうかしてますから。…………ただ、その、何…………」

少し照れ臭かったが、俺は呟いた。

「大和さんであれ誰であれ、誰か一人でも轟沈するリスクを『多少』とは言って欲しくなかったですね」

「……………」

武蔵さんは目を閉じて、しばらく黙った後に言った。

「仕事に手がつかないなら、後で私が代わりをしよう。とりあえず、わたしは大和の様子を見て来るから、お前はそれまで仕事している」

「今日の分は終わりましたよ」

「……………」

武蔵さんは何故か呆れ顔で部屋を出て行った。

さて、それまでの間、ゲームでもしてるか。

一時間後くらい。武蔵さんが部屋に戻って来た。

「ふむ、では構ってやろう。さあ、何をする？」

「いや、そういう風に構えられるのは違うんですよね……」

「む？ど、どういう意味だ？」

俺は立ち上がって説明を始めた。

「なんていうか……『構ってあげるからおいで？』じゃダメなんですよ。もつと、こう……嫌がりそうな子にチョツカイ出して怒られるのが好きなわけでした……」

「なんだそれは……」

「例えばこんな感じ」

俺は武蔵さんからメガネを奪い取った。

直後、何度か瞬きをした後に、みるみるうちに顔が真っ赤になる武蔵さん。

「な、なつなな、何をする返せバカ者ー！」

「さらばじゃ」

「んなっ………！！？」

メガネを頭にかけて俺は走って執務室を出た。その後を追いかけってくる武蔵さん。

「か、返せ！返せー！」

俺は無視して、曲がり角を右へ曲がった。その直前に、思いっきりバカにしたような笑みを浮かべてやると、武蔵さんの表情が変わった。

「きつ、貴様あ………！！？もう許さんぞ！！？」

怒鳴ると、武蔵さんは加速した。

俺も慌てて加速したが、艦娘に速度で勝てるはずもなかった。

「そこだ！」

「うおっ！！？」

追い付かれて拳を振るわれ、慌てて回避した。壁に大きな穴が空いた。

「ま、マジ……………」

リアクションしながら、距離を置いて離れる。その後ろから武蔵さんは追いかけて来た。

「遅い、遅いぞ提督!!?」

「速さだけが鬼ごっこの勝敗を決めるとは限らないんだなあ!!?」

「何っ!!?」

武蔵さんの蹴りをしゃがみ、スライディングで股下を潜ると、窓から外の木に飛び移り、降りて逃げた。ちなみに、パンツは相変わらずのピンクだった。

「なっ……………!!?に、逃がさん!!?」

武蔵さんも同じように追ってきたが、地上での鬼ごっこの練度は俺の方が上だ。

俺は非常用の梯子を使い、再び屋上に登ろうとした。この梯子は屋上のネジを外せば簡単に外せるため、武蔵さんが登ってきたところでアウトである。

これで勝つ……………!そう確信した直後、手元と足元がガクンツと、揺れた。

下を見ると、武蔵さんが梯子を握って持ち上げていた。

「んなあつ!!?」

「逃さんと言ったあ!!?」

梯子を思いっきりぶん回し、俺は鎮守府の別の建物に突っ込んだ。ドリフターズのコントのように頭から壁に突き刺さり、身動きが取れない。

その俺を、後ろから武蔵さんが引き抜いて、一階の庭に降りると俺に言った。

「メガネを返せ」

「は、はい……………」

俺は武蔵さんにメガネを差し出した。この人、加減を知らないみたいでした……………。

だが、俺もただでは引き下がらない。武蔵さんがメガネを掛けている間に、俺はこっそりと逃げ出した。

「ふう、手間をかけさせやが……ん？こ、これ度がない!?？あ、あの野郎……………!!?」

武蔵さんの怒声を浴びながら、2ndステージ開始。

俺は建物の中に入ると、二階に上がって男子トイレに入った。この男子トイレは俺しか男がいないのに、どういうわけか個室が四つある。そのうちの一つを俺は改造した。

水道代が勿体無いので、一箇所は水を溜めて、便器型脱出用滑り台となっている。

その中に俺は飛び込み、滑った。確か、ゴールは真下の一階だったはずだ。

武蔵さんは男子トイレの中には入れない。よって、今頃は俺が出て来るまで、トイレの前を張っているはずだ。

さて、逃げ切った。俺は滑り台から出た。が、落下地点真下はお湯のなかだった。

「……………えっ?」

そ、そういえばこの滑り台作ったのは着任したての頃で、入渠ドック増設したのはつい二ヶ月前くらいだったっけ…………?

前まではただの一室だったのが、入渠ドックの一部になっていた。

「あがばっ!??」

ドッポーン☆とお湯の中に落ちて、俺は半分溺れながら水面から顔を出した。

「あーもうっ、最悪……………パンツまで濡れるわ、鼻にお湯入るわ……………っか、これ人体に影響ないんだろうな……………」

自業自得の癖にブツブツ呟いてると、「提督…………?」と聞きなれた声が出た。

そつちを見ると、大和さんが入渠しながら、信じられないものを見る目で俺を見ていた。

「……………」

「……………」

「……………」  
おお、もう…………。

俺は額に手を当てた。なんで、なんでこうなるんだよ……………いつつも

いっつもさあ……おかしいでしょ。誰の陰謀だよマジで。もし、神様なんてものがいたら、俺はそいつの顔面を全力でぶん殴ってるな。ていうか、俺が死んだらまず神様殴る。

「チッ」

思わず舌打ちすると、俺は入渠ドックから上がり、気まずい思いをしたくないので、なるべく大和さんに目を合わせないように、脱衣所に行くのと、屋根裏から自室に逃げた。

### 第13話（裏） 嫌われたくないんです

私は入渠ドックにいた。かれこれ、2日くらいここに浸かっている。身体の傷はほとんど全快しつつあるが、私の心は落ち込むばかりだった。

前の出撃の時に、提督と言い合いになってしまった。その結果、私はあの提督が手を出す程の事を言ってしまった。

もう、提督に合わせる顔なんてない。

「……………はあ」

考えれば考えるほど落ち込む。他の艦の子達は「大和さんは間違っていない！」とか言ってくれてたけど、それでも気は沈んで行った。

「……………はあ」

二度目のため息が漏れた。あんな事じゃ、提督にも嫌われたに決まってる。

提督は、大和の身を案じて言ってくれたのに。

私は、提督に、司令を出す者の資格がないなんて言ってしまった。

思わず目に涙を浮かべると、入渠ドックの扉が開いたため、慌てて涙を拭いた。

「いるか？大和」

「武蔵か…………。良かった、提督だったらどうしようかと思っちゃった」

「あいつは来ないだろう」

「ッ……………」

そう、よね…………。あんな酷いこと言った、私なんかの具合を見に来るわけが…………。

「いや、そうじゃなくて。ここ、風呂場だぞ」

「はっ、そ、そうよね！お風呂場だからよね！」

「なんだ？提督に来て欲しかったのか？」

「ち、違うわよ！」

……………実際のところはどうかだろう。いや、裸見られたくないから来て欲しくはないか。……………もう胸も性器も見られてるけど。

「どうした大和？顔が赤いぞ」

「な、なんでもないわよー！」

武蔵は私のお風呂の横に座った。こうして毎日、私の具合を見に来てくれる辺り、武蔵は本当に良い妹だと思う。こっちが裸で向こうは服着てるっていう状況は少し恥ずかしいけど。

「提督が心配していたぞ」

「提督が……？」

心配してくれてたんだ……。いや、多分違うなこれ。

「そうよね……書類が終わらないものね……」

こういう事だろう。

「いや、書類は一人でも問題ないらしい」

「えっ……？」

じ、じゃあ、私別にいなくても良いんじゃない……。

いや、待った。

「じゃあ、なんで心配してたの？」

「お前の事だろう」

「えっ……？」

「言うまでもないことだろう、そんな事は」

お前何言つとんの？みたいな顔をして私を見る武蔵さん。

「まあ、何より構ってもらおう相手がいなくなったことを心配していたがな」

「その情報、いらなかったんだけど……」

「お陰で、後で私が提督の相手をする事になった……」

「……大変だから頑張ってたね」

ヤケに実感のこもった声で言ってしまった。けど、実際大変なのだから、ここは仕方ない。

「でも、まさか提督から手を出されるとは思わなかったかなあ」

「ああ、それは本人も驚いてたよ」

「まあ、そうよね。……ひどいこと、言っちゃったし」

「いや、そこじゃない。私達、艦娘が沈む事を『多少の犠牲』と言われた事にシヨックを受けていた」

「……………」

そういう事、だったんだ……。

「まあ、多分『お前達』というか『大和』だろうけどな」

「ふえっ!?？」

な、何を言い出すのこの子!?？」

「な、何を…………!?？」

「いや、少なくとも私や鳳翔は、お前ら早くくっ付けとっているが」

「な、なんでよ!?？私にも提督にもそんな気はないわよ!!？」

「いや、提督はともかく、お前はもう無理だ。諦めて認めろ」

な、何よ本当に！あんなエロ提督の事なんて私は別に…………!!？」

「まあ良い。提督は多分、自分の事に気付いてもないだろうから、告白

するならお前からだぞ」

「ま、待ちなさい！なんで私が提督が好きである体で話が進んでるの

よ!?？」

「じゃあ、私が提督を取ってもいいのか？」

「ダメ！」

「即答してるじゃないか…………」

くっ…………妹の癖に姉にカマかけるなんて…………！

「大和。最近大丈夫か？どうもバカになってきてる気がするが…………」

「昼間っから部屋で寝転がって漫画読んでる貴女に言われたくないわ

よー」

「いや、そう言うんじゃない。なんというか…………アホの子になって

きてる気が…………」

「う、うるっさいわよ!!？」

こっの…………！お姉ちゃんのことをバカにして…………！

「まあ、なんでも良いが、今回みたいに我々はいつ沈むか分からないん

だ。仲直りしたければ、早めに提督と話しておけよ」

「……………」

私は無言で俯いた。仲直りはしたい。したいけれど、提督はそれを許してくれるのだろうか。多分、いつも説教してる側の私が説教されるに違いない。提督に、提督に…………説教、される…………か。

「……………悪くないかも」

「何がだ？」

「な、なんでもないわよ」

武蔵は頭上に「？」を浮かべると、「ま、いいか」と呟いた。

「それより、提督の部屋から別の漫画をパクッ……借りてきたぞ。読むか？」

「ありがとう。いつも悪いわね」

「構わん。何日もドックにいては飽きるだろう？」

「うん」

私は武蔵に持って来てもらった、ドラゴンボールを読みながら、提督との仲をどう修復するべきか、考えた。

十十十

武蔵が出て行って数分後、すぐにワーワーと音がし始めた。

多分、提督が武蔵にチョツカイを出したんだろう。多分、メガネを取られたとかそんなところ。

で、武蔵はメガネを取られるとどういうわけかシャイになるので、それを利用したんでしょう。あの二人思考と行動なんてすぐにわかる。

「……………私と喧嘩（？）したのに、提督は元気なんですわ……………」

我ながら、随分と小さいことを気にしたと思う。でも、気になってしまった。

まあ、良い意味でも悪い意味でも切り替えの早いあの人なら、当然といえば当然かもしれない。

私は気を紛らわすために、ドラゴンボールを濡れない場所に置いた。そして、鏡の前に立つと、両手を右腰に当てた。

「かくめくはくめく波アアアア!!？」

両手を前に突き出した。当然、何も出ない。

「……………なんか、違うな……………もつと、こう……………」

ブツブツと呟きながら、再び構えを取る。

「かくめくはくめく……!!?」

「や、大和さん!!? なんか大声しましたけど何かありましたか!!?」  
大鳳さんが入って来た。直後、大鳳さんは半眼になり、私は真っ赤になった。

そこから先は、何があつたかイマイチ覚えてない。ただ、両手で顔を覆う私の隣に座る大鳳さんは、ドラゴンボールを読みながら呟いた。

「……………私、何も見てませんから」

「……………お見苦しいところをお見せしました……………」

「……………何も、見てませんから」

穴があつたら埋まるどころか掘り進んでブラジルで骨を埋めたい……………。死にたい……………。

「……………この前の出撃のことで謝りに来たのですが、そんな雰囲気じゃなくなっちゃいましたね」

「違うんです……………ドラゴンボール読んで、少しハイになってしまつて……………。セルに親子かめはめ波をぶち込んでる所を見て、もう……………」

「何も見てませんってば」

……………。死にたい。私は何をしてたんだろうか……………。なんか、提督だけ元気だったから悔しかったんだらうなあ……………。

まあ、大鳳さんもこう言ってくれてることだし、忘れよう。

「それに、私はベジータ派ですから」

「み、見てないって言ったじゃないですかあ!!?」

ひ、酷い……………意外とサディストだこの人……………。

「それで、何かご用ですか?」

「あ、いえ。庇っていただいたお礼と謝罪に参ったのですが……………いえ、こういう事は雰囲気の流れされちやいけませんね」

大鳳さんはそう言うと、立ち上がった。

「この前は、庇っていただき、ありがとうございました。そして、申し訳ありませんでした……………」

「あ、いえいえ。…………? な、なんで謝られるんですか?」

「私の所為で、提督と喧嘩させてしまったみたいで……………」

「ああ、いえ、気になさらないでください。それに、喧嘩になったのもっと別の理由ですから……」

「その所為で、あんな奇行に走るようになってしまっただけ!!?」

「それは忘れて下さい!!?」

そこを注意しておいてから、私は言った。

「とにかく、気になさらないでください。ね?」

「……………分かりました。や、大和さんも、とりあえず頭の中を何とかして下さいね!」

「やめてっつてばあ!」

涙目になると、大鳳さんは入渠ドックから出て行った。

……………ふう。さて、ドラゴンボールの続きでも……………そう思った直後、「あがぼっ!?」と声が出た。ドッボン☆と隣のドックで音がした。水飛沫が舞い上がり、私は思わず横を見た。

瞬きしていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「あーもうっ、最悪……………パンツまで濡れるわ、鼻にお湯入るわ……………  
っーかこれ、人体に影響ないんだろうな……………」

「……………提督?」

思わず、私が口を漏らすと、提督はこっちを見た。全身びしょ濡れで私を見た。

……………どうしよう、ピンチだけど、チャンスかもしれない。今、謝るチャンスなんじゃ……………!

「チツ……………」

舌打ちの音が聞こえた。提督から。それに、私は思わずビクツと怯んでしまった。

提督は、不機嫌そうな表情を浮かべると、ドックを出て行った。

提督に、嫌われた……………?」

私は、ただ愕然としていた。

## 第14話 原因がわかればこつちのもんよ

翌日、俺は一人で執務室で仕事をしていた。だって大和さん来てくれないんだもん。

この前、出撃した海域を、大鳳さんを旗艦にした部隊で突破してやった。大和さんも昨日の夜中に入渠が終わったし、艦娘達は祝勝会をやる騒いでいた。ちなみに、俺は誘われてません。

で、今はその報告書の作成中だ。なのに、俺の隣には、何故か大鳳さんが座っていた。

「……………なんでここにいんの?」

「大和さんが完全復帰するまでの間、私がお手伝いします」

「それはいいけど……。大鳳さんだって、祝勝会の準備に参加しても良いんですよ?文化祭も何でも、準備してる時が一番楽しいんですから」

「いや、それは知りませんが、良いんです。大和さんが全快するまでは、私はその代わりをします」

「ふーん……………」

まあ、大鳳さんを庇って大和さんは大破したわけだし、責任感を感じる気持ちは分からなくもないけど……。ま、いつか。これは俺が口出す問題じゃない。

「ま、そういうことなら……。じゃ、この報告書の表紙にハンコと今日の日付だけ書いてください。それで終わりです」

「ええっ!??ほ、報告書はこれで完成なんですか!??」

「はい。さっさと終わらせたかったので、さっさと終わらせました」

そう言うと、俺は立ち上がってコーヒーを淹れた。大鳳さんの分も淹れて、机の上に置いた。

「あ、ありがとうございます……………」

「いえいえ」

そういえば、ここ最近は大和さんとか使いまくってたけど資材の方は大丈夫かな。

「……………あれっ?」

「どうかしました?」

「いや、目の錯覚かな……。資材が……特に弾薬が165とか見えるんだけど……」

「そりゃあ、大和さんや武蔵さんを何度も出撃させたらそうなりますよ」

「……………」

だよ。気が向いたからって攻略なんてするんじゃないよ。

「……………しばらく出撃はいいや」

「終わりましたよ、提督」

「なら、部屋戻って良いですよ」

「提督は?」

「俺はここでテレビ見てから部屋でモンハンやるわ」

新作出たし。

「祝勝会には出ないんですか?」

「あーいいです。俺がいても空気悪くするだけなんで」

「ああ……(察し)」

大鳳さんは察しが良くて助かる。

「でも、大和さんは提督に来ていただいた方が喜ぶのではないですか?」

「? なんで大和さん?」

「えっ?」

「えっ?」

「提督は大和さんが好きなのではないんですか?」

「えっ?」

「えっ?」

俺が?大和さんを?

「好きですけど?」

「うえっ!?」

「そりゃ、アレだけ助けてもらってたら嫌いとは言えませんよ」

「ああ、やっぱりそういう感じですよ……」

「恋愛的には……どうなんですかね。まあ、大和さんが彼女だったらなーって思ったりもしますよ」

「つーか、こんな話つい最近誰かにした覚えあるんだけど。デジャヴって奴か？」

「じゃあ、付き合っちゃえばいいじゃないですか」

「いや、無理無理無理。俺が女性と上手く付き合えるわけがない」

「ええっ………なんでそんなマイナス思考なんですか………」

「なんでだろうな。なんか知らないけど、俺って人付き合いが苦手なんですよね。だから、女性と付き合うなんて尚更無理だと………」

「意外と上手くやれると思いますけどね………」

大鳳さんは、そう言いながら席を立った。

「では、私は祝勝会の準備してきますね」

「あ、はい」

………しかし、俺は大和さんが好きなのか？確かに大和さんがないと困るし、最近は大和さんと話してないからか、イライラしてゴアマガラをフルボッコにしたりしてる。むしろ、大和さんがいなくなったら誰に俺はチョツカイを出せば良いのかと考えてしまったりもしてる。

………あれ？これ、普通に大和さんのこと好きなんじゃね？

………いやー、でもなー。愛してるかって言われたら微妙なんだよなー。

「………んー………」

唸りながら、俺はとりあえずその辺にあったダーツの矢を投げた。それが、執務室にある的に向かう。が、その前に部屋を出て行くこうとした大鳳さんが歩き出した。

「っ!?？」

「あっ」

大鳳さんは慌てて避けた。体勢を崩してひっくり返り、スカートが捲れた。ダーツの矢は的を外れて壁に当たって弾かれ、ヒュンヒュンと回転しながら落下し、スカートを捲れたまま固定するように、スカートを貫通して床に刺さった。

「キャツ……………!!?」

「た、大鳳さん!!?す、すいませ」

謝りながら駆け寄ろうとした直後、何も無いところに躓いて、大きく転んだ。捲れたスカートの中に頭を突っ込んだ。

「なあつ……………!!?」

「す、すいませ……………!!?」

「き、きやああああ!!?」

ガツ、と顔面を蹴られた。俺は後方に大きく蹴り飛ばされ、ソファーに頭をぶつけた。

「つてて……………んっ?」

後頭部をさすると、布が当たってる感触。見ると、大鳳さんのスカートを握っていた。ダーツの矢は抜けたようで、大鳳さんの横に転がっている。

「……………」

大鳳さんは無表情で立ち上がると、俺に艦装のボウガンに向けた。

「……………あ、あの、」

「……………」

「……………た、大鳳さん……………?」

「……………」

「……………い、今のは、わざとじゃなくて……………その、」

「……………」

「す、すいませんでした!!?」

「……………」

大鳳さんは無言で俺を見つめると、俺の前にしやがみ込んだ。

「……………いで下さい」

「……………は?」

「ズボン、脱いでください」

「いや、何言ってるの?大丈夫?」

「前の時は、私も提督も恥ずかしい思いをしたので同罪でした。が、今回は明らかに私だけ不公平です!」

「は、はあ!!?ふざけ……………!」

「ふざけてません！もし、駄々をこねるなら脱がします！」

「待て待て待て！お前本気かよオイ!!？」

「覚悟おとおお!!？」

「覚悟、じゃねえよ!!？」

襲い掛かってくる大鳳さんと、横に横転して逃げる俺。

だが、艦娘相手に逃げられるはずもなかった。すぐに捕まり、腰にしがみ付かれた。

「お、おい！何やってんだあんた!!？バカなの？死ぬの!!？」

「脱がす……！」

「お前の真の姿が脱げてるよ！」

「こ、この野郎……!!？」

なんとか引き剥がそうとしてると、執務室のドアが開く音がした。

「提督よ、少し話が……あつ、」

「えっ」

「えっ」

武蔵さんが入ってきた。時間が止まった。

+++++

すごく怒られ、ゲンコツを喰らった俺は、武蔵さんに連行された。

もしかしたら、拷問されるのかとドキドキしていたが、連れてこられた場所は間宮さんのお茶屋さん。もう何回、ここに武蔵さんと来てるんだろ……。

「で、なんか用ですか？これからモンハンやろうと……」

「大和に何を言った？」

俺の台詞を遮って、武蔵さんは冷たい声で言った。

「……………はっ？」

「何を言った？昨日から、大和が泣いているんだが」

「……………えっ？」

大和さんが、泣いてる……？

「誰だよ泣かした奴。ちよつと呼んで来い。俺の最強無敵の必殺の突

き（浣腸）をお見舞いしてやる」

「お前だよ」

「……………は？」

「なんで？意味分からんのだけど。」

「ちよ、ちよつと待つて。何言つてんの？俺、泣かすどころかここ最近、大和さんと話してすらないよ」

「私も詳しくは知らん。だが、大和が子供みたいに泣きじゃくる時に『ていとくが……………ていとくがあ……………!!?』と言つていたからな」

「ええっ!?お、俺!?なんかしたっけ……………?」

「まあ、私も提督が何かするとは思つていない。だから、何をしたか話してくれ」

「何をしたも何も……………あつ」

……………そういえば、昨日武蔵さんのメガネ取つて逃げた時、入渠中の大和さんの隣に落ちたっけ……………。

自分の顔が青ざめていくのが分かった。そして、それと共に武蔵さんの表情が鋭くなる。

「……………なにかあつたのか？あつたんだな？吐け」

いや、なんだかんだ昨日のメガネことは武蔵さんに会わなくて済んで、有耶無耶になったから、思い出される可能性が……………。

「い、いやっ……………知らないです……………」

ダンッ!!?と、武蔵さんは机を叩いた。机は折れて、真つ二つに割れた。

「……………むっ、ついうっかり机が割れてしまった」

つ、ついうっかり机が割れてしまった……………?それ日本語……………?と、思ったが声には出さなかった。次、口を開いた時に話さなければ殺す、と武蔵さんの目が語っていたからだ。

「……………昨日、武蔵さんのメガネ取つたじゃないですか」

「うむ」

「それで、男子トイレに逃げ込んだじゃないですか」

「うむ」

「あの後、俺が着任したての頃に作った逃走ルートを利用して、便

器の中に入ったんですよ」

「うむ？」

「そしたら、下の増設した入渠ドックに直通してたみたいで、大和さんの全裸を見てしまいました」

「う、うむ……」

武蔵さんは目を閉じて俯くと、とりあえず、と言った感じで俺を睨んだ。

「……とりあえず、昨日のメガネの分を一発な」

「い、痛くしないでください……」

ゴツ、とゲンコツが来た。

「メガネはどうした？」

「へ、部屋にあります……」

「後で返せよ」

「あの、今かけてるメガネは……？」

「予備に決まってるだろ、バカヤロウ」

そう言うと、武蔵さんは続けた。

「とりあえず、大和に謝りに行くぞ」

「………面倒をかけて、ホントすみません……」

まあ、大和さんの仲直り出来るならそれで良いかな。

俺は武蔵さんに連行される形で、大和さんの部屋に向かった。

## 第15話 勘違いしたままだよこれ

大和さんの部屋の前。そこに到着すると、俺は深呼吸した。さて、謝る、謝るぞ…………。

……………もう一回深呼吸。

「おい、ダンジョンか私の部屋は」

「いや、だって緊張するじゃないっすか」

「だからって二度もするな。言い忘れていたが、大和は今、体調が悪い」

「えっ、何それ聞いてない」

「余り、精神に負担かかるようなことは言うなよ」

「えっ……………」

「い、今更そんな事言うなんて……………!??ていうか体調悪いって……………!!」

俺はゴンゴンと強めにノックした。

「何よ……………武蔵?体調悪いから今は」

「大和さん」

「て、提督!?!」

「あの、体調悪いって聞いたんだけど……………大丈夫ですか?」

「ちよっ、待っ……………!だ、大丈夫じゃないです!!?」

「えっ、そんな辛いんですか?入りますよ」

「は、入らないでください!う、移しちや悪いですし!」

「いや、俺身体だけは頑丈で風邪なんてハレー彗星並みの頻度でしか引きませんから」

「お気を使わないでくれて結構です!」

「はあ?気?そりや常日頃から使ってますけど」

「ッ!」

ドアの向こうから、息を呑む音が聞こえた。そして、しばらく静かになった後、大和さんは震え声で言った。

「……………提督」

「はい」

「大和を、解体して下さい……」

「はい？」

「こいつ今、なんつった？」

「提督は、いつも口うるさい大和が嫌いなんですよね!?？それなら、大和は解体されて、鎮守府から……」

「いや、好きだけど」

「出て行……はっ？」

「んっ？」

思わず口を滑らせると、大和さんどころか、武蔵さんまで声を漏らした。流石に、直で本人に好きと言うのは照れたが、開き直って好きである理由を言った。

「や、だから俺は大和さんのこと好きですよ。構ってくれるし、仕事も手伝ってくれるし（一人でも出来るとはいえ）」

「……で、でも、昨日お風呂に突入して来たときに、舌打ちしましたよね？」

「しましたっけ？」

「しましたーアレで大和は提督に嫌われたと……!」

腕を組んで俺は思い出す。……ああ、そういえばしたような気がする。

「あの時は……確かアレ神様に舌打ちしたんですよ。大和さんと全然話せなくて、俺嫌われたのかな、と思い始めてた時に、まさかの風呂突入して全裸見ちゃったから、俺にあんな運命を辿らせた神様をいつか殺すと心に決め……」

そこで、俺は「ヤバイ」と悟り、口を止めた。そうじゃん、俺ここに全裸見に来たこと謝りに来たんじゃない。

「や、大和さん……すいませんでした。昨日、わざとじゃないとはいえ、大和さんの裸を見てしまって……」

「……………」

しばらく沈黙。流石に怒ってるか、俺はそれ以前にも股間を下から覗き見て、パッドを強奪しておっぱいを見ている。許される方がおか



た。

とりあえず、医務室に運んだ。

+++++

夕方になった。今頃、食堂では祝勝会をしているのだろうか。医務室で、大和さんの面倒を見ている俺には関係のない事だが。

本当は、今日中に大和さんが目を覚ます保証はないので、俺は部屋でゲームをやりうと思つてたのだが、武蔵さんが「お前は大和の側にいろ」との事で、医務室でゲームをしていた。

「……………おお、ラオかなり楽しくなつてんな」

大砲の弾三連発とかマジか。ラオ可哀想だろこれ。

そんな事を思いながらゲームしていると、「んっ……」と吐息が漏れた。大和さんからだ。

目をコシコシと擦りながら辺りを回し、大和さんはくあつと欠伸をして起き上がった。

「……………あ、おはようございます」

「ていとく……………おはようござ……………提督!?」

「提督です」

ギョツとした様子で大和さんから声が上がった。

「て、提督!??なんでここに……………!?」

「うおお、なんだこの大砲。ラオの顔面超燃えてたぞ今」

「て、提督!話を……………!」

「しかも5分後にまた使えるんか。反則だろこれは」

「て、提督!」

「あ、ちよい待ち一時停止するから……………よし、おk」

一時停止した後に、ゲーム機を台の上に置き、俺は大和さんの方を見た。

「で、何ですか?」

「ど、どうして提督がここにいるのですか!??ていうか、ここ何処ですか!??」

「医務室」

「い、いい医務室!!?」

「大和さん大丈夫ですか? さつき話してたと思ったら急に倒れたんですよ?」

「話してた……?」

すると、大和さんは何か思い出したのか、カアアアツと顔を赤らめた。すごい赤らめた。

「大和さん?」

「な、なんですか!?!?」

「まだ熱あるんですか? 顔赤いですけど」

「あ、赤くありません! 誰がシャアですか!?!?」

「いや、言つてねえ」

「なら黙つてなさい!」

「え? 俺が黙るの?」

大丈夫かこの人……。

大和さんは真つ赤になつた顔を両手で隠すと、指と指の間から俺を見て、小声で言った。

「……………か?」

「あん?」

「……………さつきの言葉は、夢、ですか?」

「さつきの言葉つて、どの?」

「私のことが、好きとか……………何とか……………」

「……………あー、それは夢じゃないですけど」

「ツ……………!」

「それより、さつきの返事欲しいんですけど……………」

早く安心したいためか、俺はさつき許しを乞うた時の返事を急かしてしまった。

すると、しばらく沈黙。大和さんは顔を赤らめたまま動かない。

……………あれ、なんだろうこの感覚。なんか、色々と間違いが起こつてるような気がする。

「……………あの、大和さ」

「ちよつと今は話し掛けしないで下さい」  
「えっ」

「……………」

あの、怒ってるの？

すると、大和さんが顔を真っ赤にしたまま、震えた声で言った。

「……………」あ、あのっ、

「ん？」

「……………」あ、あああのっ、て、提督……………」

「なんすか？」

「……………」じ、じじっ、実はっ……………」私もっ……………」

「……………」？？」

「……………」やつ、大和もっ……………」

……………えつと、なんで大和「も」？許しを乞うてるのだから、me  
t o o 的な意味になるはずが……………いや、大和さんなりの伝え方があ  
るのだろう。ここは黙って聞こう。

「……………」

「……………」

「……………」や、大和をっ、秘書艦に復帰させて下さい……………」

何故か、落胆しながら大和さんはそう言った。

「はい？や、むしろこちらからお願いしたいくらいなんですけど  
……………」

「……………」はあ、私のバカ……………」

「えっ？」

なんで急に自己嫌悪？もしかして、そんなに秘書艦やりたくないの  
？

「……………」あの、もし嫌なら別に」

「うるさい黙ってて」

「はい」

えっ、なんで怒ってるの。マジでなんなのこの人。

大和さんはしばらく肩を落とした後、再び深いため息をついた後、  
切り替えるように両頬を叩き、再び俺に正面から向き直って頭を下げ

た。

「…………それと、提督。この前は、申し訳ありませんでした。提督は、大和の身を案じて下さったのに、指揮官としての資格がないなどと、言ってしまうって…………」

「え？いや、良いですよ。気にしてないです。あの時は俺も悪かったですよ。大和さんに手をあげるなんて」

「…………いえ、悪いのは大和ですから…………」

「いや、悪いのは俺です。そもそも、俺がキチンと指揮を取れてれば、大和さんは大破なんてしなくて済んだはずですから」

「いえ、大和の方が悪いです」

「や、俺の方が悪い」

「いえ、私の方が悪いです。駅とかに手配書貼られています」

「いや、俺の手配書の方が懸賞金が高い」

そこまで言い合った後、大和さんはクスツと笑うと、微笑んだまま言った。

「では、お互いに悪かった、としましょうか」

その笑顔を見て、思わずドキツとしてしまった。…………あーくそつ、やっぱこの人は美人だ。美人で可愛いとか反則だろ畜生。けど落ち着け。どんなに俺が美人さんが好きでも、美人さんが俺のことなんて好きになるはずないんだ。平常心、平常心。

…………よし、落ち着いた。

「じゃ、俺寝ますね。今、新海域攻略の祝勝会やってるみたいですから。大和さん、気が向いたら顔出してあげて下さいね」

「？ 提督は祝勝会行かないのですか？」

「俺の事なんて、みんなお呼びじゃないでしょうから」

そう言っつて、俺は机の上のゲーム機を持って、立ち上がって医務室のドアを開けた。

ドアの向こう側には、武蔵さんを先頭に、うちの鎮守府の艦娘が全員揃っていた。

「……………」

「……………」

しばらく沈黙。やがて、武蔵さんが「退避！」と言うと全員が逃げ出した。

怒る気力も追いかける気力も無かった俺は、欠伸びながら自室に向かった。

## 第15. 5話 ヘタレはヘタレだった

居酒屋鳳翔。そこで、私は既にビールを5杯飲み干して、カウンターに伏せていた。

「ううう……わたしのばかあ……なんであそこでチキるかなあ……」

隣の武蔵と、カウンターの鳳翔さんはそつと目をそらしていた。

「今回に関しては本当にその通りですよね……」

「ああ。何もビビる要素はないだろうに」

ぐうの音も出ない程の正論を叩き込まれ、私は項垂れるしかなかった。

「……………だって、だってえ……そもそも提督も提督よ！あんな風に急に告白してくるなんて!!?」

「いや、お前が倒れた後もちゃんと医務室で仕切り直していたらう」

「いや、それは、そうだけど……」

「あそこで覗いてた艦娘、全員が呆れてましたよ。『何故あそこでチキるのか』『面白いネタ掴みそうだったのにガツカリ』『大和さん意外とビビりだった』『逆に、提督が意外と男だった』……」

「や、やめてくださいよー!」

私は頭を抱えて、再び机に伏せた。

「うううう……!し、仕方ないじゃない……変に緊張しちやっただもん……」

「しかし、あの提督が大和さんにあそこまで言うなんて……少し意外ですね」

鳳翔さんが話題を切り替えてくれた。ほんと、こういうところはお母さんだなあ。

鳳翔さんが続けて言った。

「ま、なんにせよ告白されたんですから、いつでも大和さんの方から告白すれば、晴れてカップルの誕生ですね」

「いや……確かにそうかもしれんが……」

「？ 何か心配があるのですか？ 武蔵さん」

「いや、前に提督に大和の事を聞いた時にな、」

武蔵の言葉に、私の耳がピクツと動いた。それを見て、武蔵が目を逸らした。

「……………いや、なんでもない」

「な、何!?? 武蔵!」

「武蔵さん、言い掛けてやめるのは卑怯ですよ」

「……………」

ジィ〜ツと、私と鳳翔さんが武蔵を見つめると、観念したように武蔵はため息をついた。

「……………前に、提督と出かけた時に聞いたんだよ。大和のこと。そして、なんか別に大和に恋してるようには見えなかったんだ」

「ええっ!??」

私はその言葉に、椅子を倒して立ち上がった。

「じ、じゃあつ、あのときの言葉は!??」

「それが分かれば苦労はしない。ま、心変わりしたってこともあるだろうし、気にするな」

「気にするわよ!!?ど、どういうことよ!!?」

「わ、わかったから落ち着け! 揺らすな!」

武蔵の肩を掴んで揺らすのをやめた。

「ま、まあ……………あの提督の事だ。大和の事が好きである事は嘘ではあるまい」

「そうですね。お二人の話を聞いてる感じだと、提督は嘘が苦手なようですから」

「……………」

……………そうよね、あの人の嘘はすぐに見抜ける。とりあえず、喜んでおくべきよね。

「それよりも、ここからは問題は大和の方だな」

「えっ? ちよつ、なんでよ!??」

「それもそうですねえ」

「鳳翔さんまで!??」

「大和、お前は奥手過ぎる。普通、あそこまで言われたらちゃんと答えるぞ」

「そうですね。提督だって少なからず勇気を振り絞ったでしょうし」

「何より、ここまで提督を落とすために何もして来なかったからなあ」  
「毎日毎日、一緒に居られれば、いつか恋人になれると思ってる幼馴染みたいですね」

「付き合いたいなら、必ず何処かでどちらかが告白しなければならぬ、そして今回は向こうからして来たというのに」

「それすらにも怖気付きましたからね」

「何より、これまでデートの一つも誘ったことがない」

「男子中学生みたいです」

「くくくっ！う、うるさーい！な、なんですか二人して!?!」

「今現在、ありのままの大和(さん)」

「声を揃えないで下さい！というか最後の、男子中学生は酷いです！」

私が声を荒立てても、二人は何食わぬ顔で続けた。

「ま、幸い提督は艦娘には決して好かれてるわけではないし」

「そんなに焦る必要も無いと思いますが、」

「そもそも今回の事は、大和が沈みかけた所だ。仮にも今は戦場」

「お互いにいつ会えなくなるかわかったものではありません」

「今のうちにデートの一回くらい誘っておいた方が良くないか？」

「なんで二人ともそんな息ぴったりなんですか!?!? 打ち合わせでもしてたんですか!?!」

ツッコんだものの、少し納得していた。確かに、いつ死ぬか分からないのに、モタモタしてる場合じゃない。

「女は度胸ですよ、大和さん」

背中を押すように鳳翔さんに言われ、私は頷いた。

「……………そうですね。誘ってみても良いかもしれないです」

「そういえば、さつきから思ってたんだが、大和はもう提督が好きなのとを訂正する気はないんだな」

「!?? な、何を……!??」

ひ、人が決心した時にこの妹は……!!?

「そういえばそうですね。大和さん、もう認めたいみたいで良かったです」

「な、何もよくありません!違いますから!」

「いやそれは無理」

「だから声を揃えないでください!」

何なのよこの二人!??人の心を蹴る時だけ仲良くなって……!!?

「良い加減、素直になれ大和。さつきも言ったが、いつ死ぬかわからないんだ。素直にならずに後悔する真似はするなよ」

武蔵に言われ、私は少し腕を組んで考えた。

……武蔵の言うことも分かるけど、素直に好きと言えないのも事実なのよね……。これがただの照れ隠しなのか、何処か拒絶する場所があるのか……。まだ私には分からない。

「武蔵さん、面倒なので提督に電話して、大和さんとデートの約束をさせてしまえばよろしいのでは?」

「それいいな」

鳳翔さんがとんでもないことをほざき出した。

「な、何を勝手なことを……!??」

「いえ、ですから、とりあえずデートでもすれば良いじゃないですか」

「な、なんでそうなるんですか!」

「二人きりになれば、何かわかることもあるでしょう」

「そ、そんな勝手な……!武蔵も何か言ってやってよ!」

「……あ、提督か?もしかして寝てた?」

「もう電話してる!??ちよつ、やめなさ……!」

「はい大和さん、どうぞ」

「どうどう、じゃないで……つて、大和型の私を抑え込んでる!??」

こ、この鎮守府の鳳翔は化け物か!??

「ああ。少し、用があつて……なに、また今度、大和のパッド渡してやるから許せ。……うん、うん。……ああ、それで、明日暇か?」

「ちよつ、やめなさい武蔵……!」

「え？無理、か……じゃあ明後日。……ダメ？いつなら空いてる？……おい、ふざけるなよ。ダメ。明日だ。明日、大和がブラジャー買  
いに行きたいらしいから……」

「なんでよりにもよってブラジャー？！」

「明日はどうしてもダメ、か……。なら、いつが良い。とりあえず、大  
和とどっか出掛けろ」

「や、やめなさい武蔵！そんな強引に……！」

「え？嫌だ？」

ビキツと、額に青筋が立った。そして、武蔵からスマホを奪った。

「あ、おい大和……！」

「提督。今度、出掛けましょう。そうですね……来週の日曜日とか。  
は？嫌？ふざけないで。絶対行きます。いいですね？……んなっ  
？そ、そんな脅しには乗りませんからね！で、では失礼します！」

通話を切った。勢いとはいえ、デートの約束をしてしまった。

「……………」

涙目で二人を見ると、武蔵は知らん顔で熱燗を飲み、鳳翔さんは知  
らん顔で料理していた。

「……………」た、助けて下さい」

「頑張って」

「み、見捨てないで下さいよう!!？」

結局、助けってもらう事になった。

第16話 頭で考えてる事と、目の前で起こる事はどうしてもかみ合わないことがある

翌朝、ドギマギしながら俺は準備をしていた。なんか、昨日の夜に武蔵さんから急に変な電話きて、なんか大和さんと出掛けろだのなんだの……。

まあ、どうせ当日までには忘れてるだろうな。なんかあの時は飲んでたっぽいし。さて、仕事しますか。

指しか使わない作業をこれから開始するのに、何となく気分で、両腕をクロスするストレッツチをしながら歩いて、執務室のドアを開けると、中にはすでに大和さんがいた。

「……………あ、え？なんで？」

「おはようございます、提督」

「あ、おはようございます……………」

「日曜日、何処に行きます？」

忘れてなかった。

「いや、別に何処でも良いでしょ。てか何、その為にこんな朝早くから待ってたんですか？」

「い、良いじゃないですか！」

「そういうの決めるのは仕事終わってからにしましょう」

「うっ……………変な所でマジメですね……………」

「いや、だって後から焦って仕事するの嫌じゃないですか」

「ああ、そういう……………」

他になんの意味が？俺は机の前の椅子に座って、仕事を始めた。その隣に座る大和さん。

「……………」

「……………」

この前の出撃のお陰で、我が鎮守府の資材は壊滅しかけている。よって、出撃はほとんど出来ない。よって、仕事はほとんど無いに等

しかった。

よつて、書類仕事と開発と遠征の報告書だけやって、後は自由である。

だが、大和さんと出かける時の事を話さなければならぬ。何とかして仕事を長引かせなければならぬ。だつて、どうせこういうのつて男が行く場所を決めなきやいけないんだろ？だが、ロクでもない場所を選ぶと、何を言われるか分からんし。

よつて、俺は仕事の時間を伸ばし、今日中に出掛ける場所を決められなくさせる作戦に出ることにした。そのためにする事、それは……、

チヨツカイ、である!!？

俺は音速レベルの手刀を大和さんの胸に打ち込んだ。この人の胸にはパッドというなの装甲が着いてるため、セクハラにはならない。カーンツと音が鳴り、大和さんは顔を赤くして自分の胸を両手で抱くように隠した。

「……………なんの真似ですか？」

「……………手、超痛い……………腫れ上がつて来た……………」

「当たり前でしょ、このおバカ！一応、装甲なんですから！」

良かった、利き手でやらなくて……………」

「もう……………ほら、じつとしててください」

大和さんは引き出しから救急箱を取り出すと、俺の手に湿布を貼つた。

「ふう、これで良しっ」

「すみませんね、迷惑かけて」

「……………」

「……………」

あの、大和さん？手え離してくれませんか？

「さて、提督」

「あの……………せっかく湿布貼つたのにりんご潰す勢いで手握っちゃ意味が……………」

「どういうつもりだったのか？お聞かせ願えませんか？」

「すいませんでした大和さん！」

謝ると、ようやく手を離してくれた。

「ま、提督のチョツカイにも慣れて来ましたから良いですけど、セクハラはダメですっ」

「いや、パッドあるの分かってたから胸に……」

「パッドじゃないって言ってるでしょ」

「おっぱい増強器具でしたね、すいませ」

「提督？」

「……………九一式徹甲乳でしたごめんなさい」

最近、大和さんの怒り方（特に胸に関する）が容赦ない。俺のこと、提督だと思ってるのかな。別に良いけど。

「じゃ、仕事しましょう」

って、そうだ。何とか仕事するのは避けないと。

「大和さん」

「なんですか？」

「鼻毛出てる」

「う、嘘!?!?」

「嘘」

「て、提督！」

こんな小さいネタじゃダメだ。何とか上手く……………上手く……………。

すごく考え事をしてると、ポンツと頭に何かが置かれた。大和さんが俺の頭を撫でていた。

「何か考え事ですか？提督」

「えっ、あ、いやっ……………」

「後で大和で良ければ相談に乗りますから、今は仕事を進めましょうね？」

「……………」

えー、何それ。母親？スッゲー卑怯でしょそれは。そんなん言われたら何も出来ないじゃん。てか、ここで何かしたらマジで嫌われそうで怖いんだけど。

「……………はい」

素直に頷いてしまった。

十十十

昼飯の時間。俺は一人で執務室でパンをかじりながら、パソコンで調べ物をしていた。

チョツカイを母性で封じられた今、最早頼れるのはインターネットだけだ。幸い、この世の提督はバカばつかなので、艦娘とデートに行つたところをTwitterに投稿したりしてるので、調べればどういふ場所に行けば良いのか、すぐに分かった。

しかし、どれもイマイチピンとこない。それは、デートスポットばかりだからだ。冷静に考えれば、男女で出掛けるからって、別にデートというわけではない。俺と大和さんの場合なら尚更だ。

それなら、大和さんが喜びそうとか考えないで、鎮守府に必要なものの買い出しに行けば良い。そのの付き添いで来てもらう感じ。

……いや、待て。これで大和さんは納得するか？あの人は何を期待してるか知らないが、朝一で俺より早く起きてプランを練ろうとしてた人だ。少なからず、楽しみにして……、

……いや、待て(2回目)。俺は嫌な事は早めに終わらせるタイプだ。というか、頭が悪くない人なら大抵そうだろう。と、いうことは、大和さんも俺と出掛けるのをさっさと終わらせようとしている可能性は低くないんじゃないか？

元々、武蔵さんが掛けてきた電話だ。無理矢理、出掛ける約束をさせられた可能性も無視出来ない。

「……つまり、大和さんは嫌がってるかもしれないっつーことか……」

いや、かもしれない所か正解だろうなこれ。

なら、いつそ出掛けるのをやめてしまえば良いのでは？……まあ、その辺は仕事終わらせたら、大和さんと話し合おう。

「……じゃ、ニコ動でも見るか」

そう呟いた直後、大和さんが帰って来た。

「お待たせしました。提と……」

ボフツと黒板消しが落ちて、大和さんの脳天に直撃した。うわやっべ、仕掛けてたの忘れてた。

「てえいいとおくう〜!!?」

「あーばよー、とつつあーん!」

「待ちなさいー!」

俺は窓から飛び上がって屋根に乗り、その後を大和さんが追い掛けて来た。

屋根の上の鬼ごっこ。俺は慣れてるが、大和さんにとっては初めての屋根の上なので、いつもより遅い。

俺は後ろの様子を見ながら逃げる余裕があった。

「よ、よくこんな走りにくい場所をちよこまかと……!」

恨みがましそうな目で俺を見ながら追いかけて来る大和さん。その直後、ズリツと大和さんは足を滑らせた。

「えっ?」

そのまま転び、屋根の上を転げ落ちた。あつ、これはヤバイ。俺は慌てて、大和さんの方にスライディングしながら落ちた。

そして、大和さんが屋根から落ちる直前、なんとか手を掴んだ。だが、大和さんは戦艦だ。ぶつちやけ、俺より体重が重い。俺も一緒に落ちそうになったが、何とか屋根の淵に掴まった。

「て、提督……!」

「大和さん、ごめん」

「へっ?」

謝ると、俺は屋根を掴む手を離れた。落下する俺と大和さん。

「うそおおおおお!!?ちよつ、離しました!!?今、離しましたね!!?」

「舌噛むよ」

言うつと、大和さんを抱き抱えて自分の体を下にした。

「っ!!? て、提督! な、なにを……!」

こうしないと、大和さんが怪我をする。それだけは避けなければならぬ。だって、これ俺が原因だし。チョツカイで怪我人を出すわけにはいかない。

それに、俺が怪我をしておけば、後で怒られる可能性はかなり減る。後、ちよつと今の俺かつこいいいし。

なんて思っていると、ポフツと柔らかい感触。抱き抱えられるような。目を薄つすらと開けると、武蔵さんがお姫様抱っこで受け止めていた。

「何やってるんだお前らは……」

「あれ？武蔵さん？」

姉妹に挟まれた俺。大和さんの顔を見ると、すごい顔を真っ赤にして怒ってた。

「提督」

「……はい」

「覚悟はよろしいですね？」

「………はい」

二人にすぐく怒られた。

＋＋＋

仕事が終わわり、俺（頭にゲンコツによるコブ付き）と大和さんは、今度出掛ける所について話し合うことになった。

「で、どこ行きたいんですか？」

「提督にお任せ致します」

出たよこれ。言うと思ったよパツド女。

「……と、いうか、別に無理して出掛けなくても良いですよ」

「へっ？」

「なんかこの前の電話の感じだと、武蔵さんが無理矢理やらせた感じでしたし、俺なんかと別に出掛けたいってわけじゃないでしょ。なら、無理して出掛けなくても」

「いえ、ちがいます。提督」

台詞を遮って否定された。

「大和は、提督と二人でお出掛けしたいんです。確かに、前の電話は武蔵が強引にしたものですが、私は自分でも、提督と出かけたいと思っ

てますよ」

「……………」

えー、何それ。そうなの？なんか、こう……ズルくねそんなん。なんでそんなことストレートに言えんの？恥ずかしくないの？

……………あ、いや、恥ずかしいみたい。今になつて顔赤くしてるし。

「あつ、いや別に他意はありませんからね!??べ、別にそんな二人きりが良いってわけじゃないんですからね!??」

「あ、じゃあ武蔵さんも呼びます?その方が大和さんのにも」

「絶対ダメです!!?」

「お、おう……」

おお……力強いな。薬物取締りのポスターなの？

「ま、まあ行くのは分かりましたけど。何処にします?俺は別にどこでも良いですよ」

「実は私、前々から行ってみたい場所があったんですよ」

「? どこ?」

「パソコン、お借りしてもよろしいですか?」

「あ、どうぞ」

大和さんは俺の前のノートパソコンを自分の前に移動し、カタカタとキーボードを叩くと、画面を見せて来た。

「ここですー!」

その画面には、どっかの遊園地のホームページが載っていた。

「……………マジ?」

「嫌、ですか……?」

「嫌、では、ない、です……」

「じゃあ、決まりですね♪」

大和さんは楽しそうに、弾んだ声で言った。

と、いうわけで、行き先が決まった。

大丈夫だ……大学の時にジェットコースターは（一人で遊園地に行つて）克服した。大丈夫なハズ……………。

おデコに手を当ててブツブツ言っていると、大和さんは立ち上がった。

「では、お疲れ様です。お先に失礼しますね」

「う、うん……」

大丈夫だ、俺。気を確かに持て。

スキップでもしそうな感じで、大和さんは執務室のドアに手をかけた。

「提督」

「はい？」

「日曜日、楽しみにしてますね」

「……んっ」

大和さんは執務室を出て行った。

第17話 安心して、と言われて安心してできる奴は大抵不安になってないから

時の流れ、というのは本当にナメクさった存在だと思う。例えば、時間の流れが遅く感じる時。苦しい時や辛い時の様なマイナス的時間は長く感じるが、ゲームの発売日までのプラス的時間も遅く感じやがる。ジャンプを毎週買ってる身としては、月曜日までの時間がクツソ長い。

対して、時間が短く感じる時。楽しい時や授業の合間の休み時間みたいな時間は早く感じるが、来て欲しくない日も早く感じる。………今回みたいに。

「提督っ、お待たせ致しました!」

駅前で俺は大和さんと待ち合わせていた。今日は、大和さんと遊園地に出かける日である。

「………いや、全然待つてないです。てか、なんで待ち合わせなんてしたんですか?」

「その方が、デートの雰囲気が出るじゃないですか」

その言葉に、俺は若干顔を赤らめた。これ、デートだったのか………。

しかし、大和さんの私服か……。なんか、胸がすごく大きく見えんな………。

「あの、今日もパッド装甲してるんですか?」

直後、シユビツと俺の頬を突手が掠めた。

「提督?」

「すみませんでした………」

「まったく………デートの初っ端から何を言いだすんですか。私だから良いものの」

いや、お前少し掠ったぞ。それは「良いものの」と言えるのか?

「ちなみに、今日はしていません」

「教えてくれるんだ……え？じゃあそれ素の大きさ？そんなに大きいのにいつもパッドしてるんですか？」

今度は本当に外さなかった。脳天に拳が直撃した。

「提督……最初の頃に比べて随分と私にはハッキリ言うようになりましたね……」

「いや、なんかもう大和さんだから良いかなって思って。それに、さっきの質問下心とか一切ありませんでしたから」

「……まあいいです。この服は、胸を少し強調するように組み合わせせてあるんです」

「え、なんでそんな服装にしたんですか？」

「えっ？」

「だって、大和さんってエロいのがあんまり好きじゃないですよ？なんでそんな格好に？」

「……」

「別に普通の私服着てくればよかったろうに。なんでわざわざそんなボディラインを強調するような服を？」

「……」

思ったことを口にしてると、気が付けば大和さんは顔を赤くしていた。

「………大和さん？」

「い、良いから行きますよ！提督！」

「えっ。ちよつと……」

「………行きますよ？」

「……」

それ以上聞けば殺す、と、目が語っていた。俺は仕方なく従い、改札を通った。

電車が良いタイミングで来て、二人で乗ると大和さんが辺りを見回してるのに気付いた。

「どしたの？」

「いや、電車って初めて乗るので……」

「ああ。たまに、痴漢してくる人がいるので気を付けてください。痴

漢されたらその人の頭がサイバイマンみたいになるまでチョップして良いですから」

二人で立って、吊革につかまった。途中、揺れたりしたが、漫画やアニメのように自分の胸で大和さんを抱えるような事はなかった。そもそも、大和さん俺より身長大きいし。

「……………あ、提督」

「何？」

「お願いが一つあるんですけど……………」

大和さんは少し気恥ずかしそうに言うと、モジモジしながら続けた。

「……………大和のこと、呼び捨てで呼んでください」

「ブフツ」

吐き出して、前に座ってる人に睨まれた。すみません、と会釈してから、大和さんに聞いた。

「な、なんでですかっ？」

「だ、だってこれはデートですよ……………？さん付けなんておかしいじゃないですか」

「……………断ったら？」

「明日から提督の事は無視します」

「……………」

この女、本当いい性格してやがる。

「……………分かりましたよ。大和」

「……………!!？」

呼び捨てすると、大和さんはなぜか嬉しそうな表情を浮かべるとともに顔を赤くした。

「や、大和？」

「なんでもありませんっ」

+++++

電車から降りて、遊園地に到着した。二人分のチケットを（俺の自

腹で) 買い、中に入った。

「ここが遊園地なんですね〜!」

「何乗りたいですか?」

「何、と言われても……」

大和さんは辺りをキョロキョロ見回すと、ジェットコースターを指差した。

「……………」

「行きましょう♪ 提督!」

「待つて。いきなり? もう少しメリーゴーランドとかでジャブを入れてから……」

「嫌です♪」

なんて楽しそうな声でサディスト宣言するんだこの人は。いや、純粹に楽しんでるだけか。純粹に楽しんでる姿が可愛いからこそ、ジェットコースターに乗る事を拒絶できなかった。

「や、乗るのは良いけどもう少し時間を……」

「怖いんですか?」

「え? 怖いって何? 意味わかんない。誰か教えてくれ、俺に怖いって感情を」

「じゃ、乗りましょうか」

引き摺られる形で俺はジェットコースターの列に並んだ。

列に並びながら、大和さんはニコニコしながら聞いて来た。

「楽しみですねえ、提督」

「少し深呼吸させて下さい」

「いくらでもして下さい。あと20分はここで並びますから」

た、確かにその通りだな……。俺は深呼吸しようと、列から半歩分だけ外れて、軽く両手を広げると、前から走って来た男の子が身体にぶつかった。

俺の身体は後ろに倒れ込み、大和さんの胸の中に顔を突っ込んだ。

「っ!!??」

「っ!」

殴られる、と思い俺は咄嗟に仰け反って、顔を防御するように両手

で頭を抱えようとしたが、大和さんは、俺が顔を胸の中に突っ込んだまま、俺を抱き抱えた。

「まったく、何してるんですか提督。落ち着いて下さい」

「っ!!??」

「大丈夫ですよ、ただのアトラクションですから」

な、慰められてるうううう!!??しかも、怖いのはバレてるううううう!!??

……………というか、なんかこの人、今日テンションおかしくなないか?

「あ、あのっ…………大丈夫ですから、やめて下さい。そのっ…………恥ずかしいんで……………」

「へっ?……………あっ」

どうやら、正気に戻ったようだ。大和さんは顔を真っ赤にして、ジェットコースターに乗るまで一言も話さなかった。

『お次にお並びの方、どうぞー?』

ジェットコースターの席に座り、安全バーがガコンと降りて来た。大丈夫……………大学の時はジェットコースター乗れたんだから、ダイジョウブ……………。

自分を超励ましてると、俺の手を大和さんが握った。ふと横を見ると、ニコツと微笑んでいた。何故か分からないが、その笑顔を見て、何となく俺は安心してしまった。そうだ、大丈夫だ。隣には、大和さんがいるんだから。

すると、ジェットコースターは発進した。

+++++

やっぱり、怖いものは怖かった。

俺は、大和さんにおんぶしてもらっていた。

「……………大和さ……………大和、ほんと面倒かけてすみません」

「いえいえ。私も無理矢理乗せてしまったように申し訳なかったです」

いや、大和さんが行きたいところに来てるわけだし、こっちが付き合うのは当たり前前の事だ。それなのに、おんぶしてもらってるとか……いい大人が何してんだよ。

「それにしても、提督軽いですね。ちゃんと食べてますか？」

「いや、大和が筋肉お化けなだけでしよう」

「あ、なんかジェットコースター乗りたく」

「やめて下さい死んでしまいます」

「普段、何を食べてるんですか？」

「あー、俺って迷うと必ずラーメンにしちゃう癖があるから、曜日毎に食べるもの決めてるんですよ」

「へえ、どんな風に？」

「月火水木金はラーメンで、土曜が唐揚げ定食、日曜は執務室のダーツで決めています」

「ほとんどラーメンじゃないですか」

「ちゃんと中身変えてますよ。月曜から、醤油豚骨塩味噌油そばです」「最後のラーメンじゃないですし……」

いや、最後のだけ油そばって区切つて言う、「それも結局ラーメンじゃん」って言われる気がしたんだよ。

「では、明日は大和が栄養バランスをちゃんと考えた昼食をご用意しますね？」

「え、いやいいですよそんな。面倒かけたくないですし」

「面倒なんかじゃありませんよ、提督。提督のためなら、面倒な事なんてありません」

「っ」

ねえ、ちよつと？なんなのかなこの人。さつきから人をドキドキさせるようなことばっか言つて来てさ。

なんかもう、心臓の鼓動がうるせえんだけど。星の鼓動は愛かよ。スイカバーになって動けるデブに特攻すんの？いやいやいやいや、落ち着け俺。

大和さんはメチャクチャ良い人だ。俺に構ってくれるし、優しいし、厳しい所は厳しい。だが、良い奴つてのは誰にでも良い奴なんだ。

俺だけに良い奴なわけじゃない。つまり、今の大和さんはデフォオであり、別に俺に意識してるわけじゃないんだ。

だから、勘違いするな、俺。

「……………よし、落ち着いた。下ろしてもらって良いですか？大和」  
「大丈夫なんですか？」

「ダイジョウブ。というか、そろそろ周りの視線が突き刺さって、さつきから裂傷ダメージ入りまくって力尽きそう」

「わ、分かりました……………」

大和さんに降ろしてもらった。

「さて、次は何乗りますか？」

「そうですね…………アレにしましょうか」

大和さんが指差す先には、シューティングのアトラクションがあった。アレは、乗り物に乗って、光る幽霊を撃つ奴だ。

「……………いつも深海棲艦撃ってるのにアレやるんですか？」

「い、良いんです。言っておきますけど、今日はここのアトラクションを全部制覇するつもりで回りますからね」

「えっ……………？ここ、ジェットコースター四つあるんだけど…………」

「滅多に來れないんだから。全部乗ります」

こいつ、謝ってた割にさっきの反省してねえだろ。

俺はそう思いながら、掌に「人」と書きまくっていた。

## 第18話 慣れて来た頃つてのは本当に危険だよね。

昼飯を終えて、遊園地での遊びはいよいよ本番。名称は良く知らんけど、グワングワン前後に揺れる奴とか、上に上がって止まったと思ったら落下する奴とか、とにかく色んなのに乗った。お陰で、俺のHPはもう0に近い。

それでも、なんとか意識を保っていた。しかし、何だろうな、遊園地つて。大掛かりな拷問器具がたくさんあるけど、これでワーキヤー言ってる奴つて本当になんなの？バカなの？まあ、大和さんが楽しいならそれで良いけど。

それに、この時間ももうすぐ終わりだ。時刻は夕方に差しかかろうとしている。別にカップルというわけではないけど、最後は観覧車かな？なんて思つてると、大和さんが地図を指差した。

「次は、これに行きましょう！」

お化け屋敷だった。

「いや、あんたこの前テレビの心霊番組で、一人でトイレに行けなくなるくらいビビつてたじゃないですか」

「お、お金払って滅多に来れない遊園地に来てるんだから！全部回らないと損じゃないですか！」

「損得計算かよ……まあ良いけど。腰が抜けたとかやめてよ」

「大丈夫です！大和型に抜かりはありません！」

これは死んでも、潜水艦に泣かされて気絶させられて漏らしたなんて言えないな。

俺と大和さんは二人でお化け屋敷へ。中はひんやりとした空気が流れていて、入り口の横に白い着物の女が立っていた。

大和さんの方を見ると、ガクブルで震えていた。

「……………大和、無理しないで出ます？」

「大和型に二言はありません！」

「あ、そう……………」

まあ、それなら止めないけど。ちなみに、俺も平静を装ってはいる

が、内心かなりビビっている。何故なら、何か出るかもしれない、という肝試しと違って、何か出る、と決まっているからだ。人間相手でも、暗闇でいつ来るか分からない状態で驚かされたら、そりゃビビる。つまり、逆に言えば脅かしに来るタイミミングさえわかれば怖くない。

……いや、無理くね？ニュータイプじゃねんだよ。

「行きますよ、提督」

「あの、分かったから手を繋ぐのやめない？大和の握力で握られると、手の骨が粉々になりそう」

お化け屋敷の中に入った。中はやはり暗くて、所々緑色の薄い灯りが順路を表していた。

慎重に中を進むと、早速目の前のガラスが割れてお化けが出て来た。俺はガラスのある場所はお化け地帯だと踏んでいたから余りビビらなかった。俺は、ね？

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!？」

隣の大和さんは別な。大声で悲鳴を上げた。キーン、と耳鳴りがする。お化け役の人も、逆に驚いて戸惑ってる。

「イヤア！イヤアアアア！」

イヤンクツクみたいな泣き声とともに、何処かに走り去ってしまった。

俺はどうしたら良いのか分からなかったが、お化け屋敷で迷子というのは、よく考えたら新手の拷問になりそうだったので、お化けに会釈してから大和さんの後を追った。

大丈夫、今の太和さんは冷静じゃない。しばらく歩いてれば、

「ぎゃあああああああああああ！」

ほら聞こえた。俺は声のする方に歩いた。

「うがああああ！」

「すいません今連れが迷子になってるんで後にしてもらえますか」

「え？あ、はい」

申し訳なかったが、こうしないと大和さんを探せない。

しばらく歩き回ってる途中、大和さんの声が聞こえなくなった。も

うあの人はゴールに着いたのか？

そう思ったが、ゴールはまだ遠いはずだ。あの人がアホだし、ゴールに着いたとは思えない。

「……………冷静になったか、あいつ」

俺が近くにいることを察したんだろう。で、多分俺のことを探し回って迷子になってる。

まあ、そういう奴の思考パターンは分かる。まず、元の道を引き返そうか迷う。だが、なんだかんだで知り合いが不安になって迎えに行く。順路の反対側を進むわけだが、冷静な状態ではないため、途中で道を間違える。で、お化けも灯りも何も出て来なくなつて、完全に一人になつて体育座りで座り込む。

なら、俺は順路の灯りのない道をしらみ潰しに通れば良い。そうすれば……………、

「ほらいた」

「！」

涙目の大和さんが、俺の方を見上げた。つーか、ここ非常口じゃん。「て、ていとく……………ていとく……………!!?」

「何やってんスカ……………。ほら、立って下さい」

俺は大和さんに手を差し出した。だが、手を取るところか抱きつかれた。

「ていとく!!?」

支え切れなくて、俺は後ろに倒れ込んで尻餅をついた。それでも、大和さんは俺の胸に顔を埋めて号泣していた。

うん、すごい気持ちわかるよ。俺も高校の校外学習で同じ道辿つたから。一人で遊園地の中を回って、迷子になって、結局出られなくて閉園時間になってようやく見つかつて、学校のバスには先に帰られて自腹で帰つた。まあ、その経験のおかげで、今俺は冷静でいられるわけだが。

でも、その、何。大和さん。おっぱいがすごい身体にあたって、アレなんだよね。

俺はなんとかすべく、大和さんの肩を掴んで、グイツと押しして顔を

見た。

「もう行きましょう、大和。このままだと、遊園地にも迷惑が掛かります」

「嫌です！もうこんなところ嫌です！動きたくないです！」

うおお……あの大和さんが子供みたくなつとる……。

「動かないところで、怖いのは変わりませんよ」

「で、でも……！」

「いいですか、お化け屋敷でもなんでも、パニックになるのが一番危険なんです。ゴネても何をしても、立ち止まっていたらゴールには近づかない。それなら、怖い気持ちを必死に押し殺して、一歩でも前に進むしかないんですよ」

高校の時に迷子になったときに、お化け屋敷の人に言われたことをそのまま言った。俺はお化け屋敷の人に何を言われてるんだ。

「だから、立ってください」

「……グスツ……もう離れないでくださいよ」

いや、離れたのお前。とは言わなかった。

「わかってますよ」

で、二人でゴールまで歩いた。

お化け屋敷の外に出て、俺と大和さんはベンチに座っていた。が、未だに大和さんは俺の腕にしがみついている。

「……大和、もう大丈夫でしょ？」

「……グスツ」

しゃくりあげながら首を横に振った。

「……何か飲み物買って来ようか？」

「……わたしも一緒に行きます」

どんだけビビっとんのや。

大和さんは俺にへばりついたまま、自販機に向かった。

「何飲む？」

「……お茶で」

お茶とり〇ルゴールドを買って、再びベンチに座った。大和さんはお茶を飲んで一息つくつくと、ようやく落ち着いたので、俺の手から離れ

た。

「…………もう大丈夫です」

「良かった」

「……………お見苦しい所をお見せしました」

「気にしないで下さい」

「……………」

大和さんは俺の顔をジッと見ると、少し顔を赤らめた。

あ、この展開なんとなく読めたぞ。

「この後どうします?」

い、いえ!でも!何かお礼させて下さい!みたいなやり取りは面倒だったので、話を進めた。

大和さんは「もうこりこり」とでも言わんばかりに言った。

「もうなんか疲れました……。今日はもう、次で最後にしましょう」

「把握。どうする?」

「あ、あそこの……観覧車に乗ってみたいです」

おお、やっぱりそう来たか……。

「りよ。行きましょうか」

俺は大和さんと二人で、観覧車に向かった。

十十十

観覧車に乗って、しばらく。段々と上がって来て、遠くの景色が見渡せるようになった。

俺はなんとなく、その景色をスマホに収まると、大和さんが覚悟を決めたように俺に言った。

「提督」

「んっ?」

「この前の返事、今ここでも良いですか?」

「んっ?」

何の話?

「提督……」

「待つて。何のは……」

「大和も、提督が好きです。お付き合い、していただけませんか？」

「……………今、なんて？」

「……………はっ？」

「二度も、言わせないでください……」

「ごめん待つて。話が見えない」

「ですから、この前大和の具合が悪かった時の返事です！」

「返事？俺なんか返事されるようなこと催促してたっけ？」

「提督、仰つたじゃないですか！や、大和のことが好きだつて……………！」

「……………」

「そういえば、言つた気がする。ツーか、今冷静に考えればアレ、告白だよな。」

「そして、それを勘違いして大和さんは今、告白してしまったわけだ。」

「……………完全に俺の所為じゃん」

「？」

「ああ。いやなんでもない。こつちの話」

「俺は額に手を当てた。うーん……………ヤバい、紛らわしい言い方した俺が悪いんだけど……………その、こう言うことはちゃんと伝えた方が良さいんだらうな……………」

「あ、あのツ……………大和」

「なんですか？」

「その……………その件なんですけど……………」

「俺は一から説明した。俺に構つてくれる人は大和さんしかあり得ないという話で、大和さんに愛の告白をしたわけではない、と。」

「すると、大和さんは顔を真っ赤にして、すっごい複雑な表情を浮かべた。あー、これ怒られるよなあ……………怒るだらうなあ……………」

「恥をかかせてしまった事の後悔と、怒られることへのワクワク感によつて、俺も複雑な表情を浮かべてると、大和さんから声が聞こえた。」

「……………んじ」

「はっ？」

「大和は今、告白をしました！提督の返事は!?？」  
「えっ?」

確かに……。大和さんは今、告白をしたっちゃあ、したのか。

「や、大和への気遣いは無用です！もしアレなら、振っていただいて結構です！返事をして下さい！」

「……………」

俺は、か。どうなんだろうな……。今日や今までのことを振り返ってみた。俺は大和さんのことをどう思ってるのだろうか。

大和さんは美人だし、スタイルも良いし、俺には勿体無いくらいの女性だ。まあ、俺はそもそも面食いではないから、容姿なんてどうでも良い。

性格も、かなり良い人だろう。だって俺に付き合ってくれてるんだもん。ただ、趣味が良いとは言えないかな。俺に告白して来たし。

俺は大和さんを見て、胸が痛くなったりしたか?いや、した事ないな。ドキツとする事は多々あったけど、そもそも人をあまり好きになつた事ないから、胸が痛くなるという感覚がわからない。

別の方向から、検討してみよう。もし、大和さんが他の男と付き合ったらなんてしたら、どう思うだろうか。

「……………」

余り良い気はしないけど、大和さんがその男が好きなら諦め……。余り良い気がしないなら、もうそれ俺この人のこと好きなんじゃない?」

「……………ふむ。大和さ、」

「は、はいっ」

「俺、大和が他の男と付き合ったら、余り良い気はしないと思うんだけど。これって俺、大和のこと好きなのかな?」

「……………それ、私に聞きますっ?」

「だよね」

……………大和さんがいないとダメ、他のどの女も代わりにならんない、というのも確かだ。

というか、だとしたら、俺は随分前から大和さんの事、好きだった

のかもしれないな。けど、今までの人生では、俺は人を好きになることがなかったから、その先入観が気付かせていなかったのかもしれない。

まあ、何にせよ結論は出た。俺は大和さんに言った。

「ごちうこそ。よろしくお願いします」

そう言うと、大和さんは目を見開いた。そして、真っ赤だった顔をさらに赤らめて、ホッと息をついた。

「……………この前の話が勘違いだっって言われた時は死んだと思いました……………」

「アレはほんとすいません……………」

「他の子に、ああいう事言っちゃダメですからね」

「ダメ、ですか?」

「当たり前です。言っておきますけど、私は結構嫉妬深いですからね」

大和さんは微笑みながらそう言った。これ、大鳳さんとのトラブル、絶対言えないな。

「それより提督」

「何?」

「私達、恋人なんですよね?」

「まあ、そうなるな」

「恋人になったら?何かすることがあるんじゃないですか?」

「……………え、何。恋人になるのってなんか儀式あるの?魔法陣とか書いた方がいい?」

「違いますっ」

大和さんは、観覧車の椅子に座ったまま、俺を見上げて、若干顎を上げて目を閉じた。

まるで、キスを待っているような顔だ。

「……………マジ?」

「ただでさえ、女の子から告白させたんですから。キスくらいは提督からして下さい」

「……………え、何そのルール?男って先制攻撃が当然なの?」

「いいから。……………キスを待つの、結構恥ずかしいんですから」

「いや、もう何度も裸見られてるくせに今更恥ずかしがる事は無い」

「蹴りますよ?」

「ごめんなさい」

大和さんが再び、キスを待つ顔になったので、俺は覚悟を決めた。

大和さんの口に、俺の口を近付けた。

第18. 5話 SはどこまでいってもS

「…………と、いうわけで、提督とお付き合いすることになりました…………」

私は頬を掻きながら、いつもの飲み席で2人に言った。

「そうなんですか？おめでとうございます」

「しかし、あの提督が…………」

鳳翔さんと武蔵が呟いた。

「はい。早速、帰り道は年甲斐もなく手を繋いで帰っちゃって……………っっていうか、『え？なんで手繋ぐの？もう冬でもないし別に良くね？』とか言われたから無理矢理繋がせた」

「ああ。それはナイス判断」

「あの提督には少し強引なくらいが丁度良さそうですからね。……………はい、ネギチヂミ」

鳳翔さんが新メニューを私と武蔵の間に置いた。それを武蔵が一枚摘んで食べた。

「おお、これ美味しいな鳳翔。なんだこれ」

「ネギチヂミです」

「やはり、遊園地の高いレストランなんかより、鳳翔の料理の方が落ち着くな…………」

「えっ？武蔵遊園地に来ていたの？」

直後、鳳翔さんが武蔵の頭を掴んで、ネギチヂミに Dank した。

「いえ。鈴谷さんと熊野さんがデ○ズニールランドに行った時のポップコーンをいただいたんですよ」

「ポップコーンとネギチヂミは比べようがないわよ、武蔵」

「あ、ああ…………危うく私がネギチヂミにされる所だった…………」

おでこから血を流しながら、武蔵は起き上がった。

「武蔵さん、そのネギチヂミ全部食べなさいね」

「えっ？いやこれ血が…………」

「食べ物を粗末にするのは許しませんから」

「え？私が粗末にしたのこれ」

「良いから食べなさい」

「はい」

武蔵が血みどろネギチヂミを食べる中、鳳翔さんが私に聞いて来た。  
た。

「それで、デートはどのような感じだったのですか？」

「ほとんど私が連れ回す形になりましたね。提督は物事を否定する事に関して右に出る者がいない程ですから。有無を言わさずに連行しましたね」

「まあ、あの提督の場合はその方が良いかもしれませんが、今後はちやんとお二人の意見を聞いてデートして下さいね」

「分かってますよ……」

「提督、ずっと死屍累々としてましたよ」

「へっ？見てたんですか？」

「してたと思いますよ？」

「へ？いやなんで言い直」

「言い間違いです」

ニッコリ微笑んだ鳳翔さんが怖かった。それ以上、追求すれば殺す、とでも言わんばかりの笑顔だった。

「うう……鉄臭かった……」

武蔵がようやく食べ終えたのか、箸を置いた。

「で、他に何乗ったんですか？」

「えつと、ジェットコースターとバイキングとフリーフォール……あと、お化け屋敷？」

「へえ、大和。お前怖いの苦手だっただろ」

「で、でもせっかく滅多に行けない遊園地に行ったんだから、全部のアトラクション楽しまないと……」

「同じ事言ってるなよ」

「はっ？初めて言ったわよ？」

「武蔵さん、その血みどろの皿、洗いに行きなさい」

「えっ？わ、私が？一応客なのに？」

「あなたが血みどろネギチヂミになりますか？」

「……………行って来ます」

武蔵はお皿を持って店の奥に消えていった。

もしかして、この二人……………、

「あの、鳳翔さ」

「それで、お化け屋敷で何かあったんですか？」

質問しようとしたら、質問で遮られたので、私は仕方なく答えた。

「はい。……………実は、お恥ずかしながら、あそこのお化け屋敷すごく怖くて……………。私、序盤から一人で走って逃げちゃったんですよ。で、提督を置いて来ちゃって……………」

「そんなに怖かったですか？あのお化け屋敷。お化けが出てくるタイミングとか、全部想定できる場所ばかりで割と普通でしたかと」

「やっぱり遊園地にいましたよね、鳳翔さん!?!？」

「人違いです」

「いや似てる人を見たとかじゃないですから！」

こ、この人は……………！多分、武蔵と二人で私を尾行してたんだわ！

「なんでつけてたんですか!?!？」

「つけてません」

「いや、さつきから口滑らせ過ぎですから！」

「つけていません」

「流石にそれは無理があります」

「つけて、いません」

「……………」

どう言ってもしらばっくれる気なのね……………。

「それで、どうやって見つかったんですか？」

よくもまあ、すでに知ってる話を聞けるものだ。まあ、一応言うけど。

「提督が見つけて下さいました。その時に提督が色々とお話ししてくださって……………」

「ああ、あの正直よく分からない、絶対誰かからの受け売りの台詞ですか?。」

「やっぱり絶対いましたよねあそこに!!?」  
「いません」

この人、マジでどういうつもり!??なんでそこまで認めないつもりなの!??

「嘘です! いました! 絶対!」

「落ち着きなさい、大和さん」

「これが落ち着いていられますか!??」

「私は間宮さんや大鯨さん、翔鶴さん、妙高さん、高雄さん、雷さんといった方達と普段から、鎮守府の家事を任されています。今日は私の当番でしたので、鎮守府の外に出ている暇はありません」

……確かに一週間、それぞれの曜日には七人は割り振られている。今日が鳳翔さんの当番であることも知ってる。

鳳翔さんが自分の仕事をサボるとは思えないし……。

「……………すみませんでした」

「分かればいいんです」

一応、謝った直後、間宮さんが居酒屋に入ってきて来て、鳳翔さんに声を掛けた。

「鳳翔さん、今日の分の家事終わりましたよ」

「ご苦労様です、申し訳ありません。急に代わっていただいて」

「いえいえ。明日、私の分お願いしますね?」

「やっぱり来てたでしょ鳳翔さん!??」

ガッツリ代わってもらってるじゃない!!?

「行ってません」

「なんでそんなにしらを切るんですか!??別に怒りませんから!」

「それで、お化け屋敷の後どこに行っただんですか?」

「……………コーヒーカップ」

「へ? ベンチで休憩した後に観覧車に行ってませんでした?」

「はいイイイ! 現行犯逮捕ですよこれ! なんでそんな細かく私達のこと知ってるんですか!??」

「間宮さん、何か飲みますか?」

「いえ、明日の仕込みしちやわないと」

「聞いてるんですか、鳳翔さん!?!?」

すると、鳳翔さんはジロリと私を見た。

「大和さん」

「な、なんですか?」

「私は別にあなたをつけてなんていません」

「嘘です! 完全につけてました!」

「年甲斐もなく、子供みたいにはしゃぐあなたの姿も」

「へっ? こ、子供みたいでした?」

「お化け屋敷で開幕で号泣しながら走り出すあなたの姿も」

「な、泣いてません! 目から汗が流れただけで……!」

「非常口の前で座り込んで『ていとく……はやく来てよ……』呟くあなたの姿も」

「な、なんでそこまで知ってるんですか!?!?」

「提督に来てもらって、安心して腰を抜かしかけたあなたなんて見てません」

「す、すいませんでした! 確かに来てませんでしたからもう許してください!」

とりあえず、マジで謝った。

交際始めました。

## 第19話 夢

夜中。俺は、自室にいた。一人でぼんやりと布団の上で座っていると、コンコンとノックの音がした。

「あーい」

返事をする、大和さんが入って来た。寝間着の着物を着て。酒に酔ってるのか、少し顔が赤い。

「どうしました?」

「いえ、その……本日、お付き合いすること……になりましたよね?」

「え? あ、はい」

大和さんは俺の横に座った。え、ちよつ……何? 近くない?

「……恋人同士になったら、する事……ありますよね?」

「あ? あー……デートとか?」

「その後です」

「そのあと? 家まで送るとか? いやでも同じ建物に住んでるし」

「例えば、デートをした後に少し疲れちゃったとしましょう」

「早く帰って寝たいよね、さつさと」

「そしたら、そこにホテルがあるじゃないですか」

「え? この辺、ホテルなんてあったっけ?」

「そこで、二人して入って、好きな部屋を選びます」

「ホテルの部屋なんてどこも一緒でしょ」

「部屋を選んで入室して……そうですね、一緒にお風呂入りましょう」

「いやいや、そんな事したら休めないでしょ。超疲れそう。主に精神的に」

「そのまま、私がああなたの背中をお流しします」

「いやいやいや。自分の体は自分で洗うから。あまり人にベタベタ触られるのは」

「そのために、私の胸にボディーパープを垂らします」

「好きじゃな……はっ？」

「それでは、行きましようか」

「え？」

大和さんは俺の腕を引っ張って立ち上がった。立ち上がった拍子に、着物が全て脱げ落ちた。

「ちよっ、大和さあん!?」

「さ、行きましようか」

大和さんは俺の腕を引っ張った。

「待て待て待て待て待って！タンマタンマタンマ！お前飲んでるだろ!?ちよっ、」

「今夜は、寝かせませんよ♪」

大和さんがそう言って、俺を風呂場に連れ込もうとした直後、

「……………とく、提督！」

目を覚ました。どうやら、夢だったようだ。

誰だか分からないが、俺を起こしてくれたようだ。

「おはようございます、提督」

大和さんだった。

「ひいつ!?」

俺は思わず後退りした。

「ど、どうか致しましたか？提督」

「い、いやっ……………」

だ、大丈夫だよね……………襲って来たりしないよね？

「お、おはようございます……………大和、さん……………」

「提督？具合が悪いんですか？」

大丈夫、大和さんはあんなクソビッチじゃないだろ。そもそも、今は酔ってないし着物も着てない。ダイジョウブ。

「いえ、大丈夫です……………」

「もう朝ですよ。いつまで寝てるんですか？」

「すみません……………。昨日の夜、中々眠れなくて」

「？　なんで、ですか？」

「大和さんとお付き合いたと思うと眠れなくて」

「て、提督……！そんな、やめて下さい」

照れたように、頬をぼりぼりと掻く大和さん。

「じゃ、起きますか」

立ち上がって、伸びをするとシャワーを浴びに行った。

軽くシャワーを浴びると、着替えて自室に戻った。すると、ちやぶ台が出てて、その上に料理が用意されていた。

「おっ？」

「あつ、あのっ……僭越ながら、朝食をご用意させていただきました」  
……マジでか。俺が、女性の手料理を……？

「良いの？」

「はい」

過去に散々、リア充爆死しろとか思ってたけど、いざ自分がリア充になると、すごくあれな。たまらん。

食卓に並んでるのは、なめこ味噌汁焼き魚白米サラダ納豆と、まあオーソドックスなメニューだった。

ちやぶ台の前に座って、「いただきます」と手を合わせた。大和さんはそわそわしながら俺を見ていた。

まず、俺は納豆を混ぜると醤油を入れて白米にぶちまけた。

「おおっ、美味っ」

や、マジ納豆食えない奴ってなんなんだろうな。見た目ネバネバしてて寄生虫の卵みたいとか思うかもしれないけど、外見ならスクランブルエッグのがヤバくね。あれは最早、スライムの死骸なまである。

続いて、サラダをかつ込んだ。俺は小学生の頃からベジタリアンだったの、野菜は好きな方だ。

「これ、トマト甘いですね」

一人で食べてるわけじゃないのを思い出し、大和さんに声をかけると、ツーンとした表情でそっぽを向いていた。

「？ 大和、さん？」

「なんでサバから食べてくれないんですか？」

「え？ いや、俺は白米から食べる人で」

「ご飯も納豆もサラダも全部、素材そのものの味じゃないですか！焼き魚とかお味噌汁とかの感想を聞かせて下さいよ！」

ふむ、確かに。俺は味噌汁を一口飲んだ。

「……………」

大和さんがすごい見て来る。なんか、ここで美味いつて言ったら面白くないよね。

「俺、味噌汁は薄味のが好きなんですよね。あと、ネギは長ネギ派。あとわかめも必須だと思っんですよ。あまりキャベツが入ってるのは……………」

そこまで言っ言葉を切って、大和さんを見た。目を輝かせてメモしていた。

「……………あの、大和さん？」

「なんですか？続きは？」

「なんでメモしてるの？」

「今、褒められるより、提督の好みを知る方が大事ですから……………」

俺は両手で顔を覆って目を逸らした。煽ろうとしたらカウンターを喰ってしまった……………。

すると、大和さんが俺の横に寄り添って頭を撫でて来た。

「もしかして、今照れました？」

「ーっ！」

「提督も可愛いところあるんですねー。顔真っ赤にしちゃってー」

う、うぜえ……………。っーか、照れてないし。

俺は何となく悔しかったので、胸に手刀を打ち込んだ。

「黙れパツ……………」

パツド！と、言おうとしたら、もにゅつと変な感触がした。大和さんの胸が柔らかいのだ。装甲を付けてるはずなのに。

ワナワナ、と言った感じで顔を真っ赤にして、怒りのあまり小刻みに震えてる大和さんに恐る恐る聞いた。

「あつ……………あの、胸部装甲兼オツパイマシマシパツドは？」

「……………取りました。提督が、いつもいつもからかって来るので」

「……………通りでいつもより小さいと思っ」  
そこで、ガンツとゲンコツを喰らった。

「ごめんなさい」

「はい」

大和さん怖いなあ。まあ、怖いから怒らせて構ってもらうのが楽しいんだけど。

「それで、提督」

大和さんがご飯を食べながら言った。

「なんですか？」

「折り入って、ご相談があるのですが」

「何？」

「わ、私達、その……………お付き合いしてるじゃないですか」

「うん」

「だから……………せめて、勤務外の時は、私のことを呼び捨てで、タメ口でお話ししてくれませんか？」

「えっ」

「なんか……………他人行儀で、嫌なんです」

そういうもんか？まあ、俺は別に構わないけど。

「分かったよ、大和」

「では、改めてよろしくお願いしますね」

大和さんは、笑顔で微笑んだ。

+++++

伸びをしながら、俺はポストの中を覗いた。今日の書類を見た。

「うげえ……………面倒臭えなあ……………」

俺はため息をついて、書類をパラパラと見た。書類を脇に抱える  
と、続いて一般郵送の宅配物を見た。

その中に、白い封筒が入っていた。

「？」

差出人『謎のお艦』。なんだこれ、どこの鳳翔さんだ？

中を開けてみると、居酒屋鳳翔の貸切券が入っていた。あの人、隠し事下手過ぎでしょ……………。

しかし、居酒屋か……………そういえば、大和さんと飲んだ事なんて無かったなあ。

「今度、誘ってみるか」

執務室に戻った。

## 第20話 バカは学習をしない。

執務室に戻り、俺は貸切券をポケットにしまって、どうするか悩んでいた。貸切なんてしてもたたくさん頼むわけじゃないし、まず行く相手いないしなあ……。

大和さんにあげようか。そう決めて事務仕事を終わらせると、ちょうど良いタイミングで大和さんが来た。

「あ、大和さん」

「提督？　どうかありませんでしたか？」

「これ、鳳翔さんのお店の貸切券」

「か、貸切!?!？」

「うん、なんかポストに入ってた奴。それでさ、」

「わかりました！　今夜ですね？」

「あげるから武蔵さんと一緒に行ってきたよ」

「ご一緒させていただき……はっ？」

「や、だから行って来て良いですよ。武蔵さんと」

「……………」

大和さんはゴミを見る目で俺を見ていた。

「……………え、何」

「なんで、私と提督が二人で行くってならないんですか」

「え、いやだって俺、大和さんほど食べないし、まず間違はなく途中から大和さん単独お食事会になりますよ。無料で貸切にしてくれるってことは、向こうもそれなりに赤字になる覚悟はあるって事だろうに、なんか勿体無いですよ」

「……………なんでその無駄な気遣いが少しでもこっちに向かないんですか」

「え?？」

「私は二人で提督と飲みたいんです！」

「え、なんで?？」

「なんでって……………!　じゃあ提督は私と飲みたくないんですか?？」

「うーん……そもそも、俺酒飲んだ事ないんですよ。だから少し心配で」

「えっ?の、飲んだ事ない……?だって、社会人ならそれなりに飲みの席とか」

「新人全員参加らしいのに俺だけ誰からも誘われなかったんですね」

「……………」

「他にも年末の飲みも誘われてないし、鎮守府に着任してからも誰からも飲みとか誘われてないですね、年末だろうとクリスマスだろうと。艦娘達がどんちゃん騒ぎしてる間、部屋で紅白見ながらゲームしてましたから」

「……………」

「だから、機会がなかったというか……………」

「すみませんでした、提督……………」

「や、何が!?!」

「誘ってあげられなくて、すみませんでした……………」

「いや、別に良いですって!宴会とか言うバカ騒ぎよりゲームの方が全然楽しいんで!」

「提督」

「は、はい?」

「私という時はゲーム禁止です」

「えっ」

「提督はこのままでは休日は家でゴロゴロしながらカップラーメンとポテチとコーラを片手にパソコンとゲームをダラダラやって一日潰す人になってしまいます」

「そんな、うまるーんとしねえよ俺」

「とにかくダメです!そして、今日は夜二人で飲みます!良いですね!?!」

「ええ……………もう分かりましたよ……………。早く潰れても怒らないでくださいよ」

「怒りませんよ。では、仕事始めましょうか!」

「もう終わりました」

「……………えっ?」

ポカンとする大和さんを置いて、俺はウンコしに行った。

+++++

トイレから出て、何となく書庫に向かった。まあ、実際はただの図書室なんだけどね。装備や過去の艦娘の事が書かれている本しかないけど、最近は駆逐艦の要望に大和さんが答えて、漫画とか絵本とか小説とかラノベとかエロ同人とか置いてある。

で、俺もたまに漫画読むのにここに来ている。パソコンとDVDプレイヤーが設置されてる個室も10個ほど用意されてるので、俺的にはかなり良い場所だ。そう思って、テキトーにラノベを手にとって、個室の一箇所を開けた直後、

「ふむふむ、つまりここをつ……………んっ……………こう……………」

大鳳さんが上半身裸で本を読みながら自分の胸を揉んでいた。本には、バストアップマツサージと書かれている。

「えっ?」

「あっ」

大鳳さんがこつちを見たので、俺はドアを閉めた。うん、見なかったことにしよう。

さて、別の部屋で……………と、思ったら、個室の扉からクロスボウの弾が飛んで来て、慌てて回避した。

「あつぶな!!?」

扉がキイツ……………と静かに開いた。中から出て来たのは、上半身裸のままクロスボウを握り締めた大鳳さんが出て来た。

「た、たいほう、さん……………」

「何度も何度も何度も何ツツツ度もツ……………!!?」

あ、ヤバイ。なんかよく聞かないけど、多分呪文唱えてるし。

大鳳さんは俺にクロスボウを向けた。

「良い加減にして下さいってんですよ!!? ツツトにもうツ!!?」

飛んで来る弾を俺は回避した。だが、大鳳さんは容赦なく撃つてきた。

「ま、待て待て待て落ちて着け！死ぬって！死ぬ！」

「毎回毎回毎回!!? 私と顔を合わせる度にセクハラして！何なんですか?!?一々、セクハラしないと次の行動に移らない人なんですか?!?」

「わざとじゃないんですって!!? すいませんでした!!?」

「よりにもよって……!!? 殺す!!?」

「今殺すって言った?!? てかお前服着ろよ服！」

メツチャ、弾を飛ばして来る大鳳さん。俺はこのままでは躲し切れなくなると思い、本で弾を弾き飛ばした。

「っ！」

「ナメんなよ！提督になる前は、海軍の中で肉弾戦と友達の少なさではナンバーワンだったんだ!!?」

大鳳さんの弾を回避し、回避できない分は本で弾きながら移動した。窓からガラスを突き破って、目の前に生えてる木を伝って一階に降りると、身を隠すために移動した。

図書室の窓からの狙撃を前転しながら回避し、目の前の街灯を掴むと、グルツと一回転しながら本を大鳳さんに投げ付けた。狙いは、クロスボウを握る手である。

だが、まさかそのタイミングで大鳳さんが飛び降りると思わなかったんだなあ。狙いはズレて、大鳳さんの顔面にクリーンヒットした。

飛び降りる体勢を崩した大鳳さんは、無防備に木の中に突っ込み、ガサツガサガサツと音を立てて落下した。落下した時、スカートがなくなっていた。多分、木の枝に引っかかったんだろう。

気まずい笑みを浮かべると、大鳳さんがすごい形相で俺を睨んでいた。

「……………マジブツツツ殺す」

俺は逃げ出し、後ろからパンイチ大鳳さんは引き続きボウガンを撃ちながら追いかけて来た。

大和さんの部屋。俺と大鳳さんはそこで正座させられていた。

「こう言った事は！金輪際！しないで下さいね！！？」

「……………はい」

俺と大鳳さんは声を揃えて返事した。ちなみに、大鳳さんはちゃんと服を着ている。

「では、大鳳さんは出て良いですよ」

「はい」

「あ、じゃあ俺も」

「お前は待て」

「え？お前今、お前つつった？」

大鳳さんは出て行つた。残された俺は大和さんと二人きりになった。直後、大和さんの表情は豹変した。

「提督……………どういう事ですか？」

「いえ、ですから先程説明した通り……………」

「バカ！！？わ、私というものがあらながらつ、他の子の裸を見るなんて……………！！？」

「い、いや待つた！俺は前に大和さんの裸も……………ブツ！」

弁解しようとする、拳が飛んで来た。

「反省してないようでは何よりです。お陰で、心置きなくお仕置きできる」

「ま、待つて待つて！反省してるから怒らないで！」

俺、暴力振るおうと追いかけられるのは好きだけど、実際に暴力を振るわれるのは好きじゃないんだよ。

「そ、そもそもワザとじゃないんだし、別に大和さんには隠さずに言い訳すらしないで説明したじゃないですか」

「わ、わかつてる！分かつてますけど……………！！？」

そこで、大和さんは口を閉じて、目を伏せながら呟いた。

「……………分かつてますけど、やっぱり……………頭で理解してても、ムカムカするじゃないですか。好きな人が、別の女性と何かあったりするの

……」

「……………」

……ふむ、確かにそういうものか。

「……………すみません」

「良いです、反省してるのはわかってますから。それに、浮気というわけでもありませんし」

「今日はもう仕事ありませんし、大和さんとできる限り一緒にいますよ」

「出来る限り？」

「トイレとか風呂とか」

「ああ、そういう……。いいんですか？私、結構ワガママですよ？」

「どうぞ」

「じゃ、まずは書庫に行きましょう」

「はあ？なんでまた……」

「いいから♪」

俺は大和さんに腕を引つ張られて書庫に歩いた。ていうか、本当に戦艦って力強いんだなあ。あの細い腕からこんな力が出るなんてすごいわ。

俺なんてどんなに鍛えてもここまでのは……いや、男一人引き摺るくらいは余裕だけど、あの馬鹿でかい艦装をぶっ放して身体が反動で粉々にならない自信がない。

そんなことをぼんやり考えてると、書庫に到着したようだ。大和さんは書庫のDVDコーナーの中から腹立つ青春恋愛映画のDVDを選ぶと、個室の中に入った。

「あの、何を……………？」

「良いから座ってて下さい」

「ごこ、席一つしかないんですけど……」

「良いから良いから♪」

「いや、もしあれなら俺が立ってますよ」

「電車の中じゃありません！良いから立ってて下さい！」

「了解」

「あ、間違った。座ってて下さい！」

俺は仕方なく席に座った。大和さんはパソコンをいじってDVDを掛けると、俺の膝の上に座った。

「へっ?」

「さ、見ましょう!」

「は?いや、なんで膝の上?つか重」

ゴツ、と脛を踵で蹴られた。

「何か言いました?」

「…………蹴ってから事実確認すんなよ」

「んふふ♪楽しみですね、提督」

あんまり恋愛モノの映画って好きじゃないんですけどね…………。ま、いつか。なんか大和さん楽しそうだし。

+++++

〜10分後〜

「いいなあ…………。遊園地も良いけど、動物園も良いですね提督!

…………提督?」

「zzz……………」

「……………」(いらり)」

## 第21話 喧嘩は「ごめんなさい」が重要

「あの、大和さん！すいませんでした！」

「知らない」

「寝るつもりはなかったんです！けどあの手のジャンルは好みじゃなくてー」

「知らない」

「……………ていうか、目の前でイチャつかれて若干イラついたというか……でも、本当にすいませんでし」

「知らない」

大和さんはプリプリと怒って先を歩いてしまっている。あーあ、どうしてこんなことになっちゃったのか…………。

いや、今回は俺が悪いか。寝たんだし。でも、それだとこの後が困るんだよなあ。仕事は終わったものの、これから飲む約束をしてみたってし、その約束が破棄されるのだけでもハッキリさせておきたい。

だって、行く行かないですごい悩むじゃん？破棄になって行ったら、何も食わずに店を出るなんて出来ないし、破棄されてなくて行ったら、怒ったままの大和さんと飲むことになる。だからといって行かなくて、大和さんが来なかったら良いものの、来ていたらそれはそれで申し訳ない。

四分の一可能性に賭ける程、俺はギャンブラーじゃない。

けど、流石に怒られた後に「じゃあ、後で飲みに行くかどうかだけハッキリさせてくれませんか？」なんて聞けない。ここはほとぼりが冷めるまで、時間を置くのが良いだろう。

「分かりましたよ…………。少し反省して来ます」

「えっ？」

俺はその場でUターンして、書庫の個室に籠った。しばらくは様子見だ。何にせよ、飲みに行くのかはハッキリさせないといけないが、謝っても話を聞いてもらえないなら、今大和さんに声を掛け続けるの

は逆効果だろう。落ち着くまで待機していた方がいい。

そう決めて個室に戻ろうとした。作戦を考えるには、一人になれる所が良いと思ったからだ。その俺の肩を大和さんが掴んだ。

振り返ると、頬を膨らませて、涙目でプルプルと震えてる大和さんが立っていた。え、なに？なんで泣いてんの？

「どうして追い掛けてくれないんですか!!?」

ヤダこの子メンドクさい。

「……………は?」

「なんでもつと食い下がろうとしないんですか!」

「……………言ってる意味が分からないんだけど」

「普通、もう少し謝ったり交渉したりするでしょう!??なんか、こう……………嫌われないように!なんですんなり引き退るんですか!??」

「だって、大和さん怒ってたから……………。これは交渉の余地ないなど予知したので……………」

「ぷっ」

「一人になって作戦練ろうと……………今笑った?」

「笑ってません」

「あんたほんとはあんま怒ってないだろ」

「怒ってますよ!大体、怒られてる時に下らないこと言わないでくれる!??」

「ごめん魔が差した」

「あ、ああ言えばこう言う……………!!?」

「え?いや、何か言わないと会話って成立しないでしょ」「それ!そういう所!」

ええ……………結局俺はどうすれば良いのか。

「ああもう……………どうして私はこんな面倒臭い人を好きになったのよ……………」

それはこっちの台詞だ、なんて言ったらまた怒られるからやめとこ。

「分かりましたよ……………。交渉すれば良いんですね」

「いや、そんな義務的にやられても……………」

こっちのカードはいくつある？金、近代化改修、装備……いや、「物で片付けよう」としないでください！でも貰います！」ってなるよな。なら、精神的なものが良いか。

だが、謝罪が通用しない以上、精神的なものなんて通用するのか？それならいつそ、物的かつ精神的な物を渡せば良い。

「……………よしっ」

「？」

「可能な限り、今日1日なんでも言うこと聞きますよ」

「……………へっ？」

ポカンと惚けた表情になる大和さん。最大限のカードを初手で切らせて貰った。これで許して貰えないなら、どうしようもないだろうな。

「ど、どういう…………？」

「そのまんまの意味です。ただし、自殺しろ骨折しろみたいな俺が無事では済まない事、デスノートをくれる不可能なプレゼント、今から火星に飛べみたいない物理的に不可能な事、提督を辞めろみたいな俺の人生終幕ルートは無しですからね」

「そ、そんなこと頼みませんよ…………」

「ま、そういう事です。…………あの、ホントさつき寝ちゃってすみませんでした」

俺は頭を下げると、個室に戻ろうとした。その俺の肩を大和さんは掴んだ。

「提督。早速、良いですか？」

「はい」

「とりあえず、二人でソファアに座りましょう」

との事で、執務室に向かった。

+++++

三時間前。ソファアに座ると、大和さんは俺の横に座って、肩の上に頭を置いた。

それからずーつとそのままである。大和さんはそのまま寝てしま  
い、「絶対動かないで下さい」と命じられた俺は、ずつとそのままであ  
る。俺はこのまま、どうすれば良いんだろうか。寝ようにも、大和さ  
んの顔が近くて、やけに緊張して眠れない。

「……………どうしたものか」

どうしようもないんだけどね。まあ、多分この調子だと、このまま  
飲みに行くことになるし、それまでの時間潰しにはなるけども。時間  
潰しなのに暇ってどういう事だろう。

ていうか、大和さんはこれで良いのかな。何でも命令できるのに、  
肩枕で寝るだけって……。こっちとしては別に良いけど。

そんな事を思っていると、コンコンとノックの音が聞こえた。

「失礼する」

返事をする前に入って来ちやう辺り、さすが武蔵さんだなあ。

「むっ、随分と仲がいいじゃないか」

「まあ、そうですね」

「今日は二人で飲むのだろう？そいつ、酔うと面倒くさいから気を付  
けろよ」

「それより、何かご用ですか？」

「いや、この前借りた亜人を返しに來ただけだ」

「あーじゃあそれ、その辺置いといて下さい」

「うむ」

武蔵さんは亜人全10巻を机の上に置くと、スマホを取り出し、俺  
たちに向けて無許可で写真を撮った。

「……………はあ？」

「では、失礼する」

「おい待て色黒痴女メガネ」

「お前今なんつった？」

「何勝手に写真撮ってんだよ」

「大和をこれで脅して今度奢らせようと」

「許可する」

「するのか」

すると、大和さんはズルツと体勢を崩し、俺の膝の上に顔から落ちた。

「……………」

「……………」

カシャ。

「お前今、また写真撮った？」

「大和をこれで（ry」

「よし、許可する」

「ブライトさん？」

「二度も殴つてないから」

「では、私は失礼する」

「そういえばこの前、小林さんちのメイドラゴンって漫画を買っ」

「借りよう」

あいつ、どんどんオタク化していったんな。

「俺の部屋に置いてあるから」

「うむ」

武蔵さんは部屋から出て行った。そのタイミングで、大和さんは起き上がった。「んー……………」と息を漏らしながら、ボーツとした表情で目をコシコシと擦る。おい、目は良いから口、口。ヨダレがすごく糸引いてる。

「……………ていとく？」

「おい、ヨダレヨダレ。スパイダーマン並みに糸引いてるから」

「よだれ……………？」

「早く拭……………」

直後、大和さんは俺に思いっきり口を付けた。

「ッ!?？」

え?な、何?なにやってんの?この人マジで。

「んっ……………!!??」

「んっ!?？」

何かが口の中に侵入して来る感覚。舌だ、舌が入って来た。唾液でヌメヌメした状態の舌が俺の口の中を掻き回した。おい、ヨダレって

そういう意味じゃねえよ。

そこで、ようやく大和さんは自分が寝ボケてた事に気付いたのか、目を見開いて真っ赤な顔で俺を突き飛ばした。

「ツツツ!??!」

「ゴフツ!!?!」

突き飛ばされた俺は、ひっくり返ってソファーから落ちた。

「な、何するんですか!??!」

「こっちの台詞だハゲ!!?!」

「ね、寝てる所を襲うなんて!」

「寝てる奴に襲われたんだよ!!?!」

「……………え? 本当に?」

「本当に!!?!」

「……………」

「……………」

「……………も、申し訳ありませんでした…………」

「……………いや別に謝られる事じゃないから」

「本当にすみませんでした…………」

「いいって。……………嫌では、なかったし」

「へ?今なんて…………」

「いいからヨダレを拭け」

俺は机の上のティッシュ箱を大和さんに放った。大和さんはティッシュで口元を拭うと、時計を見た。

「……………飲みに行きましようか」

「んっ」

執務室を出た。

## 第21・5話 飲めなかった。

貸し切り券を持って、私と提督は居酒屋鳳翔に向かった。お店の中に入ると、中はいつもと机の数が違った。四人がけの机が一つ、真ん中に置かれていて、他の机は見当たらない。隅っこには布団が畳んで置かれていて、なんか少し広いLDKみたいだった。

……………ていうか、布団があるって事は、一泊しろって言われてる？あと、布団が一枚しかないって事は……………。

わ、私と提督でナニをしろと!!?

真っ赤になる顔を必死で抑えてると、提督は「腹減ったー」と呑気な声で席に座った。少しは緊張しなさいよ!

「大和さん、座らないんですか?」

「大和さん?」

「……………大和、座らないの?」

「今行きます」

私は提督のお向かいに座った。

「何食べる?」

「提督の好きなもので」

「……………いや、俺お店で注文できないんです……………」

そういうえば、コミュ障だったわねこの人……………。

「分かりましたよ……………。すみませーん、唐揚げとお刺身の盛り合わせと軟骨揚げ野菜炒めネギチヂミビール二本たこ焼き!」

「はあーい」

鳳翔さんはいるんだ……………。と、思ったら30秒くらいで料理が運ばれて来た。

「早っ!!?」

提督がリアクションする間も無く、料理とビールは机の上に並べられた。

鳳翔さんは最後にポケットから鍵を取り出して机の上に置いた。

「ごめんなさい、提督。私、これから用があるので失礼しますね。お店

の鍵、お願いします」

「え、あ、はっ、はい……」

「では、失礼しますね」

鳳翔さんは裏口に消えていった。その後ろ姿を見ながら、提督が「経営者も大変だなあ」とか呟いてたけど、別に経営者だからというわけじゃないと思う。最後に、私にウインクして来たし。

「……………じゃ、飲もうか。大和」

何も知らない提督は呑気にビールのジョッキを手に持った。私もため息をつきながら、ジョッキを持った。

「乾杯」

ジョッキを軽くぶつけて、グイツとビールを飲んだ。私はジョッキを置くと、お箸を持って唐揚げに手をつけた。あーん、と自分の口に持っついていこうとすると、提督がその唐揚げをパクツと食べた。

「ふえっ!?」

「んーっ……………おいひい」

なっ……………何その顔……………!??可愛い……………。ていうか、顔赤くない?なんでそんな赤いんですか。

「おい、大和お」

「な、なんですか?」

「お前、なんでそんな背えデツカいわけ…………?」

「はっ…………?」

「お前と二人きりで並んでると!俺の方が小さいから、弟みたいに思われんの!」

「え、お、弟?誰かに言われたことあるんですか…………?」

「ないよ!言ってくれる友達なんていないし!」

「ご、ごめんなさい…………」

よ、酔ってる……………。ていうか、ビール一口で?嘘でしょ?

「え、じゃあ何を気にして…………」

「だって弟じゃん!どう見ても!小鳥遊家みたいになってんじゃん!!」

「た、たかなし…………?」

「大和さん!!?」

「は、はい……」

「………慰めろよ」

「よ、よしよし……」

「子供扱いするな!!?」

嫌だこの人面倒臭い。提督が不機嫌そうに料理を摘んでいたの、私はお望み通り慰めた。

「で、でも、提督には私がいるじゃないですか」

「………」

「だ、だから落ち込まないで下さいよ……」

「大和」

「な、なんでしょう」

「隣に来て」

「は、はあ」

言われるがまま、私は椅子を持って隣に座った。直後、私の胸に顔を埋めて来る提督。

「大和おく……」

「きやつ!??にやつ……なつ、何をっ……!??」

「俺、もうダメかもしれない……」

「な、なんですか今度は急に……」

提督を抱き抱えながら頭を撫でた。

「いや、特にダメである要因はないけど」

クツ、この人は……!!?」

「よくよく考えたらさ、俺ってダメダメである要因なんてないんだよなあ」

今度は自慢話ですか。提督は料理をまた摘みながらブツブツと呟いた。

「事務作業実技成績優秀、仕事も速くて顔だけならジャニーズに若干劣るくらいのイケメン」

この人、自分をそんな風に思ってたんだ……。

「それで大和さんみたいな彼女がいるとか……え、何この完璧超人」

「自分で言わないでください」

ていうか、性格が残念だし。まあ、そんな人を好きになった私の言える台詞じゃないけど。

「でもなあ……ほら、俺って性格がアレじゃん？」

「自覚はあったんですか……」

「いくら完璧でも、中身がダメじゃ、生きてる価値なんてないよなあ……」

「そこまで言わないでも……」。

「周りに頼れとか言われても仕方ないじゃん！大体のことは一人で出来ちゃうんだからさ！」

あれ？自慢？

「結果出してんのに周りから避けられるってどういう事だよ！……まあ、俺も周り避けてたけど」

「ま、まあ……落ち着いて下さい。それでも、私がいるじゃないですか」

「けっ、雷かお前は」

「……ダメよ、大和。イラつとしては。相手は大きな子供、ある意味弟だと思えば然程腹も立たない。」

「大和」

「は、はい」

「なんでもなーい」

あ、今のは少し可愛い。ムカつくけど。

私も料理を摘みながら、ビールをグイッと煽った。提督がボンヤリとした表情で私を見ていた。

「な、なんですか？」

「……大和ってさ、可愛くて美人だよな」

「ふあっ!?」

「外見は全然可愛くないし、むしろ美人なのに、中身はクツソ可愛くて美人じゃないよね」

「な、なんですか急に!?」

「いや、ポンコツな所もあって……こう、ギャップがすごいなって」

「わ、私はポンコツなんかじゃありません！」

「しかも制服エロいし」

「エロツ……!?？」

「仕事してる時、たまにノースリーブの脇の下の辺りから横オツパイ見えてたんですよね。エロいなあ、と思って」

なっ……この男は……！恥ずかしさのあまり、私の身体はプルプルと小刻みに震えていた。ていうかもう無理、私は部屋の隅にある布団をチラ見すると、ビールを一気に流し込んで、椅子を倒して立ち上がった。

「……提督」

「何？」

「不公平です」

「何が？」

「なんで前々から思っていたけど、私だけこんなに恥ずかしい思いしなくちゃいけないんですか!?？」

「あー、前におっぱい見たりスカート覗いたり色々あったからねー。まあ、運が悪かったんじゃない？」

「運だろうとなんだだろうと不公平です！」

「そんな事俺に言われても……」

「野球拳です」

「はっ？」

「それで公平に提督の身ぐるみを剥がして私が勝ちます!!？」

「おおー、良いねえ。その代わり、負けた方は勝った人の言う事を一つ聞くのな」

「上等ですよ!!？」

私は拳を引き、提督も手首を回しながら構えた。

「野球、するなら♪こういう具合に（以下略）」

〈5分後〉

提督↓靴すら脱いでない。

大和↓身ぐるみ剥がれた。

「……………ツ!!?」

「はい、俺の勝ちね」

死にたい……………まさか、ストレート負けするなんて……………。

「じゃ、俺の言う事聞いてもらおうかな」

提督はふらふらした足取りで、私の前に立った。で、私の顎を掴むと、くいつと自分の方を向かせた。

「さつきからさあ……………部屋の布団をかなり気にしてるみたいだけど、どうしたの?」

「ツ……………!そ、それは……………!」

「もしかして、あそこで俺と何かしたいか思っちゃってる……………?」

「ち、違います!」

「へえ?それは、どうだかね?」

提督の手が、そーつと私の身体に伸びて行く。私は何故か抵抗できなかった。力でも身体能力でも私の方が勝っているはずなのに、身体を動かさそうと思えなかった。

目をキュツとつむって、思わず覚悟しそうになった時、提督の体が私の方に倒れこんで来た。

「きゃっ!?」

「……………」

「て、提督……………?」

「zzzz……………」

……………寝やがった……………。とにかく、提督にお酒を飲ませちゃいけないことがわかった。

夏になった。

第22話 避けても避けられないものがある。

季節はぶつ飛んで、夏。セミが窓の外で大合唱を繰り広げ、空では太陽が無限太陽拳をし、地面は反射熱によって灼熱地獄を繰り広げている季節になった。

だが、それは外の話だ。俺は自室に引きこもって、クーラーガンガンに効かせ、口にアイスを咥え、パソコンは開かれ、テレビは映画を映し、ベッドの上でゴロゴロしながらゲームをしていた。すると、ダンダンダンと部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「……………」

『提督!!?もう12時を回っていますよ!!?良い加減起きなさい!!?』

大和か。俺は鍵をロックし、窓もカーテンを閉めた。

『あつ、コラー!』

テレビの音量を上げて、外からの音もシャットアウト。完全に閉鎖空間である。

『こーらー!開けなさい!』

……………あ、天鱗来た。やったぜ。後は古龍の大宝玉、だったか?とりあえず、テオでいいや。こいつ袋叩きしまくって落とす。それまで今日は部屋を出ない。

『提督!一週間ずつと、武蔵に一日の予定連絡するだけで部屋を出ないですよね!?!?そんなのもう許しませんよ!!?』

……………うーわ、クーラードリンク忘れたんだけど。まあ、何とかなるか。攻撃避けまくって、支給品来るまで小まめに回復すれば行けるだろ。

『また無視する気ですか!?!?それならこちらにも考えがありますからね!!?』

……………あ、いた。ていうか、お前火山の一番上に出るのやめろや、遠

いんだから。

その直後、メコツと音がした。ドアが丸々引き抜かれる音。外れたドアは後ろに投げられ、大和が怒りを隠す事なく部屋の中に入ってきた。

『提督！追い詰めましたからね!!?………つて、あら?』

大和さんは、パソコンの画面に映されている俺の部屋に侵入した。そこは一昨日まで俺が住んでいた部屋だ。昨日のうちに、新しい避暑部屋を鎮守府に作っておいた。これでしばらく安全だ。

さて、テオ狩りに集中しないと……そう思った直後、後ろからガツと背中を踏み潰された。

「っ!!?」

あつ、バカ！テオの火炎放射直撃コー……!!?

「ふむ、やはりそういうことか。え？提督よ」

後ろを見ると、武蔵さんが立っていた。俺はとりあえずゲームを閉じた。

「む、武蔵さん……?どうしてここが……」

俺の質問を無視して、武蔵さんはスマホを取り出すと、耳に当てた。「大和か？私だ。提督を捕らえた。今、そっちに連れて行く」

パソコンの画面の中の大和さんは、カメラ越しに真っ直ぐとこつちを睨んでいた。あの目は、「お前マジボコるから」という目だ。

「………武蔵さん」

「なんだ、遺言か？」

「iTunesカード1万円ですらどうでしょう」

「それで売られたら私が大和に殺される」

ですよね。俺は、武蔵さんに担がれて、どこかへ連れて行かれた。

+++++

連行された先は執務室。正座させられ、大和は目の前で仁王立ちしていた。

「まったく！毎日毎日毎日世話焼かさないで下さい!!?ただで

さえ、暑くてイライラしてるのに……!」

「いいじゃないですか、書類仕事だつてやってるし、近いうちの夏イベントのために資材貯めてて出撃もできないから指揮も必要なし。俺なんて必要ないと思います」

「大真面目な顔でそういう事言わないで下さい!!? 機能性の問題ではなく、指揮的と形式的な問題です!!?」

「……………後でキスするので許して下さい」

「……………。はっ、だ、ダメです!」

少し考えたな。なんか、この前鳳翔さんの店を貸し切りにして以来、すごいキスしたがるんだよね。何かあったのだろうか。

「でも、暑いでしょう? 大和も」

「気持ちわかりますが……。だからといってサボるわけにいかないのはわかるでしょう。深海棲艦はいつ攻めて来るかわかりませんよ」  
「うー……………」

ダメだ。こうなったら平謝りしてこの場を回避するしかない。

「すみませんでした」

「い、いえ、わかればいいんです」

「じゃ、仕事しましょうか」

俺は立ち上がって机に向かった。隣に座る大和。仕事はほとんどないので、30分で終わった。

「ふう……………終わりっ」

「本当に提督は仕事が早いですね。そこだけは助かります」

「そこだけって何ですか……。しかし、このままだと午後暇ですね」

「はい……。けど、まあ仕方ないでしょう」

「……………」

大和が何でさつき怒ったのか、それは俺が仕事をしないからでも、ダラダラと部屋に籠ってるからでもない。俺と会えないからだ。なら、どうするか? 簡単な話だ。大和も一緒に遊べれば問題ない。

「大和」

「はい?」

「明日、プール行きませんか?」

「……………へっ?」

「だから、プール。暑いし」

「私と、提督が……………ですか?」

「え、他の人と俺がプール行って良いの?」

「提督に他の人なんていないでしょう」

「武蔵さんとか大鳳さんとか」

「ダメです」

うん、大鳳さんはやめとこう。何か起こる気がするし。

「じゃ、明日で」

「は、はい!」

大和はすごく嬉しそうな顔で頷いた。プールか、我ながら天才だな。ゲームはできないが、ダラダラはしないし水の中は涼しいしで最強である。海のように流される心配もないし、水を飲んでもしよっぱくない。神か、プールって。

「提督」

「ん?」

「明日ですよね」

「はい」

「今から外出しても良いですか?」

「はっ?別に良いですけど」

「じゃあ、失礼します」

大和は執務室を出て行った。

……………これはつまり、遊んでも怒られない?

「やつふうふうふうふう!!?」

まずは、執務室のクーラーをつけた。いつも、大和が「艦娘は暑い中、外で演習してるのに私達が中で涼んでるのは許せない」という理由でクーラーはつけてなかったが、その大和がいなければなら、こつちのものである。

クーラーをつけて、ソファアにダイブした。さて、寝るか……………そう思ったのだが、目を閉じる前に天井に黒い何かを見かけた。

「……………クワガタじゃん」

そうか、もうそんな季節か。あ、ゴキブリだったってオチじやないから。何処から迷い込んで来たのか知らんけど、クワガタが天井を歩いていた。

高一までの俺なら、捕まえて友達にしようとしていたが、もうそんな歳でもない。俺はソファアールからジャンプしてクワガタを掴んだ。一匹の虫にも五分の魂である。

窓の外から逃がしてあげた。その直後、何かがヒラヒラと落ちて来た。それを反射的に掴んだ。「大鳳」と書かれたパンツだった。どうやら、屋上から風に飛んで、風に流されて来たらしい。

すると、ボタン!!?とすごい勢いで後ろのドアが開いた。大鳳さんが真っ赤な顔で立っていた。

……………ほらね?大鳳さんと俺が会うと必ず何かしら起こるんだよ……………。

「提督。その手に持つてるものは?」

「風に流されて来たんです。もしかして…………」

「それ以上何も言わないで!」

大鳳さんが大声を出して俺を制した。

「今回は私が悪いから。提督はそれを取ってくれただけだから。余計なこと言って私の我慢を無駄にしないで。黙って私に渡して」

そう言って、俺の前に歩いて来る大鳳さん。そして、パンツを受け取った。

取り繕ってるものの、少し恥ずかしそうにしているので、場を和ませようと俺は大鳳さんに言った。

「パンツに名前書いてるなんて、なんだか可愛いですね」

「死ね!!?」

大鳳さんのストレートが、俺の溝にめり込んだ。俺は夕方陽が落ちて大和さんが帰って来るまで、その場から動けなくなっていた。

+++++

「まったく、バカですね提督」

今回は殴られた事情を言わないわけにはいかなかったので、正直に話した。だって、言わなかったら大鳳さんが怒られてたと思うし。

「そんな事言ったら誰だって怒りますよ。というか、パンツ握っただけで怒る子もいますからね」

「まあ、そうでしょうね」

理不尽だが、恥ずかしさを何処かにぶつけたくなるのは分かる。

まあ、大鳳さんの場合はパンツどころではないというのもあると思うけど。そんなことは口が裂けても言えない。

「…………ち、ちなみに、私は…………提督になら、パンツを握られても…………お、怒りませんよ」

「え？…なんだって？」

「な、何でもありません……………」

ちなみに、大和とはまだ何もしていない。だって、体目的で付き合っていると思われたら嫌じゃん？そういう事は、もう少し先になってからするべきだと思うんだよね。

「……………やっぱり、武蔵の言う通り同じ部屋で暮らした方がいいのかしら」

大和が何か呟いてたが、良く聞こえなかったのでスルーした。だってなんか聞いちゃいけないような内容な気がするし。

ま、いいや。もう8時回ってるし、寝るか。

「さて、もう晩飯にして寝ますか」

「そうですね。夜も遅いですし」

「大和」

「はい」

「おんぶ。まだ立てない」

「はいはい……………」

おんぶしてもらって、部屋に戻った。

## 第23話 コミュ障は時に人をイラつかせる。

翌日、プールの日になった。俺は鎮守府の外で大和を待っていた。  
……………暑い。暇なんだけど。てか、大和遅くね？10分過ぎてるよ。別に気にしないけど。

「お、お待たせ致しました！提督」

あ、来た。

「どうも」

「申し訳ありません、お待たせして」

「いや、全然。ちよつとサウナの中にいた気分になってただけ」  
「うっ……………」

「や、責めてるわけじゃないんで。車で良い？」

「えー、歩いて行きましようよ」

「え、いやだつてこの炎天下の中を？」

「良いじゃないですか、デートは長い方がいいでしょ？」

「いや、まあそれはそうだけど……………」

仕方ない。俺は大和に手を差し出した。大和は微笑みながらその手を取つて歩き出した。

「……………提督も随分と慣れましたね」

「まあ、もう四ヶ月だからね」

「いつの間にか、仕事中でも『大和』なんて呼び捨てするようになって」

「大和くらいは、呼び捨てでも良いかなって思っただけだから」

「それは、大和は気を許されてると取って、よろしいでしょうか？」

「端的に言えば」

「……………提督つて照れたり恥ずかしがったりしないんですか？」

「いや、するよ。ただ、少し前まで自分の事を存在自体が生き恥を晒してる奴だと思つてたから、今更照れたりしたところであつて感じの考え方が根まで埋まつてて」

「……………なんでそんなに自分を落とすんですか」

「プライドを捨てれば悔しい思いしなくて済むし、この世の人間全員

が自分より上と思えば、そのプライドを捨てられるでしょ？ マイナス思考の自己防衛だよ。……まあ、大和と付き合ってから、その考えは止めようとしてるけど」

「……………なんでですか？」

「そりゃ、俺の事を好きになった大和に失礼だからでしょ」

「……………」

「あ、今照れた？」

「うるさいですっ」

「可愛い」

「うるさいっ！」

顔赤くして、大和はプンプンと怒った。ああもう、そういう幼い仕事草が可愛いんだよ。

「えいつ」

「ひゃうっ!!?」

脇腹を突くと、ビクツと腰を横に振った。

「て、提督！」

「ひゃうっ!!? だつてー」

「お、怒りますよ!!?」

「大和つて脇弱いんだよなー」

「ひゃっ! ちよっ……突かな……ひゃんっ!!?」

「脇の下っ」

「キャンツ……こ、このっ……良い加減になさい!!?」

「顎が痛い!!?」

アッパーカットを喰らいました。

「まったく……その小学生みたいな癖はなんとかならないんですか？」

「かまちよなんだよ。仕方ないじゃん」

「ガキ」

「人生を楽しむコツは童心を忘れない事って銀さんも言っていましたよ」

「漫画の受け売りを自分の事のように言わないでください」

そんな話をしながら駅に到着した。電車に乗って、移動すること数分、どこかの駅で降りて改札を通った。

「んー……電車ってやっぱりあまり慣れないわね……」

「そう？まあ、俺も好きじゃないかな。電車の中で喧しい学生とか嬶り殺したくなるし」

「いや、それは流石にありませんけど……相変わらず闇が深いですね……」

うるせえ。ただ、俺は騒がしいのが嫌いなだけだ。

「でも、プールとか学生たくさんいるんじゃないですか？」

「いや、少なくとも都会の学生……というより、大学生や高校生のリア充共は、小学生の時に何度も行った所為で、プールには何となく『子供っぽい』っていう先入観があるんだよ。だから、奴らは少し遠出して海に行きたがるんだ。よって、プールには子供か子連れの子しかいない」

「どこまで深読みしてるんですか……」

「まあ、本当にそうか知らんけど」

「完全に被害妄想ですね……」

うるせえ。悪かったなこの野郎。なんだかんだでプールに到着した。

お金を払って、更衣室に向かった。大和は少し恥ずかしそうにしていた。多分、鎮守府以外で服を脱ぐ機会なんてなかったから、少し緊張しているのだろう。

まあ、そのくらいは周りの人が服脱いでれば自分も恥ずかしいとは思わなくなるだろうから大丈夫だろうな。ホント、集団心理ってすごいわ。

更衣室で海パンを履いて、ゴーグルとペしゃんこの浮き輪とビーチボールとその他諸々の道具を持って出た。予想通りというかなんと言うか、大和はまだ来ていない。

「……………」

暇だったので、浮き輪を膨らませ始めた。パンパンに浮き輪を膨らませた後、今度はビーチボールを膨らませる。

……まだ来ないの？さつきから通る人が俺の事をジロジロ見ててなんか嫌なただけ。

そんな事を思いながら女子更衣室を見ると、大和が女子更衣室の入り口から、俺の事を見ていた。

「……………何をやってんだあいつは」

どうしよう。どうするべきなんだろう。声かける？いや、でも女子更衣室に何かしようとする、その時点で監視員に見つかって逮捕される気が……………（超偏見）。

「……………」

どうしよう。大和はなんかずっとこっち見てるし。あ、もしかして照れてるのかな。そんな今更だろ、もうおっぱいもま〇こも見てるの。おっぱいもま〇こも見てるのに挿れてないって異常だな。

そんな事を思っていると、後ろから「あの……………」と声を掛けられた。

「？」

「お一人ですか？」

知らない女性二人が声をかけて来た。あ、やばい。提督、ピンチ。というか、ビーチボール持ってて一人なわけねーだろ。

「え、いや……………」

「良かったら、私達と泳ぎませんか？」

「え、あ……………え？」

え、何これ。逆ナン？それとも新手的ハニートラップ？ま、待て。落ち着け。何にせよ断らないと。いや、でも相手を不快にさせないように断らないといけないし……………な、なんて言えば……………。

「あ、もしかして緊張してる？」

「大丈夫だよー、お兄さんイケメンだし、良い体してるし」

良い体してるってなんだよ。モデルのスカウトなの？っていうか、何一つ大丈夫な根拠になってないしそれ。

って、違う。いいから断れよ俺。いや、だから断り方を考えてるんだってば。

「いや……………その……………あ、アレなんで」

「？ アレって何？」

「え、いや……あ、アレルヤ・ハプデイズム的な？」

「ぷっ、何それー」

「面白い人ですねー。お話は泳ぎながらしませんか？」

あれ？なんかもう一緒に泳ぐ事確定してない？ああ、やばい誰か助けて……………」

断る方法を必死に模索していると、後ろからカツカツと歩いて来た誰かが、俺の腕を引っ張って女の人達の横を通り過ぎた。うおお、腕がおっぱいに当たってる！水着越しのほとんど生乳とも言える柔らかさが！

「っ！！？」

「ち、ちよつと！何よあんだ！！？」

「その人は私達が……………」

そう後ろから声が聞こえ、俺の腕を掴んでる本人はピタツと足を止めた。

そして、怒りを隠すこともなく女性達を睨み付けて言った。

「この人は私の彼氏です!!？」

大和だった。そのまま俺の事を引き摺る形でプールサイドまで歩いた。

「いやー、助かったよ大和。死ぬかと思った」

「私は殺そうかと思いました」

えっ、怖っ。

「なんでさっさと断らないんですか!!？私がいるのわかってて!!？」

「……………あ、そゆことか……………。いや、悪い。なんて断れば良いか分からなくて」

「彼女がいるのでって言えば良いでしょ!!？」

「……………ああ、それがあったか。彼女いた経験ないから分からなかった」

「コミュニケーションが苦手なのは知っていますから、少しは許容しようと思っていましたが……………にしてもぼんやりし過ぎでしょう！あれを見ていた私の身にも、なって下さいよ……………」

確かに、大和がナンパされてたら、俺ならそいつの事を一時間くらい縄で縛って流れるプールに放り込んでたかもしれない。

「……………すみません」

「いえ、断ろうとしたのは分かってましたから、良いんですけど……………」

「でもアレですか？嫉妬してくれてたんですか？」

「っ……………そ、そうですよ！悪いですか!?？」

「いや、悪くないよ。ホント、ごめん」

「い、良いです。お昼奢りで許してあげます」

まあ、お昼くらいなら良いか…………。人がいるところでは、流石にたくさん食べたりしないだろうし。

「じゃ、俺たちの場所作りましょうか」

俺はブルーシートを広げ始めた。その俺の肩を、大和はツンツンと突いた。なんだよ、まだなんかあのかよ、と思って振り返ると、大和はさつきままでとは違い、恥ずかしそうに顔を赤らめて俺を見ていた。

「……………て、提督」

「はい？」

「何か、言うことは？」

「……………パッドなくてもやっぱ大きいですね、とか？」

「……………やっぱり殺しますか…………」

「ええっ!?？え、えつと…………エロい体してるね、とか？」

「……………次、次変なこと言ったら帰ります」

「えつ…………えつと……………」

な、なんだよ…………なんて言えば……………あ、分かった。

「水着姿も綺麗ですね……………とか？」

「……………そうやって予想の斜め上を行くんですから（小声）」

大和は顔を赤らめて斜め下を見た。何を言ったのかイマイチ聞こえなかったが、許されたみたいだ。

俺はブルーシートを広げると、真ん中にパラソルを置き、パラソルから半径3メートルの円を描くように、赤外線式電撃バリケードを置

いた。

「大和さん、これ着けて」

「なんですか？これ」

「腕輪。これ着けないでこの円の中に入ったら感電死しますから。これで荷物番は完璧です」

「……………は？」

「じゃ、遊びに行きましようか」

「待ちなさい！荷物番にこんな危険な罠を仕掛ける人がいますか！？」

「……………やっぱダメか」

「せめてブルーシートの範囲にしなさいー」

と、いうわけで、ブルーシートの範囲に絞った。

俺は早速、目の前の流れるプールの中に入ろうとすると、大和に腕を掴まれた。

「待ちなさい」

「？ 何？」

「準備運動が済んでいません。ちゃんと身体を伸ばさないと怪我をします」

「……………」

このクソ真面目……………。

言ってることは間違ってるので、ここでゴネるわけにもいかない。

軽く体を伸ばしてから、俺は水の中に飛び込んだ。飛び込んだ、と言っても思いつきりジャンプしたわけではなく、ゆっくり足から入るのが面倒だったので、ドボンツと足から落ちる感じに入った。

大和の方を振り返ると、水の中に入る経験なんてほとんどなかったからか、しゃがんで、手を水につけた。ジャブジャブと水を触ると、今度は足で水に触れた。「ひゃっ」と小さい悲鳴を上げた後に、今度は逆の足をゆっくりと水面に伸ばした。

……………焦れてえ。俺は水中に潜って、気付かれないように大和の足元に移動した。そして、足が着水した直後、

「ほばえ、ほぶにぶばれべびる？（訳：お前、僕に釣られてみる？）」  
と、言つて足を掴んで引き摺り込んだ。

「ひゃあアアああアツ!!?」

悲鳴を上げて水の中に落ちる大和。その間に俺は水面から顔を出した。

しばらく沈んだあと、プハアツと大和は顔を出して、水を払うと俺を睨んだ。

「てえいいとおくう!!?」

「ムシヤクシヤしてやった。後悔はしていない」

「覚悟しなさい！」

「お、やべっ」

「待ちなさい!!?」

流れるプールの中で、鬼ごっこが始まった。

## 第24話 場の雰囲気と天気は関係ない。

流れるプールで早くも体力を使い果たし、俺と大和は自分達のパラソルの下で座り込んでいた。ちなみに、俺の脳天にはたんこぶが出来ていて、湯気が上がっている。

「……………頭蓋骨割れるかと思った」

「……………あんな子供みたいなチョツカイ出して来るからですよ……………」

「お前さあ、大人だったら笑って見過ごす事も覚えろよ。ちゃんと手加減くらいしなさいよ」

「大人だったらチョツカイ出さないで下さい！」

「いや、それは無理。俺、子供だし」

「あなたは……………いやもういいです。諦めました」

「じゃあもつと手加減してよ」

「諦めてください」

「どんだけ俺の事殴りたがってんの……………」

怖い彼女だ。いや、まあ基本的に悪いのは俺だけだ。

ああもう、疲れた。ていうかお腹空いた。あんな序盤からトップギアで泳ぐなんて聞いてない。

「はあ……………今何時？」

「えつと……………11:13ですね」

「まだ少し早いか……………。何する？」

「では、そろそろ泳ぎに行きましようか！」

「え、まだ早くない？もう疲れて死にそうなんだけど……………」

「ダメです。時間が勿体無い」

おいおい、マジかよこの人。

ていうか、体力無尽蔵かよ。化け物だな。

「もう少しだけ休ませて」

欠伸をしながら、横になった。その直後、パンツとビーチボールが俺の顔面に当たった。大和がいたずらに成功したクソガキみたいな表情で俺を見ていた。

「……………これは何の真似ですか」

「いつもの逆です」

「……………」

それはつまり……………？

「俺に怒られたいんですか？」

「違います！遊んで欲しいんです！ていうか、今まで怒られたくてチョツカイ出したんですか!?？」

「まあ、そうなるな」

しかし、遊んで欲しいのか……。随分と素直になったなあ、大和の奴は。

まあ、そういうことなら俺も遊びに付き合ってやるか。俺はビーチボールを拾って、大和に放った。

「はい」

「あ、はい」

ボールはゆるやかに高く上がり、大和の頭上に落下して行く。大和は打ち返そうと、両手を構えた。

その直後、俺は地面を蹴って、大和に突撃した。

「ふえっ!?？」

「ここから、ここから！出て行けエエエエ!!？」

正面から大和の腰に飛びついて、プールに落とされた。俺は水の中に入らないで、プールサイドギリギリで踏みとどまって、落ちた大和を見下ろした。

お尻から水の中に落ちた大和は、ガボツゴボボツともがいた後、プハアツと顔を出した。

「……………エホツ、ケホツ……………！な、何するんですか!?？」

「いや、遊んで欲しいって言うから、ユニコーンの日ごっこでもしようかなーと思って」

「……………そうですか、そんなに追いかけて欲しいんですか」

「へ?！」

「なら、私も本気出しちゃいますね」

「え、いやガンダムごっこな訳であって鬼ごっこしたいわけじゃ……………」

「つかさつきの本気じゃなかったの？」

「覚悟して下さいね」

あ、ヤバイ。よく見たら怒り浸透してる。そりやそうだよね、2回目だもんね。

大和さんは手を使わず、跳躍だけでプールからプールサイドに上がると、コオオオツ……と、口から冷気を出しそうな雰囲気で構えた。

……ああ、死んだな俺。

そう覚悟を決めた直後、ぐうつと情けない音が鳴った。俺からではない。俺に狙いを定めている状態のまま、顔を赤くしてる奴からだ。

「……………」

「……………」

「……………お昼にしますか？」

「……………はい」

お昼にすることにした。

プールの園内に軽い食堂的な場所があるため、そこでお昼を食べることにした。まあ、正直味には期待していないけど。海の家みたいなもんだろ。

まずは席を取って、その席の机の上にビーチボールを置いた。

「さて、何食う？」

「……………」

「おい、凹むなよ……。もう過去に何度も君の腹の音色は聞いてるんだから」

「フロローになってません!!？」

お、お。いやだから良い加減なれろって事なんだが……。

「ここ来る途中で奢る約束してるんだしき、マジで凹むなって。飲み物も付けていいから」

「……………デザートも」

「お、おう……………」

別に良いけど、それ君の食いしん坊をさらにさらけ出してる事になるよ？

前々から思ってたけど、大和さんって割と頭悪いよな。多分、俺の

方が頭良い。

「で、何食べる?」

「……………カレー特盛」

「デザートと飲み物」

「ラムネ。デザートは帰りにコンビニで買って下さい」

良いのかそれは、とも思ったが、まあこれからまだプールで遊ぶつてのにデザートもまでつけたりしないか。いや、それでもカレー特盛りなんですけどね。

出店でカレーの特盛とラムネとラーメンの大盛りとメロンソーダフロートを注文して、大和の待つ席に戻った。

「ほい」

「ありがとうございます……………」

「まだ凹んでんの?」

「いえ、これからまだ泳ぐのになんで特盛りを頼んだのかと思って……………」

「ああ、でも大和なら特盛くらいのカレーなんてストローで一口で啜るくらいのもんでしょ?」

「それは流石にありません!周りの目を気にしての意味です!」

「お、おう……………ごめん。でもそれは大丈夫だろ。俺もラーメン大盛りにしたし」

「……………もしかして、私のために?」

「……………まあ、半分はな。基本は俺が食べたかっただけ」

「て、提督……………」

うるせー、感動すんな。俺が優しいのはいつもの事だろうが。優しくて気遣いが出るから、基本的に他の艦娘と話さないんだろ。まあ、最近は良く向こうから話しかけてきたりするけど。

「つと、伸びちまう。いただきます」

「いただきます」

二人で手を合わせてから、食事にした。

あの後、色々と遊ぶに遊びまくり、そろそろ帰ることにした。屋内プールも中々捨てたもんじゃねーな、と思いつつ着替え終わり、更衣室の前で大和を待った。

スマホゲームをしながらベンチに座っていると「お待ちせしました」と声が聞こえた。

「あ、来た」

パツと顔を上げると、何故か大和は不機嫌そうな目で俺を見ていた。

「えっ、何」

「提督、なんですかその頭」

「へ？頭？何、超サイヤ人みたいになってる？」

「ビショビショじゃないですか！ちゃんと拭かないと風邪を引きますよ！？」

「大丈夫だろ。俺、バカだから風邪引かないし」

「そう言う問題じゃありません！ああもう、じつとして下さいね」

大和はそう言うのと俺の隣に座り、鞆からタオルを取り出した。

「向こう向いてください」

「え？んっ……」

ふわっ、と良い香りのするタオルが俺の頭上に乗せられ、わしゃわしゃと髪を拭かれた。

「……………恋人つつーより、母ちゃんみたいだな」

「……………せめてお姉ちゃんと言ってくれませんか」

「んー……………大和お姉ちゃん？」

「ぐはっ……………！」

「は？」

あ、ていうかダメだこれ。少し恥ずかしいわ。

だが、大和はそうもいかなかったらしい。さっきまで俺の頭を拭いていた手は完全に制止している。

「も、もう三回呼んでいただけませんか？」

「え、なんで」

「良いから!」

怖いので従っておくことにした。

「大和お姉ちゃん」

「ぐはっ……………」

「大和お姉ちゃん?」

「がふっ……………」

「大和お姉ちゃん♪」

「ぐほっ……………」

せつかくなのでイントネーションを変えてみると、それによって大和お姉ちゃん(笑)は面白い感じにリアクションしてくれた。この人ホント馬鹿だな。これ、別の呼び方してもバレねえんじゃねえの?

「ふう…………もう大丈夫です。あ、髪も大丈夫です」

「うん、ありがとう大和お婆ちゃん」

「お前今なんだった?」

「じ、冗談です……………」

ガッツリバレてた。これからは下手な実験はしないようにしましょう。大和がタオルを鞆にしまうのを確認すると、立ち上がってプールを出た。出口の傍にアイスの自販機を見つけた。

「あ、そうだ」

「?」

俺はその自販機でアイスを二本買うと、大和に放った。

「んっ」

「? これは?」

「プールのあとのアイスってすごい美味いんだよ」

「へえ…………そうなんですか」

「……………っていう話を、中学の時にクラスメートが話してるのを聞いたことがある」

「そのソース、いらないます……………」

少し悲しい想いに浸りながら、二人で帰宅し始めた。

〜10分後〜

雨が降って来た。どしや降りどころの騒ぎではない。

「っ!? て、天気予報では晴れって言ったのに!」

「どうする? その辺のコンビニで雨宿りでもする?」

「何落ち着いてるんですか!? でも、そうしましょう!」

「大丈夫ですよ。こんなビショビショになったら、どんなに慌てたつてもう同じですから。のんびり行きましょう」

「あ、あそこ! コンビニ!」

「人の話聞いている?」

こんな雨に降られた経験はないのか、大和は慌てて走り出した。まあ、そういう時のお約束は大体決まってる。思いつきり濡れた道路に足を滑らせ、豪快にすっ転んだ。

「きゃあっ!」

何やってんだよ……。俺は大和の横に駆け寄って、手を差し出した。

「お前……だから慌てるな言うたろ。大丈夫か?」

「ううっ……も、申し訳ありません……」

「もうビチャビチャになっちゃったな……。このままじゃコンビニに入るわけにもいかないし……」

どうしたもんかね……。と、思いながら辺りを見回すと、ちょうど良い建物が目に入った。

ヤケにテラテラキラキラしたピンクっぽくて黄色っぽくて赤っぽい色の文字で「Hotel」と書かれていた。

## 第25話 エツチすると性格が変わる。

ラブホの中。そこで、とりあえず入浴を終えて食事を済ませ、俺と大和は何となく待機していた。えーつと、これどうしたら良いんだろうか。まずは俺に下心が無いことを弁明すべきだよな。身体目的で付き合ってたとか思われたく無いし。

「大和」

「つ、ついにこの時が……は、はい！」

「俺、お前の身体に一切興味ないから」

「……………は？」

「エロい事目的でここに来たんじゃないから。服濡れてこのままじゃ風邪引くから仕方なくだから。何ならエロい事しないから。そこんどこわかってるんだらうね？」

「……………」

言うと、大和は落胆したようにため息をついた。で、「ですよ、うちの提督だもんね……」と呟いた後、俺を見た。少し悩んだ後、むんつと覚悟を決めたように鼻を鳴らし、ベッドに腰をかけてる俺の唇に唇を押し当てながら、俺を押し倒した。

「ツッ??」

「んっ……………れろっ」

し、舌がペネトレイトして来た!? そのまま口の中を舌でペロペロと弄られる。そのままの状態で10秒ほど経過した。俺はといえば、なす術なくされるがままにされていた。

ようやく、大和は口を離れた。つうーつと俺と大和の口を涎が繋いでいる。

「んっ、糸引いてる……」

その涎を手で切った後、口の中に入れた。え、この人本気で何してんの……………ちよつと、僕の理解の範疇を超えてるんですが。

「……………提督」

「……………な、なんだよっ……………?」

「これが、大和の気持ちです」

「は、はあ……………」

「大和は、もう何ヶ月も前から、我慢してきました」

「何を？」

「性欲」

「っ」

ストレートに聞けば怯むと思ったが、全然怯まない。それどころか、なんかバスローブに手をかけ始めたんだが……………。

「お、落ち着け大和……………こ、こんな勢いやノリだけで……………」

「違います」

「だって、たまたまプールに来て、たまたまその帰りに雨が降って、たまたまその近くにラブホがあったってだけだろ？こんなたまたまづくしな状態で俺のたまたまを搾り取るつもりか？」

「それだけ『たまたま』が続いたら、それは最早必然かと思えますけど？」

「……………」

「きつと、神様が言ってるんです。『お前ら、さつさとゴールしろ』と」「いやいやいや！俺は無神論者だから！ていうか神様そんなに俺達の事ばっか見てないから！世界で何人の人を見守らないといけないと思ってるの！？見守ってくれてたらグ○ブルのガチャでとつくにバハムート引いてるはずだから！」

「日頃の行いが悪いからです。今日、何回大和のことプールに落としましたか？」

「……………結局、28回くらい」

「56回です」

マジかよ……………さすがにやり過ぎだな。

「いや待てよ？これはつまり、大和にチョツカイ出すのを我慢すればバハムートが出るって事か！」

「そうやって論点をずらして話題を逸らすの、やめて下さい」「……………」

バレバレですか、そうですか。

どう逃れようか考えてると、大和が泣きそうな顔で質問してきた。「それとも、提督は大和とエツチなことするの、嫌ですか……………」

その質問とその顔はズルいだろ……………。

別に嫌じゃ無い。ただ、一応戦争中だ。そういう事をして、戦場で支障が出たら沈むのは大和の方だ。それだけは避けなければなら無い。

でも、そんな顔されたら断れないのは、俺の甘さだろうか。

「大和、約束しろ」

「？」

「明日から一週間、お前は出撃無し。こっそり隠れて出撃したらキン肉バスターかけるから」

「はい」

「あと、俺童貞だから。そこんところよろしく」

「……………台無しです。そういう事は言わなくても良いんです」

大和は言いながら視線を逸らして頬を染めた。

「……………や、大和も初めて、ですし……………提督にされるなら、何でも良いですから……………」

……………何でそういう恥ずかしいことをこいつは……………。

大和は自分のバスローブを脱ぎ捨てると、胸と股間を手で隠した。

「……………あれ？おまえパンツとブラジャーは？」

「こ、この時のために脱いでおいたんです！言わせないでください！」

「なーんだ、やる気満々だったんだ」

「う、うるさいです！て、提督こそ！さつきから、固いのが当たってますよっ…」

「や、そりやまあオレも男だし……………」

「提督。あの、お願いがあるんですけど……………」

「？ なに？」

「あの、漫画にあった……………ウロボロスっていうのを、試してみたくて……………」

「アレ、女同士なんだけど」

「い、いいんです！さ、提督も早く脱いでください！」

「お前が邪魔で脱げねーんだよ」

「じ、じゃあ……脱がします、ね………？」

「……………おう」

「ここから先はご想像にお任せします。」

+++++

朝。俺と大和は一緒に備え付けの風呂に入っていた。結局、朝までやった。最後の方なんてほとんど逆レイプ状態でした。

「んふっ♪痒いところはありますかー？」

やけに元気な大和は、俺の頭を洗っていた。

「……………ねえよ」

「っはあー！提督が射精した時の顔、可愛かったなあー」

「やめてくれませんかマジで……」

ホント、死にたくなるから。気持ちよかったけど、やったあとの謎の後悔は何なんだろうな……………。

「あと、一生懸命腰振ってる提督も可愛かったですよ？」

「お前黙れマジで。殺すよホント」

「お？照れてるんですかー？」

「どんだけ上機嫌になってるの……」

「そりやそうですよー。ずーっと我慢してたんですから」

……………こいつ、わりとエロい奴なんだな……………。いや、元からどスケベな体はしてるとは思ってたけどよ」

「声に出ていますよ？しゃぶっても良いですよ？」

「しゃぶらねえよー！」

キャラ変わり過ぎだろおま。おっぱいやスカートの中見られて恥ずかしかつてた時代が懐かしいわ。

「……………でも、大和」

「なんですか？授乳ですか？」

「俺、恥じらいのないおんなは嫌いだから」

「……………気をつけます」

ま、今は事後だからテンション上がってるだけだと思っただけだと思っただけだ。早くて鎮守府に帰ったら恥ずかしくて死んでしまうぞ。

お互いに体を洗い終えて、湯船に浸かった。

「ふー……………これから鎮守府に帰んのか……………」

「面倒臭いですか？」

「ああ……………お前は休みだが、俺は仕事なんだよ」

「お休みをくれたのは提督じゃないですか」

「もし、何かお前の身体に異変が起きてて、そのまま出撃させたらマズイだろう。俺は出撃しないから良いけど」

「じゃあ、明日は提督のお手伝いですね」

「いや、いいよ別に」

「わたしはお休みよりも、提督と一緒にいる時間の方が欲しいんですよ」

「や、足手まといだからいらない」

「提督？最近、大和は新しいお仕置きの仕方を覚えたんですよ？」

「だから恥じらないの女は……………」

「一緒にお風呂入ってる時点で恥じらいもへったくれもないと思います」

「……………大和」

「冗談です」

まあ、笑って見過ごしてやるけどよ……………。こんなやり取りも悪く無い。

「……………帰るか」

「そうですね」

俺と大和は湯船から上がった。こんな生活が、いつまでも続けば良いなど本当に思う。そのためにも、戦争はさっさと終わらせたいと切実に思う。

……………いや、まあたくさんセクスしたいという意味じゃ無いが。

## 第25・5話 感想。

居酒屋鳳翔にて。

「……………えっ、お前ヤツたの?」

二人に報告すると、武蔵が頬に汗を流して聞いて来たので、私は顔を赤らめて頷いた。

「ま、マジでか……。大和が、とうとう大人の階段を……」

「まあ、前々から大和さん。やりたいやりたいって騒いでましたからね」

「さっ、騒いではいません!人を欲求不満みたいに言わないで下さい!」

「や、欲求不満だったろ実際」

「……………まあ、そうでしたけど」

提督は違ったみたいだけど、私はもうずっと我慢していた事は否めない。それにしても、こう……。すごかった。あの熱い棒が私の中を出入り入ったり……………。

「ふふっ♪」

「お、おいどうした大和?頭でも何処かにぶつけたか?」

「いや、すごかったなーって思っ♪」

私もうエッチな子でも良いわ。そう思えるくらいにすごかった。

「でも、そうですか。これで、鎮守府内では大和さんが一番お姉さんですネ」

「へっ?」

「だってそうでしょう?鎮守府の子達は基本的に男性と親密な関係になる事はありませんから。なつても提督くらいです。その中で、大和さんは一番に大人の階段を登ったじゃないですか」

そ、そう言われてみれば……。でも、あまり気にならなかった。だって、もう提督ともう……。ふへへっ。

「大和、涎を拭け。このビッチが」

「び、ビッチとはなんですか!そういうんじゃありません!」

「いや、なんというか……すごくぶる気持ち悪い顔をしていたから……」  
え、そ、そんな顔してた……?」

「なあ?鳳翔」

「はい。提督に見せたら一発でドン引きされそうな顔をしてましたよ」

「そ、そうですか……」

二人にまでそんな風に言われるなんて。気を付けなきゃ……。とりあえず、布巾で涎を拭った。

すると、武蔵がビールを飲みながら聞いて来た。

「そ、それでっ、どうだったんだ?」

「? 何が?」

「そのっ……しっ……した感想は……」  
「……………」

よく見ると、顔をすごく赤らめている。私はニマーツと意地悪い笑みを浮かべてしまった。

「何何、知りたいの?」

「っ」

「武蔵も男前な感じするけど乙女なのねー?もしくはエツチなだけ?セ○クスに興味あるんだ?」

「は、ハッキリ言うな!別に、興味があるわけではない。ただ、大和がすごい話したそうな感じだったから……」

「そんな感じ出してませーんっ。興味津々なのを隠さなくても結構です」

「う、ウザい……!」

「教えて欲しかったら……そうねえ。『私は姉のえっちに興味津々です、教えて下さい』って言いなさい?」

「なっ……だ、誰がそんな真似を……?」

「良いわよ?言わなくても。なら私も言わないだけだし。あ、熱爛下さっ」

私は言いながらハイボールを飲み干しながら注文した。はー、えっちした後のお酒は美味いわ、1日経ってるけど。

すると、鳳翔さんがエビフライを私達の間において言った。

「大和さん、少し飲み過ぎですよ？あまり良い酔い方ではありませんし、今日はこのくらいにしておいたらどうですか？」

「大丈夫ですよー。大体、武蔵の方から聞きたいって言って来たんですよっ。」

「そういう事を言ってるんじゃないんです。提督がこんな姿を見たらどう思います？」

「それも問題ありませんっ。コミュ障バカのあの人はここに来る度胸さえありませんからっ」

直後、ピツと音がした。鳳翔さんが録音機を取り出した。

「……………ふえっ？」

鳳翔さんは再生ボタンを押した。

『それも問題ありませんっ。コミュ障バカのあの人はここに来る度胸さえありませんからっ』

一発で酔いが覚めた。それどころか、酔っ払って赤くなった顔が青ざめていくのを感じた。

「なっ……………!!?け、消してください！」

「ダメです。この発言は流石に」

うっ……………た、確かにこれは酷い。私、酔うとこんな事を平気で言っちゃうんだ……………じゃなくて！

「お、お願いします！何でもしますから！」

「ん？なんでも？」

「はい！何でも……………あっ」

今、一番言っちゃいけない事を……………。

「では、武蔵さんに話してあげてください」

「うっ……………は、話さなきゃだめ、ですか……………？」

「良いですよ？話さなくても。そしたら私も消さないで提出するだけです」

うっ……………い、意地悪な返しを……………でも、頷くしかない。

「……………分かりました。話します」

「はい。それで良いです」

……………酔いが覚めるとさつきまでのテンションが恥ずかしいわね。それどころか、これから話す事さえ恥ずかしい……。武蔵はさつきと違って「早よ話せ」みたいな顔してるし……。むかつく。

でも、仕方ないのでとりあえず最後まで二人に説明した。終わった頃には、私の顔は真っ赤になっていた。

「……………ま、まあ、そういうわけですつ……………」

「……………つまり、成り行きだったわけか」

「は、はい……………」

「で、でも、その……………なんだ？割と普通だな」

「？　どういう意味？」

「いや、提督のことだから、監獄学園的なノリの事をするんじゃないかと思ってるな」

「いやいや、流石に最初のえっちでそれはないわよ」

「でもほら、あの提督はアレだろ？カマチよだろ？だからほら、大和が感じてるのを見て楽しんでそうだなーと思って」

「そんな事ないわよ。あの人、割と純情だから私をいじる余裕なんてなかったわよ？まあ、そこが可愛かったんだけど……………」

「……………確かに、その姿も想像は出来るな」

武蔵はビールを飲みながら相槌をうった。いや、本当今思い出してても可愛い。私が性器を舐められてイカされて、提督のお顔に失禁したのに、向こうが顔を真っ赤にしてるんだもの。こっちの方が恥ずかしいのに……………。

「でも、良かったわ。私の最初の相手が提督で」

「なんでだ？」

「提督、私の事を案じて今日から一週間、お休みをくれたのよ。それに、シてる最中でも最後まで優しくして下さったし」

朝までシてたとはいえ。今日の工作中、すごく眠そうだったし。

「あとね、私ってえっちな事すると性格が変わるみたいなの」

「ああ、想像つくな。さつきもすごいビッチウザかったし」

妹にそこまで言われるなんて……………本当にこれから気を付けよう。それはそうと、ビッチウザいって単語は初めて聞いた。

「それで、えっちした後もすぐグイグイ言っちゃって……その時に、ハッキリ言ってくれたんです。『恥じらいのない女は嫌い』って」

「ふむ、あいつが?」

「はい。あそこでハッキリ言っただけなら良かったら、私これからずっとあんな感じになっただけかもしれないから……」

「その割に、さっきは全然活かされてなかったがな」

「わ、分かっているわよ!こう見えて反省してるのよ?……本人がいないとはいえ、提督にあんな失礼な事を言ってしまったし」

「まあ、反省しているのなら大丈夫だとは思うが」

武蔵はエビフライをかじりながら呟いた。気が付けば、飲み物も食べ物もなくなっていた。

「……………よし、そろそろ行きましょうか」

「だな。大和、ここは払う」

「へっ?」

「何、お祝いだ。中学生みたいな奴ら二人が性交をしたんだ。払わせろ」

「うっ……………じゃあお願い」

事实は事実なので何も言えなかった。私だって今にして思えばチキンだったし。

「鳳翔、お会計を……………ん?」

鳳翔さんを見ると、顔を真っ赤にして固まっていた。なんか静かだと思ったら、意外と純情だったみたいだ。自分で聞きたがっていた癖に。

私達はお金だけ置いて店を出た。

## 第26話 波乱のビスマルク。

俺が大和と性交して2日経過した。大和はまだ出撃禁止期間で、隣でずつと書類を片付けている。

すると、コンコンとノックの音が聞こえた。

「どうぞ」

大和が答え、中に艦娘が入って来た。

「おう、提督。遠征成功したぜ」

入って来たのは天龍さんだった。相変わらず胸が尖ってんなーこの人。まあ、童貞を捨てた俺にとってその程度のハニートラップはその辺のとんがりコーンと変わらん。

「……………は、はい」

「入手した資材は全部、備蓄庫へお願いします」

「おう」

代わりに説明してくれた大和に従って、天龍さんは執務室を出て行くとした。その天龍さんの背中に、俺は控えめに声をかけた。

「……………お、お疲れ様、でした……………」

勇気を振り絞って声をかけてみたら、天龍さんはテキストに片手を挙げた。

「おー」

返事をしてくれた。それが少し嬉しくて、俺は俯いて微笑んだ。

天龍さんが部屋を出て行くと、大和さんが声をかけて来た。

「ふふ、段々とコミュニケーション取れるようになって来ましたね」

「まだ挨拶程度ですけどね……………」

「それでも、ちゃんと会話出来るようになったのだから、素晴らしいと思いますよっ」

「……………それはありがとうございます。あ、これハンコ。遠征の報告書終わりました」

「はいはい。……………え？早くないですか？」

「仕事が早いのが取り柄ですから」

そんな話をしてると、またノックの音が聞こえた。

「提督！提督！」

「ん？」

レーベさんの声だ。

「は、はい……」

「来た！ついに来たよ！」

「……………あ、あの……………とりあえず入って下さい……………」

「う、うん！」

そう言つて、中に入って来たのはレーベ……………ではなく金髪の美人さ  
なんだった。これは演習中に何度も見たことがある。その度に羨まし  
い思いをして来た。

「グーテンターク。私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマル  
ク。よく覚えておくのよ」

「……………」

「ち、ちよつと、聞いているの？」

なんか言われた気がしたが、感動のあまり声が出ない。もう何年こ  
いつのこのことを見ていなかったか……………。

「提督、提督？」

「っ！ な、何……………俺は死んだの……………」

「提督……………」

大和に肩を揺らされてようやく目が覚めた。目の前にはビスマル  
クさんとレーベさんがいる。

「……………ちよつと！聞いているの……………私よ！ビスマルク！」

「あつ、す、すみません……………」

えつと……………どうしよう。自己紹介した方が良いかな。や、でも……………  
どうしよう……………緊張して来た。ていうかテンパって来た。チラツ  
と大和を見上げた。

察した大和は代わりに説明してくれた。

「すみません、ビスマルクさん。提督は少し、他人とコミュニケーション  
シヨ  
ンとるのが苦手です、気を悪くなさらないでください」

「何よそれ。せつかく私が来てあげたのに、まともに挨拶もできない

なんて。この艦隊大丈夫なの？」

直後、ビキツと隣から青筋の立つ音が聞こえた。大和をチラツと見ると、ニコニコ笑顔なのに負のオーラを出していた。とりあえず、控えめに言ってすごく怖かった。

とりあえず、俺がなんとかするしかない。次に喋るのがビスマルクさんか大和だったら、その時点で喧嘩勃発待った無しだ。

「……………れ、レーベ……………」

「なんだい？提督」

「……………びつ、ビスマルク、さんを……………その、案内して……………」

「分かったよ。ビスマルク、鎮守府を案内するから、行こう」

「分かったわ」

ビスマルクさんはレーベと部屋を出て行った。

「……………ふう」

とりあえず一安心して一息ついた。だが、隣の大和は不機嫌だ。むーつと唸って腕を組んでいる。

「……………なんですかあの人は」

「き、気が強い子なんだよきつと。戦艦には結構多いし、あまり気に入らない方が良いでしょう」

「でも…提督を悪く言う方は許せません！」

な、何でだよ……………と、思ったが俺だって大和を悪く言われたら半殺しにしたくなるだろうし、同じか。

だけど、怒りたくなるのは仕方なくても、怒って良いのかは話が別だ。

「ま、まあほら、でも俺は気にしないから怒らないで下さい。大和の方がこの鎮守府では先輩なんですから、そこは余裕を持って対応しないと」

「……………そうですね」

何とか頷いてくれて、俺はホツと胸を撫で下ろした。だが、大和の怒りはまだ収まっていなかった。

「……………それと、ビスマルクさんが来た時、すごい嬉しそうでしたね。ぼーつとして私の声も耳に届かないほど」

「へっ?」

「……………」

「……………怒ってます?」

「……………っーん」

声に出すなよ…………いや、可愛いけど。

本来なら、俺は仕事とプライベートは分けたいんだけど、俺のポリシーを貫き通して大和が不機嫌なんじゃ仕方ないからなあ。

あまりキザな真似はしたくないが、映画やドラマの恋愛に憧れてる大和にはこれが一番良いか。

「大和」

「? なんですか……………んっ」

大和の黄色いスカーフみたいなのを引っ張って顔を近づけさせると、口にキスをした。

「……………これで許して下さい」

「……………は、はいっ……………」

大和は顔を真っ赤にして俯いた。うん、可愛い。

「じゃ、さっさと今日の仕事を終わらせましょう」

「……………そ、そですネ……………」

とりあえず、明日からビスマルクさんのレベリングだな。ちょうど、大和はお休みしてて、MVPも取りやすいだろうし。

十十十

翌日、ビスマルクさんの出撃の日。古鷹さんについて行ってもらって、なるべくビスマルクさんにMVPを取らせるようにしてもらった。プライド高そうだから、MVP取らせてることをなるべくバレないように。

出撃が終わるまで、とりあえず書類仕事に目を通し、こちらからの指示は俺が大和に伝えて、大和から旗艦のビスマルクさんに伝えてもらった。ま、指示と言っても、陣形と進撃撤退だけだが。

今のうちに開発建造遠征の報告書と任務を終わらせ、書類を大和に

渡してハンコを押してもらっている。  
すると、向こうから通信が入った。

『敵艦隊撃沈したわよ』

「任務完了だそうです、提督」

「じゃ、撤退」

「撤退です、ビスマルクさん。戦果報告お願いします」

『私が3隻、古鷹と飛龍と神通が1隻ずつ撃沈したわ!』

「分かりました。では、MVPはビスマルクさんで」

『私が一番ですって? 何言ってるの、あたりまえじゃない。良いのよ? もっと褒めても』

「あ、あははっ……では、帰投して下さい」

『了解したわ!』

通信は切れた。

「……………どうするんですか、提督。ビスマルクさん、すごく喜んでますが」

「まあ、時には優しい嘘も大事だから」

「……………バレなきや良いですけど」

「そこは上手く、たまに古鷹さんとか飛龍さんあたりにMVP取ってもらえれば大丈夫でしょう」

「そう言われればそうですが……」

うん、大丈夫。例えば体育のサッカーで、周りに嫌われて俺と競り合うのを避けられてるのにも気付かずにガンガン活躍して一人でいい気になってても、気付かなければダメージは無いんだ。気が付かなければ。

「……………提督? 目が濁ってますよ?」

「……………ごめん」

「い、いえ……。また何か思い出したくないことでも思い出されたのですか?」

「……………少し」

「大丈夫です。今の提督には大和がいます」

「……………ごめん」

頭を撫でられ、なんか母親に慰められてる気分になった。  
すると、第一艦隊が帰投した。

「提督！帰還したわ！」

「……………お、お疲れ様、です……………」

「聞いた？ MVP よ！ MVP！ 着任してまだ間もない私が！」

うっ、良心が……………でも、この嘘も彼女の育成の為だ。

「……………じ、じゃあ……………部屋に戻って、結構です、ので……………」

途切れ途切れにそう言うと、何故かビスマルクさんはジト目で俺を睨んだ。それで、目の前に歩いて来て、俺の前に立つと机に両手を置いて言った。

「もっと褒めても良いのよ？」

「……………は、はいっ？」

「だーかーらー！ わ、私の事をもっと……………こう、もっと褒めてくれても良いのよって言うてるのー！」

「…………………………」

え、ど、どうしよう…………。チラッと大和を見上げると、援護射撃をしてくれた。

「ビスマルクさん、提督は忙しいので、またの機会に……………」

「い、良いじゃない！ 少しくらい褒めてくれてもー！」

めんどくさっ。大きい睨かよこいつ…………。俺の中で「ビスマルクとかいう鬼強艦娘」から「ビスマルクとかいう睨艦娘」にイメージが変わりつつあるぞオイ。

「……………褒めて、って言われても……………」

どうすりゃ良いんだよ…………。隣の大和を見上げて助けを求めると、俺に耳元で囁いた。

「……………頭でも撫でてあげれば良いんじゃないですか？」

「……………え、でも……………」

大和の前で？ それは流石に…………。

「……………大丈夫です。私とはもう……………その、シっちゃってるわけですし……………そのくらいでは嫉妬しません」

「……………そ、そうですか？」

「…………でも、まずはちゃんと許可を取って下さいね」

「……………は、はい」

しかし、少しハードル高いな……。でもまあ、向こうは大きい暁だし、ドン引きはされないはず…………。

小さく咳払いしてから、俺はビスマルクさんに声をかけた。

「……………じ、じゃあ、その…………頭でも、撫でましようか？」

すると、ビスマルクさんはキョトンとした顔で数回瞬きすると、急に顔を赤らめて目を逸らしながら帽子を取った。

「……………な、撫でたいなら、撫でれば良いじゃない……………」

「……………」

暁かよマジで、と思いつながら、俺は頭に手を伸ばした。

「……………」

しばらく無言で撫でると、ビスマルクさんは大人しくなった。やめ時が分からなくて、1分ほど撫で続けて、大和に「いつまで撫でてるんですか」的な感じで脇腹を抓られたので手を離した。

「……………こ、これで、良いですか？」

すると、ビスマルクさんは帽子を被って早足で執務室の扉に向かった。

「あ、明日からも頑張るわね！」

それだけ言って、部屋を出て行った。

俺は、この時知らなかった。今回の事が、まさか波乱の幕開けになることになるなんて。

## 第27話 言ってることがブーメラン。

翌日、またまた出撃が終わり、MVPをビスマルクさんが取って来た。で、俺の机の前に帽子を取って頭を下げてきた。

「もーっと、褒めても良いのよ?」

「え?あ、は、はい……」

またまたビスマルクさんの頭を撫でた。すると、「えへへっ」とビスマルクさんは嬉しそうにはにかむ。そして、その度に隣の大和から轟ツと紫色のオーラが発せられた。

「ビスマルクさん?そろそろ良いんじゃないですか?」

「何よ、他の子達と違って練度が低いのにMVPを取ったのよ?別に褒められてもあげても良いじゃない」

「……あけても、ですって?」

「ちよつ、や、大和さん落ち着いて!」

「ちよつと提督、誰が手を止めても良いと言ったのよ」

「……す、すみません……」

引き続き頭を撫でると、大和の目がギンツと光った。だから怖いって……。

俺は冷や汗を流しながら目を逸らした。手を止めても手を止めなくても怒られる……なんだこれ。何この板挟み。

そのまましばらく撫でると、ビスマルクさんは帽子を被った。

「……ふう、もう良いわ。じゃ、また明日頑張るわね、提督♪」

ビスマルクさんはようやく満足して部屋を出て行った。時計を見ると、今の時間はほんの2分弱だった。マジかよ、俺はてっきり2時間経ってるものだ……。

「……提督、随分と鼻の下が伸びてらっしゃいましたね」

「えっ?」

「……伸びていましたよ」

「そ、そんな事ないですよ」

確かに、明らかに成人した外国人女性に甘えられるのは悪い気分で

はなかったが、それ以上に恐怖があったので鼻の下を伸ばす余裕な  
かなかつた。

「……………どうだか」

それでも、大和は信用してくれなかった。完全に拗ねている。仕方  
ないので、隣に座ってる大和の肩を抱き寄せた。

で、頭に手を置いた。

「……………そんなつもりはなかったんだって。これは本当。だから怒る  
なよ」

「……………ふ、ふんっ。この大和がこんな事でいつまでも許すと……………」

「怒るなよ。俺は浮気なんてしないよ。今はビスマルクは新入りだか  
ら、ある程度、ああいっただ甘えは許してるけど、1回目の改造が終わっ  
たらちゃんと他と同じように扱うからさ」

「……………他の子にはあんな風に撫でてなかったじゃないですか。大和  
は誤魔化されませんよ」

「それは誰もあややって撫でて、とか言ってこなかったからな。この  
鎮守府で俺が特別扱いしてるのは、大和だけだよ」

「……………ふ、ふにやあ……………」

許された。なんか心配になる程チョロいなこの子。まあ、今言った  
のは本音ではあるけど。

あと、ある意味では大鳳さんも俺の中では特別な子だけだね。あの  
子の場合、こう……………いや、思い出すのはやめよう。クロスボウで何  
処から狙撃して来るか分からんし。

……………でも、実際の所、いつまでこれで大和が大人しくしてくれ  
るか分からないからなあ。明日からは少し対策考えないと。

俺は大和の頭を撫でながら思考を巡らせた。

十  
十  
十

翌日、俺は第一艦隊が帰って来てビスマルクさんご報告に来る前  
に、俺は仕事を速攻で終わらせてソファで寝転がった。寝たふりな  
ら向こうも諦めるだろう。

ちゃんと仕事も終わらせたし、文句は言わせない。

「じゃ、おやすみ大和。ビスマルクさん来たら誤魔化しといて」

「はい」

断じて、ただ寝たいわけではない。

俺はとりあえず目を閉じた。……………ビスマルクさんが来るまではこのままだな。

「……………」

なんか、目の前に何かある気がする。目を閉じてても、影を感じることは出来る。電灯の光が遮られた感じがした。

……………薄っすら目を開けると、大和の顔が目の前にあった。

「……………」

えっ、何してんのこの人？なんで段々近付いて来んの？え、襲ってきてんの？バカじゃん？俺が起きてるの分かってるじゃんお前は。でも、俺が起きちゃったらいつビスマルクさん来るか分からないし……………どうしよう。

その時だった。

「失礼するわ！艦隊帰投し」

「わひゃあああああ！！？」

案の定入ってきて、目の前の大和はすごい悲鳴をあげてひっくり返った。俺もビスマルクさんも驚いてる。

「ど、どうしたの大和……………」

「ッ、ッ……………！な、何でもないですよ……………！」

「そう？まあ良いわ。それより、提督！私、またMVP取ったわよ！」  
良かったな、大和。ビスマルクさんがバカで。

「ねえ、提督……………あれ？提督は？」

ビスマルクさんは業務机を見たが、そこに俺の姿はない。まあ、こっちで寝てるからな。

ソファで寝てる俺を見つけるなり、ビスマルクさんは俺の方に来た。

「もう、何よ。寝てるの？」

「え、ええ。昨日は夜遅くまで仕事していましたから」

ある意味本当のことだ。昨日は夜遅くまでハンターの仕事でデイアブロス狩ってたからな。

「……まったく、昼のうちに仕事終わらせないからよ」

言いながら、足音が近づいて来た。多分、ビスマルクさんだろうな。大和の足音は聞き分けられるし。

と、思ったらまたまた俺の顔に影が掛かった。

「……………へえー、提督って意外と可愛い寝顔してるのね」

「っ！ち、ちよつとビスマルクさ……………！」

「大和もそう思わない？」

「可愛いどころの騒ぎではありません！」

「へ？う、うん？」

おい、何張り合ってたんだよあの人。バカかマジで。

「じゃあ良いじゃない。ふふ、提督の頬柔らかいわね」

ちよつ、頬をツンツンするなっていうか顔近い近い近い良い匂い。

「び、ビスマルクさん！いきなり何してるんですか!?!？」

「あ、そ、そうよ！なんで提督の頬なんて突いてるのよ私！」

「そ、そうです！そう言うことは私に許可を取って……………！」

「私が頭を撫でてもら……………じゃなくて、撫でられにあげて来たのよ！」

「いやそうじゃなくて……………!!?？」

「提督！起きなさい！」

おーい、人が寝てるのに御構い無しかこいつ。どうしよう、観念した方が良いかな。

うだうだ悩んでると、大和が口を開いた。

「ま、待ちなさい！分かりました！大和が撫でてあげます！」

おお、その手があったか。でもね、その言い方をするとビスマルクさんは……………。

「べ、別に撫でてなんて言っていないわよ！撫でたければ撫でても良いのよっ。」

「……………」

我慢しろ大和。頑張れ大和。お前は出来る子だろ？

再び薄っすらと目を開くと、ビスマルクは大和の前ですごいソワソ

ワしている。大和がチラツと俺を見たので、頷いてあげた。すうと、大和は深くため息をついた。

「分かりましたよ……。撫でさせていただきます」

「良いわよ」

それで良いのかビスマルクさん……。いや、本人が良さそうだしもう良いか。

そう思つて薄っすらと目を開くと、大和にビスマルクさんが頭を撫でられていた。随分と嬉しそうな表情で大和に頭を傾け、大和は困つた顔且つ、可愛い妹を愛でるような顔で撫でている。あ、武蔵さんの事ではないよ？あの人はカツコいい妹だし。

そんな感じで、ビスマルクさんに構つてばかりいる大和を見てると、何となくイラつとした。

……。俺も構つて欲しい。

「大和の方が提督より撫でるのが上手いわね〜」

「違いとかあるんですか？」

「ええ。それはもう」

ポケットからペットボトルのキャップを取り出して飛ばした。寝ながら目を閉じて撃つたのに、見事にカーブの曲線を描いて大和のこめかみに直撃し、壁に当たつて跳ね返つて後頭部に当たり、地面に当たつてバウンドしてスカートの中に入った。

直後、ビスマルクさんを撫でる大和の手が止まった。そして、ギギギッと俺の方を睨んだ。

「……………て、い、と、く？」

「……………くかー」

「……………」

寝たふりをして嘘のいびきをかくと、俺の上にまた影が掛かった。薄っすらと目を開けた直後、ゴヌツとこめかみに一発、頭を抑えて悶えた所を後頭部に軽く一発、最後にケツを引っ叩かれた。

「いったい!?？」

「何するんですかいきなり!?？」

「俺は何もしてませーん！寝てましたー」

「ペットボトルのキャップをあの精度で狙えるバカは世界中探してもあなたしかいません!!?」

「……………むー」

「なっ、なんで提督がむくれてるんですか……………」

すると、ビスマルクさんが歩いて大和の手を引いた。

「ち、ちよつと！やめて良いなんて言っていないだけど！」

「す、すみませんビスマルクさん……………」

「パツド」

「何か言いましたか提督!!?」

「ちよつとアドミラル！私が撫でてもらっ……………撫でられてあげてるのに邪魔しないでよー」

「はあ!!?お前いつまで上から目線にいるつもりだバーカ！言っとくけどな！俺もお前も撫でてやってんだぞ!!?」

「なっ……………!!?」

カアツと顔が赤くなるビスマルクさん。

「べっ……………別に頼んでないわよ！」

「ハッ、頼んでんだろどう見ても。大和の方見てソワソワソワソワ眺みたいな声出してたくせによー」

「だ、誰が駆逐艦よ！あんなお子様と一緒にしないでくれる!!?」

「いやいやいや同じだから。同レベルですから。いや、大人と子供の差があるだけ、ビス子の方が下かもしれんわ〜」

「だ、れ、が、ビス子よ!!?あんなブツ飛ばすわよ!!?」

「やってみやがれ！本部にいた頃は『天下無双の孤王』と呼ばれた俺の実力を見せて差し上げましょうか!!?」

「何それかつこいい！艦娘の腕力に人間が勝てるわけないじゃない!!?」

「腕力で喧嘩の腕が決まるとでも?これだからお子様はな！ザクとクインマンサでも乗ってるのがアムロとシャアじゃザクが勝つんだよー……………や、流星にそれはないやごめん盛った」

「そこまで言うならやってやろうじゃない！表に出なさい」

「上等だよ!!?俺が勝ったらお前明日から一週間、カエル倒立で生活

しろよ!!?そして大和に二度と近づくな!!?」

「私が勝ったらあなたは一週間、耳に椎茸を挿して生活しなさい!!?」

「よし、では表に」

「やめなさい!!?」

ゴヌツと大和の拳が、俺とビス子の頭に降り注いだ。シユウウウ……と煙が脳天から上がり、俺とビス子は頭を抱えてしやがみ込んだ。

「二人とも、それ以上喧嘩するなら私は二人にもう二度と構ってあげませんよ」

「ぐっ……………」

こ、このやろう……………それは卑怯だろう……………!ていうかビス子は構って欲しいこと否定しないのな。

「ビスマルクさん、今日はもう終わりです。部屋に帰って下さい」

「……………はい」

ビス子は部屋に戻って行った。俺はソファアの上に不機嫌そうにふんぞり返った。

……………はあ、なんで怒ったんだ俺……………。あそこは黙って見てるべきだっただろ……………。馬鹿は俺だったよ畜生……………。

「まったく、提督。なんで急に……………提督?」

「……………はあ……………最悪」

「何がですか?あ、すごく欲しがっていたビスマルクさんと性格が合わなかったからですか?」

「いや……………そんなんじゃないよ。まさか、俺が怒るとは思わなくて……………」

「……………」

「すみません……………」

情けない……………。昨日、大和に偉そうに言っておきながら何してんだよ……………。

肩を落としてると、大和は俺の頭に手を乗せて撫でてくれた。

「?」

「落ち込まないでください。私は、提督がヤキモチを妬いてくれて嬉

「しかったですよ?」

「……………大和」

「まあ、喧嘩したのは良くありませんでしたけど。そこはちゃんと反省して下さいね」

微笑みながらそう言われ、思わず涙が出そうになった。この人は本当に天使か? 天使なのか?

「……………大和」

「? なんですか?」

「……………今日だけ、俺の部屋で寝ない?」

「……………甘えん坊」

「うるさい」